
異世界っぽいもの(仮)

未飼育

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界っぽいもの（仮）

【Nコード】

N4718W

【作者名】

未飼育

【あらすじ】

ネットゲっぽいものから月日流れて幾年か、いつものメンツが久々にカラオケなんぞをした帰りに・・・的なお話。

見覚えあるような無いような変な場所に放り出されて、さあ大変。ひとまず酒飲んで、道端の草でも詰みつつ行きましようか大麻発見・・・というような、変わったこと一つない極平凡な日常を描く愛と感動の（存在し得ない）誰得話、開始。

「最近痴口リンが呼吸するのと同じ頻度で腐臭を撒き散らすんだが
どうしよっ?」

「よし、埋めようか」

「で、対抗してこちらはセクハラトークを繰り出してな?」

「うん、刺した(過去形)」

「コポオ」

今日も、平和ですね。

気づけばそれは懐かしく(前書き)

フライング気味に導入投稿。

ネトゲの方と並列で書いていく、かもしれませぬ。

気づけばそれは懐かしく

友人達とのサバト染みたカラオケが終わり、部屋を出て精算に向かう途中のエレベータ内において。

ふっと一瞬、明かりが消えた。

ん？ 停電？ などの声が聞こえるが、それも一瞬。

こういう時は階ボタンの下にあるマイクで連絡するんだっけ等と考えていた自分が、再び明るくなった周囲に愕然とするのも、また一瞬。

友人達は、消えていた。

更に言うなら、エレベータ内ですら、なかった。

「なんだ、これ・・・」

聞き覚えはあるが自分のものではない声を搾り出す。

光源らしきものが見当たらないのに、やけに明るく感じる、密室。

目の前には、扉一つ。

左右、後ろ、上下に、退路無し。

さあ、ススメ！ と言わんばかりである。

正直、行きたくないんですが。

しかしこの状況じゃ、夢と思って寝てみるか、扉を開けてみるか・・・
もしくは。

「りれみとー！」

ダメでした。

ちなみにルーラもダメでした。

夢のない夢だこと・・・では、気を取り直して。

扉のノブに、指が触れる。

パリッと、痛みのない程度の静電気が走る。

反射的にイテツと言ってしまうのは、お約束ということだ。

離れてしまった指を再びノブに巻きつかせ。

くるりと回して扉を開き、一步前進こんにちはっ！

扉をくぐったその先に待っているものは。

フリーフォール、自由落下というやつでした。

着水まで数秒、湿って張り付く衣服が愉快に体を拘束する。

なんとか体が浮くように、とだけ心がけ、必至に咳き込んで肺から水を追い出して。

嗚呼、川の流れのように・・・というか、普通に川流れしてなんとかへばり付いた岸でグッタリしている自分がいる。

ただ、自分と言っても見覚えのある手足でなく。

見覚えのある服装でなく。

声も、持ち物も、まるで見知らぬ別人のもの。

・・・ん、少しだけ、違和感。

見覚え、は、ある気がする。

どこでだったか、いつだったか、それなりに長い付き合いだった気が、する・・・。

しかしまあ待てますすべき事がある。

「服、絞ろっ」

ありがたい事に、寒さを感じない。

むしろ、蒸し暑さを感じる程度の暖かさだ。

日当たりの良い岩に濡れた衣類を貼りつけて、自分もついでに大の

字に。

しかし赤禪とは、コイツわかってやがるな、と、仮住まいの体を褒めてみたりもする。

しばし体を乾かし、ようやく人心地ついて胡座をかく。

ようやく、周囲を見回す余裕が出来た。

と言っても、川と、それを囲む岩壁しかないわけですが・・・木すら見当たらない。

うわぁ、乾かしておいてなんだけど、また濡れて下流に行くはめになりそう・・・等と思っていると。

岩に張り付かせていた衣類から今にもこぼれ落ちようとしている謎の小袋。

慌ててその逃亡を阻止、ついでに中身を拝見してみる。

巾着状の口を開いて、覗き込んだその先は。

なんだこれ。

袋の中身が、理解できるけど視認できない。

何を言っているかわからないだろうけど、一言で表すならソレである。

中身が見えているわけでないのに、中に何が入っていてそれを取り出すことは出来る・・・。

本当に、何だこれ。

でもひとまず、なにか適当に出してみる。

巾着袋に手をつっこんで。

それを、引っこ抜いた。

曲がった棒。

木刀の小太刀くらいの、曲がった棒。

さらには、切っ先に握りこぶし大の塊が。

材質、分からん、なんぞこれ。

重量、軽い、中身中空なのかね？

硬さ、シャフト部分はしなやかな木製を彷彿とさせる質感弾力、切

っ先の塊はエッジの効いた硬質感。

メイスみたいな感じがしたので、とりあえずそこらへんの岩を殴ってみる。
ミチツ。

謎の手応えと共に、先端の塊が染みこむように岩にメリ込んだ。

「え、弾かれない？ 普通」

かなり愉快に食い込んだそれを、苦もなく引きぬく鍛えられた筋力。うおお、鍛えてるなー外の人っ、と、仮住まいの体を超賞賛。

この体じゃなかったら、案外川で溺れて死んでいたんじゃないだろうか。

つと、そうだこの棒の方は傷ついてないかなー、と、何気なく先端部を撫で付けた、その瞬間。

<繭：起動しますか？>

眼球に直接投射される、確認メッセージ。
謎の棒、その先端に真っ赤な切れ込みが入り、くぱあ・・・と左右に剥けていく外郭と、現れる操作パネル。

「あ」

唐突に思い出される、記憶。

懐かしい、昔。

もう5年ほど前になるのか。

先程までカラオケしていた友人達と遊んだ、ネットワークゲーム。そのひとつに、確かこんなものも、あった。

サービスが唐突に終わらなければ、きつと続けていたであろう、あのゲームだ。

ああ、懐かしい。

幾度と無く戦闘をくぐり抜けてきた、叩き上げの体。

なんのドラマもなく普通に手に入れていた、無限袋。

赤フン作って貰ったのは、確か灰色の彼だったか。

あはは、そうだそうだ、ああ、もう、懐かしいなあ！

自分は今操縦桿の操作パネルをメイス状の待機状態に戻すと、それを無限袋につっこんで、生乾きの衣類を手早く身に纏う。

そしてく永久化している魔法を解放した。

軽くステップをふむが如くに、空を翔ける自分の体。

ああ、風を感じて空を飛ぶって、こんな感じだったのか。

あれ、でもあのゲームじゃ風圧なんかは無視出来るはずだったよね？
小首をかしげつつ、かなりの高空まで飛翔した自分。

今しがたまで甲羅干しでお世話になった川が、いまや眼下のシミの一本となり。

周囲グルリと見回して、ひとまず疑問も投げ捨てて。

さあ叫べ、変身だ！

「<変身>！ <悪魔 つ>」

ぼん、きゅっ ぼん！

ああ、満足だ・・・実に、満足だ・・・。

「そついやあのゲームじゃ下着姿にまでしかなれなかったけど・・・
これだけリアルな質感なら、ぶっちゃけ脱げね？」

即実験。

脱げた。

結構どうでもいいことだが、テンションが上がる自分がいた。

歩けばそこは古の

無限袋から昔懐かしの装備を引きずりだし身に纏う。

一品一品に思い入れがあり、一つ一つ身につける度、気味悪くにやけてしまう。

ああ、コイツはこんな感触なんだ。

ああ、コイツのおかげで何度か助かったけど……重たっ。

ひとまず腰に、武器といえば武器で防具といえば防具で、兵器といえはその正体は……な、仮称刀槌を佩く。

現状確認、空気があり水があり、食料はそこら辺にいた小動物を捕まえて調理した。

スキル的にはそれなりのものを持っていたけど中の人が違うからどうにもならないかなーとか思っていたのだが、驚いたことに。

まさに体が覚えている、というレベルで。
血を抜き皮を剥ぎ筋を切って、サクッと下ごしらえが出来てしまった。

中の人スキルでは、こっちは行かない。

地味に全スキル自分限界を目指した外の人、恐るべし。

「ごちそうさまでした、ゲフー」

貴様を喰らって自分は生きる、と誓いを新たに小動物の残骸を土に埋め。

ひとまずのんびり歩いてみようか、と、自分は適当な方向に歩き出した。

山育ちだから山の方向よりは地平線ーとか水平線ーって感じの方向に行きたいねー、等と独り言を言いつつ。

ひとまず寢床でも探さねば、と、欠伸をしながら考える。
適当に歩けば何がしか現れないかなあ、と、淡い期待を込めての徒
歩旅であったが、全くの空振り。
延々と続く草原に、夕日は既に落ち。
何気に轍のようなものの続く道らしきものがあったので、それを延
々と歩き続けてきたわけであるが。

「未知の道にい 一人ゝ って感じだねえ」
そのまんまじゃねえか、と、仲間がいたら突っ込んでくれただろう
か。

そんな他愛ないことを考えつつ。
空には星、月、地には薄闇。

聞こえてくるは虫の音、狼の遠吠え、蹄の音。
ん、蹄？

くるりと蹄の音の方向、後ろを振り向き耳を澄ます。
そして肌で周囲を見るように気配視覚の瞼を開く。

刀槌を右手に、臨戦態勢完成。

<永久化>してるものの開放は、どうしたものかな。
結界系だけで、いいか・・・生きるの優先、いのちをだいに。

ってか、空飛んで様子見でもいい気がするけど・・・もう見つかつ
てるっぽいのでこの理由の分からない現状初の話が通じるエンカウ
ントでありますようにと期待を込めて、待つ。

遠目で分かりづらいが、気配視覚は見逃さず。

一騎の、騎馬。

装備は軽装、何がしかの伝令兵、といった感である。
接触まで、あと数秒。

普通に通り過ぎる可能性も考え、道の横に避けて待つ。
はたして。

「旅の方が、こんな場所に徒歩で一人か？」

急ぎっぱかった馬の足をわざわざ止めてこちらに話しかけてくる軽装騎馬兵（不確定名）。

日本語ではない言語、外の人は言っている、コレは共通語だ、と。いよっし、話を通じる出会いゲツト。

このままなし崩し的に貴様のハラワタを喰らって・・・去れ魔王。

「はい、仲間とはぐれまして。 轍のある道があったので、気長に歩けば村でもあるか、と歩いていました」

ひとまず端的に説明を試みる。

腰は低く、腰は低く・・・顔が無表情にならないように、少しだけにこやかに。

そう心のなかで唱えつつ、軽装さんの返答を待つ。

「それは大変だな。 ここからだと、次の村まで早足で行っても半日はかかるぞ？」

本気で心配そうに言うてくれている軽装さんに好感度アップな自分がいる。

半日かー、時速五キロで12時間として・・・飛んで1時間掛からないね無問題。

「うわぁ、半日ですか。 でも野営準備も面倒になってきたので徹夜でのんびり散歩と思って歩きます」

わざわざお急ぎの足を止めてまで教えていただいてありがとうございます、と、深々頭を下げてみる。

「ああ、まあ、旅の方がそれならそれでいいのだが。 よかつたら、後ろに乗って行くかね？」

とても呆れられた声色でございました、まる

ってか、この人こんな得体のしれない一人旅の男を乗っけて行って

くれるつもりだった、だと……？

いけない、こない人には自分に関わった拳句に変な方向から死亡フラグとか立ちかねない状況をプレゼントしてはいけない。

「お気持ちだけいただきます、ありがとうございます。　そういえば、お急ぎの様子でしたが、行かなくても平気でしょうか？　ぬるりと予先を変えてみるぜ……さあ、どう来る……。」

「うむ、そうだった。　見ての通り急ぎであった。　共に行かぬのなら私はこれにて失礼する。　このあたりはさほど魔物なども湧かぬが、道中気をつけて」
早口に言い切ると、軽装さんは颯爽と馬の脇腹に蹴りくれて走り去っていった。

そういえば、こういう場面見ると毎回思うが、拍車とつけた靴で馬蹴りつけるって、当人……当馬からしたらどんな気持ちなんだろうね。

別にあんな無くても合図くらいで走ってくれないかね、訓練すれば……。

と、話がそれた。

さて、こうして情報は手に入り、人もいる事がわかり、言語はゲームの共通語と来たもんだ。

えーっと、シンプルに行くなら、ゲームの中とかいう流れでしょうかこれ。

次点で、やけにリアルでしつこい夢。

もしくは……酷似した、別の、世界とか……？

実は中の人の記憶そのものが作り物と言う線もあり……か……？
数秒考えたが、答えなど出るわけも無し。

そもそも、どれが正解でも、結局は食って寝て生きて行く方向しかない。

ん、自殺してみる？

いやいや、人間誰しも必ず1回死ねるんだから、別に慌てなくてもいいもんじゃよ。

早くそのワイルドカード切ったところで、自分自身が無くなるのが早いか遅いかの違いだけじゃないか。

さて、それではとりあえず。

「のんびり、歩こうか・・・いきなり飛んであの人より早く着いたら何を言われるか分かったもんじゃなしのう」
自分は静かに暮らしたい。

ひとまず人間の生活圏にいたら酒屋でもやってのんびり暮らそう。そして金を貯めて・・・旅して、みようか・・・。

万が一友人達も同様の状態だとしたら・・・探さにゃ、ならんしなあ。

あ。

そっぴや、袋の中に、金あるんじゃ・・・。

金ー、金ー、と、念じて無限袋を逆さに振ってみる。

ペチン、と、地面に銀貨が三枚落っこちた。

以上。

赤貧でした。

夜の散歩も楽しいもので。

ひとまず貧しさに頭が醒めたので、道すがら外の人技能の薬草知識などを動員して文字通りの道草を食いつつのんびりと歩を進める。

無限袋の弱点、生物入れると即死するという点から生薬関連をぶち込むのは躊躇われるため、両手に草の束を握りしめて夜道を徘徊する一人旅の男が完成。

気付けにと袋の中の大量備蓄酒を飲み始めたりしたものだから、既にすごいへべれけに進化。

「おおつと、いけない草を発見！。 ゲットだゼエ
具体的に言つと大麻。」

コカの葉っぱもあるよ！

ケシの実を忘れてはいけないな、BOY？

ひゃっふー、ひよつとしてここが天国？

「ってなんで麻薬畑やねんー！」

即時廃棄。

恐るべし知らない土地の道端雑草。

いつきに酔いが醒めたわどうしてくれる……。

そんな感じで夜の散歩を満喫していたため、愉快に時間が経過。

既に空の端が薄明かりを帯びてきている。

結構麻薬刈りで時間を食ってしまったか……こんな事ならもう少

し早く飛んでおくべきだったか。

仕方なし。

飛んでるの見つかって目立ちたくもないので。

このまま歩け、歩け、歩けー、と歌いつつ両手の薬草をブンブン振

つて道の真中を暴歩する。

時給は12ガメルくらい。

襲い来る眠気に対抗するため半ばヤケで適当な歌を歌い、思い出し

たように道草を摘んで歩き。

そこを発見したのは、太陽も空の半ばに登ろうか、といった時間の

ことだった。

苔むした石作りの住居……の、残骸。

記憶にある姿からはまるで似つかぬアフターがそこにある。

道から外れた小高い丘の、見覚えあるその頂きに。

自身が日常大工でコツコツ建てた石造りの家が、あった。

うわぁゲーム内、確定・・・か？

混じればそれは穏やかな

いつものメンツハウスの悲しいアフターに打ちひしがれつつ、自分はひとまず元・1階丸テーブルの下・・・辺りを搜索する。

かなりしつかりと作っておいたはずなので、それなりの年月は耐えていると信じたい・・・。

くくく、実はこの家の地下に秘密の居住空間が眠っているとは仲間たちも知るまいて・・・！

まあ、ぶつちやけ家の材料取りに石掘った採掘坑なんですかね？

ざり、ざり、と風雨に溶かされた泥や砂の層を削り、床石が顔を見せるまで作業を繰り返す。

ようやく出てきたそれは、テーブルを固定していた金属部品が綺麗に錆びきり朽ち果てて固定穴が虚ろに開く眼窩のようになった穴あき石板。

テーブルが健在なら、テーブルごと床板が開いて隠し扉が出てくる設計だったのに・・・。

引っ剥がすのが面倒になったので床板を刀鎚で叩いて砕く。

粘土板でも崩すようにそれを砂のように粉碎すると、そこに見えるは木製の跳ね上げ式床扉。

さすがの無傷。

伊達に魔法で施錠してないぜ！

・・・<施錠>魔法に、腐食防止やらの機能がついてて、よかった・・・。

<灯火>にて視野を確保しつつ、地下へ降りる。

ヒヤリとする空気と、舞う砂埃。

ああ、どれだけ時間が経ったんだろうね、ここは。

正直、ゲーム終了からの5年程度じゃここまではならない・・・と、

素人考えで思えるほど、メンツハウスや地下の状況は、荒んでいるように思う。

時間の流れが違うの、か？

もしそうなら、そして、自分の本当にいるべき場所の時間が緩やかに過ぎていてくれるのなら。

有り難いかな、と、少し思う。

扉の表面をく偽装＞魔法で誤魔化する。

そして、ひとまずの拠点となる地下部分の居住性を高める行動に出たいと思う。

なにせ銀貨三枚が全財産の現状である、ぶっちゃけると、宿代もでねえ。

それより何より、今は徹夜明けなので、とてもとても眠いのである。採掘坑は階段状に斜め下方向に掘り進め、頃合いを見て横坑道を掘っていく方式で作業していた昔の自分を思い出し、周囲を確認。穴だらけ。

うわーい、頑張りすぎじゃね、昔の自分。

確かこつちに休憩所作った気が・・・と、臆気な記憶を便りに歩き出す。

歩くこと数分、メンツハウスの建っている丘の中程くらいまで地下を掘り進んだ地点。

朽ち果てること無く、ただホコリをかぶった木のドアが、自分を出迎えてくれた。

ホコリを吹き散らしてノブを回し、休憩部屋の中へと入る。

アラこんなところに井戸掘ったかしら？

ああ、そういえばいきなり水源掘り当てたんで、慌てて井戸形状にでっち上げたんだっけ……。

ひとまず井戸水を飲んでみる・・・うまあい。

よかった、ひとまずこれで川の水とか飲まなくても済みそうだ。

後は寢床寢床・・・あ、そういえばここに来た最後の日に干したまんまだったつけ・・・風雨に消えたか。
仕方なく無限袋から寢袋を取り出すと、スポツと包まり即時就寝。
おやすみなさいませ・・・。

不意に、目が覚める。

睡眠が足りた証拠か、雲がかっていた意識の混濁が綺麗に取れていた。

「さて、まだ表が明るいいのだけど」
ひとまずここにメンツハウスがあるということとは。

あと少し歩けば、皆の拠点、愉快空中庭園完備のアルカディア。

クラフター達が自重しなかった結果の産物。

<塔>が、あるはず。

幸いにも、丘の上に登り切った時点で夕日と言えない程度の日の落ち様。

自分のはのんびりと丘を降りると、轍残る平地道を鼻歌交じりに進んだ。

そして。

自分の目の前に広がる、記憶にない村。

その奥、よく覚えている<塔>のあった場所には。

世界樹、とでも呼びたくなるような。

<塔>を飲み込んだであろう、大小様々な樹木が一本の樹として成り立つ異様が、そそり立っていたのだった。

「絶対に、5年じゃこうならない」

100、200、いや、もつとか。

ここがゲームの中だとするならば。

この中の時間は、果てしなく速い流れで、進んでいるのか……。

<世界樹>を馬鹿みたいに仰ぎ見る。

木々の端から除く<塔>の石壁が、若干のひび割れのみで健在そうに見えるのだけが、自分の心を若干和ませた。

ひとまず、自分は見覚えのない村……<世界樹前>とでも呼ぼうか、に、たどり着いた。

畑仕事から早々に引き上げる農夫に軽く頭を下げながら村の中まで同道させてもらう。

「やあ旅人さんかい？ アンタもウチの自慢の樹を見に来たのかい？」

ここらじゃ一番の観光名所だからなあ、と、気のいい農夫が笑いかけてくる。

「噂以上に凄い代物ですね。自分は仲間と一緒にアレを見に来たんですが……その仲間と途中ではぐれてしまって。こちらの村にここ数日以内に訪れて滞在している旅人とかはいらっしゃいますか？」

作ったヤツらを知っている、とは言わずに、ひとまず褒めから入ってみる。

「ここんところは旅人もすっかり減ったしなあ、一時期に比べて宿屋も減っちゃったし、虱潰しに探してみるくらいしかないんじゃないかなあ」

ワシは朝から夕方まで道から外れたところにある畑で仕事なんで旅人さんが来たかどうかは分からないんだわ、と、済まなそうに頭をかく農夫。

「いえいえ、もしご存知でしたら、位の気持ちだったのでお気になさらないで下さい。ひとまずオススメに従って宿を回ってみるとします」

ありがとうございました、と、にこやかに手を振って家路につく農夫と別れる。

さて、二人目のエンカウトも予想外に善良そうな人だったな・・・などと考えながら、ひとまずそれほど広くもない村の多くはない宿屋を探して徘徊することに。

全三軒の宿をめぐる。

残念ながら、友人達はおろか中の人が入っていきそうな顔見知りも居らず。

受付の人に「泊まって行くなら安くしておくよ」と言われ「あ、お金ないんです」と切り返す居たたまれなさを三度味わって、収穫なし。

いや、ひとまず今はまだ友人知人がいない、という情報を得た、か。しばらくは、この村を拠点に・・・待ってみるとしようか。

徒に動きまわるよりは、きつと合流できる公算は高くなるだろう。

友人達が、本当に自分と同じようにこの世界上にいるなら、という条件が重く心に押し掛りはするが。

ひとまず、村長さんの家をそこら辺の住民を捕まえて聞いてみることに。

観光名所のくせに旅人が珍しいのか、面白そうにこちらを見てくるオバさんに愛想よく笑みを返し、得たい情報を得る。

なんのことはない、このオバさんの旦那さんが、村長であった。

サクツと晩酌中の村長さんを直撃し、ひとまずこの村をしばしの拠点にしたい、と申し出る。

仕事などがあるなら、なお嬉しいですよ、と伝え、出来ることを伝える・・・全体の、一割くらい。

力仕事に鍛冶仕事、料理洗濯荒事から応急手当・・・位は伝えたか全部伝えたら、絶対胡散臭い目で見られると言つ自覚はある。

特殊技能を除き、全部自分限界まで鍛えた自称「まるまり」は、伊達ではないのだ・・・。

「最近の旅人さんはなんでも出来るんだねえ」

村長さんの社交辞令に照れてみせたりしつつ、一応の了承を得ることに成功。

今のところ無一文なので、村近くの丘にある廃屋辺りにテント暮らししています、とだけ伝え、村長家を後にする。

こここのところ寒くなってきたから風邪を引かないようになあ、と見送られ。

かくして、自分の拠点に、帰って参りました。

友人知人はまだ見ぬけれど。

素朴な村人たちに囲まれて、のんびりと長閑に。

わずかながらの、穏やかな時間が、流れた。

思えばそれは違和感で

<世界樹前>到着から数日が経った。

メソツハウス地下の洞穴を住処として、時には村人の雑事を手伝い、時には無限袋の備蓄酒を売り払い、時には柵を破って進入してきた暴れ熊や暴れイノシシを撲殺したりした。

ああ、実に穏やか・・・そういえば全然魔物の姿、見ないなあ。

野生動物は偶に遭遇して貴重な動物性タンパク質になっていただけでいるのだけれど。

そうそう、クエスト受けたり個人取り引きしたりと地味にゲームで大活躍だった掲示板が、存在しなかった。

ちよつとここがゲーム内だという仮説が揺らいだ・・・のかな？

良く似た世界説が最有力に躍り出た。

自分の適当な脳味噌じゃ、結局結論は出ないので。

ひとまず。

今を、生きることにする。

ひなびた村ではさほどの酒需要も見込めず（消費量が日に30リットルほども行けばいいほう、だそうで、現状の仕入れで充分すぎるとのこと）、喰うに困ったら換金してもらおう程度でいいかなあ、という現状。

仕方なくその他生活必需品作成や村周囲の柵の補強改造を行う自分工務店開業。

村に魔法を使う人を見かけないため、何となく技術だけで色々やってみている。

嬉しいことに周囲の鉱山は記憶と違わぬ位置にあり、かつ村人は知らなかったらしく手つかずで残っていた。

これにより金属の自給自足が可能となった。

鍋鎌鍬包丁・・・と、鉄製品を作成してお金にしてみる。

特に刃物は刀の製法で鍛造したので折れず曲がらずよく切れて、それなりに良い値段で引き取ってもらえた。

・・・仕事場を借りた、鍛冶屋さんに。

「そういえば、魔物の姿をまるで見かけませんが、この辺りは討伐隊でも組んで魔物狩りでもしたばかりですか？」

技術を見込まれて鍛冶屋さんにてアルバイト中。

自分は何の気なしに鍛冶屋の親方に尋ねる。

「お？ えーとな、ああ、お前さんが来る前日の夜とかに何匹か現れて、ちょうど巡回してきた兵隊さんにおっばらわれてたな」
真つ黒になった手ぬぐいでスコールに突っ込んだような有様の汗をふき取りつつ答えてくる親方。

兵隊さんっていうと、ファーストコンタクトのあの人が・・・単騎で複数相手取ったんだ、やるねっ。

「へえ、すごいですねその人。 お会いしてみたかったなあ」
額に巻いた手ぬぐいを絞り、鉄分満点の土に水気をプレゼントしつつ自分、親方が笑う。

「ははっ、会ってどうするんだい？ 喧嘩でもぶっかけるのかい？」
んなわけないかー、と自分の言葉にツッコミを入れて親方は昼にしようやー、と、店を出て向かいの食堂に歩き出す。

「お話を聞きたかっただけですよ、なにか忘れてる気がして」
はい、すぐ行くんで日替わり頼んでおいてくださいー。 と、大声出してみるが聞こえてるかどうか。

普段から鉄叩く音に耳を痛めているせいで、親方結構耳遠いんだよね。

・・・後でマツサージと称して魔法で治してみるかね。

働いた働いた、と、自分は村外れに建てた竹衝立の向こうへ。
先日大量に薪を作って積んでおいたので燃料には困らず。

煉瓦をモルタルで固めて作成された大浴槽・・・いや、それほど大きくないから中浴槽とでもすべきか。

その中へ、すぐ近くに掘った井戸から水をポンプで汲み上げ（ポンプレシピ買って置いて本当によかった・・・）、薪で湯を沸かし。
自分は衝立の入り口にのれんを掛けた。

< 銭湯 開 始 >

ポツポツと家から仕事場から現れる、一仕事終えた村人達。

入り口にあるバケツに銀貨を放り込み、続々と衝立の中へ消える。

長く語ったが要は銭湯、である。

季節的にもまだ暑く、昼間の汗は不愉快で。

ひとまずイメージ的に100円程度の価値かな、と思う銀貨一枚にて利用できる外湯を作ってみたのだ。

案外好評のようで、自分も嬉しい限り。

さて、では自分も一風呂浴びますかい、銀貨をバケツにダंक。

この一枚が、未来のスーパー銭湯へ続くのだっ、とか内心思ってた
りするが今は心の中だけで叫ぶのみ。

一風呂浴びて、流水で冷やしたフルーツ牛乳（セルフ調合ドリンク
バールール）をがぶ飲みして、同じく風呂上がりの村人達にまた明日、と手を振る。

さて、帰りつくまでがお仕事です、と、ブンブカ刀鎚を振っておっぱいおっぱい歌いながら家路を急ぐ。

あと閑話だが、帰り道ジェットは名曲。

一日の終わりはそつと愛の歌とくらあ。

そして上機嫌に終わるはずの一日にケチが付くのは、その数分後のことであつた。

月明かりの下、通常視覚と気配視覚が捉えた光景。

人型武装集団の行軍と、血にまみれ息も絶え絶えに道ばたに転がる、見知つた彼。

乗っていた馬は既に逃げたのか、馬具や馬の体の部品は転がってはいない。

普通一対多数は、こんなものだよ、と。

彼へのトドメに振りおろされた人型魔物の剣を。

<瞬間移動>で割つて入つて受け止めて。

ひとまず手加減なく、蹴り飛ばしてみた。

手応え（足だがね）充分、吹っ飛ぶ人型（不確定名）。

間合いさえ離せば、後はこちらのもの。

足下の血達磨に<白銀癒手>を振りおろし、後顧の憂いを絶つてから。

「推して、参る」

無限袋から愛刀を引き抜き、敵集団に向けて先制の横薙ぎ一文字<カマイタチ>。

灰剣土程の剣腕があつたらこれで終わってるんだよなあ、と苦笑いするのは仕方ないよね？

周囲は夜闇、星明かり程度の光源で動ける敵を鑑みるに暗視もちかとなると、敵は・・・等と考えつつも、自分の足は一定リズムを刻み続ける。

あの器用お化け、こんなのを常に続けてたのか、と、一体だけの分
身維持に必死扱いてる自分をあざ笑ってみる。

しかし、これで充分。

ブラーとかドツペルゲンガーとでも呼べばいいのか、ただ単に像を
ブレさせるといっただけで、回避行動が歴然と楽になる。

開戦から数分経過。

既に集団の半数ほどは斬り捨ててみたが、一向に引く気配もなく。

仕方なし、と腹をくくると。

自分は永久化した魔法を、発動した。

気配の目で見ただけなら背後でグツタリしている彼は気絶中である
うし、もう面倒になってきてもいた。

風呂上りに運動させよってからに。

次瞬、まとめて襲いかかってきた人型武装集団は、自身の攻撃と同
等の魔法衝撃を受け、自滅していく。

<報復>魔法結界。

相手の攻撃を吸い取りそのまま返還する外道魔法である。

野望その二として、長きにわたって金策を繰り返した未だどり着い
た上級魔法であった。

個人的には「因果！」とか叫びたくなるけど自重した。

だから「応報！」は勘弁な。

「死にたくないなら手を出さないように」

ひとまず完全武装の小鬼集団だと見ぬいたので、小鬼語で注意を喚
起してみる。

返答や、如何に？

「手を出さなかったら、通してくれる？」

この先にある村襲いたいので、と真っ直ぐな目でこちらを見てくる。

「大却下、決裂です」

もう帰れよオマ・・・おま・・・ん・・・ああ、おまん食いたいなあ、と現実逃避。

ちなみに生八ツ橋を饅頭状にしたものと思っておくれ。

閑話休題、ひとまず全殺し確定入りましたー。

ああ畜生言葉で意思疎通できても相容れないってのが世知辛すぎる。

更に数分後、十数体の敵性集団の沈黙を確認。
ミッションコンプリート、なんかくれ。

ひとまずそんなに大規模の集団でなくて良かった。

以前ゲームで一騎当千計画やった時の悪夢を繰り返さなくて良かった・・・数時間かかったんだよねえ、あれ。

ともあれ、ひとまず気を失ってる兵隊さん・・・に気付けを。

「・・・もう訳がわからないよ・・・」

意識を取り戻した彼は、傷まぬ体、散らばる死骸、数日前見た不審者、のコンボにQBRる。

「あー、ひとまずこんばんは、月が綺麗ですね」

ひとまずジャブとして挨拶してみる。

ってかこんなプロポーズわかるかよ夏目先生。

あとどうでもいいけど、今、月が本当に綺麗。

「あー、うー」

もう本当に何を言っていないやらという彼に、ひとまず手を差し伸べると。

「立ちませんか？ あと、ボロボロ過ぎてすごい格好ですよあなた」
さしあたって村に行きませんか、と、立たせた彼を促して来た道を
引き返し。
もはや無言になってついてくる彼に、言い忘れていたセリフを。

「改めまして数日ぶりです。 自分、メリウと申しますが、あなた
のお名前をお聞きしても宜しいですか？」
そういえば何か忘れてるなあ、と漠然とあつた違和感。

単にファーストコンタクトの兵隊さんの名前、聞き忘れてたっけ
けのことだった。

探索それは存外の

帰り道にて巡回兵のモノ氏を助太刀してから一夜が過ぎた。ひとまず適当な宿屋にモノさんをぶち込んで自分は帰宅。

色々詮索されそうな勢いもあつたので「一晩休んで頭の中整理してから話しましょうか」と、ぶっちゃけイイから寝て起きろ、と納得させたりした。

そして日は昇り、清々しい朝。

穴蔵から這い出してカムフラージュ用テントを経由して外へ。

外の人の体が楽すぎて、最近生きてるのが楽しい。

中の人の体、地味に色々傷んでたんだなあ、と実感する。

生きるって大変だのう、などと似合いもせぬ思考を重ねていると。

あれ、見覚えあるお馬さん。

モノさんが襲われた辺りをウロウロしている彼の愛馬が目の前に。

「モノさん村にいるけど一緒に来るかい？」

ひとまず馬語にて会話を試みる・・・自分も馬に変身してね。

こういう使い方が出来るのに気がつくのにしばらくかかったんだっ
たか・・・懐かしい。

聞けば、なんとか自分を逃して魔物の足止めをしてくれたモノさんが心配になって戻ってみれば奴らの死体の海・・・という謎状況に混乱してこの場を動けなかった、らしい。

「じゃ、のんびりと御主人様に会いに行こうか」
手綱を引き、道を歩き出す。

おとなしく付いてくる馬の鼻面を撫でつつ、自分は村へと歩を向ける。

さてさて、今日は何をしようかな。

村に到着、モノさんを押し込んだ宿までのんびり散歩満喫中。
宿の女将さんに挨拶し、彼の部屋の扉をノックノックノック。

「アサダオキロアサダオキロアサダオキロ」

精神病患者のように清々しい起床を強制してみる。

瞬時に開く扉、死んだ魚のような目。

あれ、充血してない？

寝なかつたのか貴様、と、口に出しかけたが我慢。

「おはようございます、いい朝ですね？」
にこやかに挨拶。

「いま、ノックと同時に呪術のような声が聞こえた気が」
モノさん、超不審がつてる。

「気のせいですよ、ああそうそう。 あなたの馬、見つかりました
んで宿の厩に繋いでおきました」
伝えるなり駆け出すモノさんを見送り、自分もちよいと家のペット
を懐かしんだりする。

元気にしてるかなウチのやんちゃ坊主は……。

朝飯前だったので、ついでに此処で朝飯を食らうことに。
ああ、コメ食べたいなあ、無いからパンなんだけどさ。

「なんというか、まず言うべきが礼しか無い」
ありがとう、と、相席のモノさんが深く頭を下げた。

あれ、このへん頭を下げる系の風習なんだー、と、どうでもいい事を考えつつ。

「いえいえ、出来ることをしたまでですので。 どうにもならなければ逃げてましたよ」

なので、お気になさらず。

手に負えなければ即時見捨てる人間です、とひとまず正直に自己申告して評価を下げてみる。

「いや、それは普通の事だろう。 むしろ出来てもやらない類のことだ」

だから、ありがとう、だ。

モノさんが良い人過ぎて生きているのが辛い。

「分かりました、ひとまずお気持ち受け取っておきます。 で、一晩経って頭の中はまとまりましたか？」

食後の水を飲みつつモノさんに尋ねてみる。

さて、何聞かれたらどれ答えよう的なマニュアル作成のために、せいぜいこころ辺の知識を仕入れさせて頂くとしましょうか。

「ああ、それでは命の恩人のキミに質問だ。 まず、どうやって瀕死の私を健全な状態まで戻したんだい？」

どう考えても、私の怪我は致命傷だった、と、それが一番不思議だねと続けたモノさん。

ひとまず自分は、ストレートを投げてみる。

「魔法です」

豪速球。

何言ってるんだコイツ的な顔されたら冗談で通すし、何だ！ 的な流れなら逃げる。

さて、どうかかな？

「やはり。そうとしか思えないし、そうであるべきだ」
モノさんの言葉に、なんか怪しげなニオイがしてきた気がする。
そうであるべき？

「実は、私がこの周辺を巡回しているのは訳があつてね。キミの
ような魔法使いを発見、保護するという事を行っているんだ」
上からの命令で、なんだがね、と、モノさんが笑う。

「そんな訳で、メリウくんだったかな。首都まで御同行願いたい
のだが」

若干腰を浮かした気配がしたが、すぐにそれを下ろすモノさん。
ああ、職業病でつい逃さない体勢を取ってしまったのを悔やんでる
んだ。

「ああ、すまない。キミの意思を尊重せずに不躰な態度をとって
しまった」

この通り、と再び頭を垂れるモノさん。
ああ、腰ひつくいなあもう憧れてしまっね。

「ああ、お気になさらずに。行きますから」
ひとまず、保護して回っている、というなら顔見知りの数人は捕ま
るかもしれない。

しかしこの場所が自分達面子の拠点であることには変わりなく。
何がしかの物を残しておくべきだろう。

「でも、申し訳ないんですがもう数日お待ちいただけますか？
— 応お世話になった村の人に挨拶をしてきたいので」
拠点宣言もしちゃってるし、戻ってくる気満々ではあるけど変に拘

束とかされたら変な心配かけちゃうかもしれないし。

「それは勿論。一応私は上にキミのことを報告しに戻るよ。数日したら迎えに来るので、その時は同道願うとするよ」

今度は昼間に、後はもう数人連れてくるよ、と笑ってモノさんは早足に村を出発していった。

しかし、上が、命令、ねえ。

「最悪なのは、魔法使い希少説で魔法使い狩り。最高なのは上の人が知人PCって流れかなあ」

運命という名の現実の先を推理してみる。

展開的にはどうなるものか。

っとしまった、彼が次来るのは何日後か聞いておくべきだったか。

ひとまず魔法が存在するという世界背景はあるようなので、一応用心のために村の外へ出てから。

自分は<飛行>を解き放ち、モノさんを追いかける。

ものの十数分で追いつき、並走して正確な日数を尋ねた。

最初は空からの声に驚きもしたようだが、すぐ慣れた様子で「3日ほどだ」という返答をいただく。

「分かりました、では、三日後に」

手を振ってしばしの別れを告げる自分。

手を振り返してくるモノさんを後目に、自分は村はずれまで蜻蛉返りすると早速あいさつ回りを始めた。

小銭は溜まった、食うには困らない程度の備蓄であるが。

世話焼きな村人からのささやかな頂きものが、酷い量に膨らんだ。

日持ちしそうなものは無限袋に入れ、そうでないものは早めに消費

するように別の袋に入れて道すがら使ったり食べたりする予定。
ひとまず後は濁さず済みそうだ。

といったところで、工作の開始、といこう。

ひとまず、掲示板を作ろうと思う。

文字通りの掲示板、あとはメモ用に紙が欲しいところ。

ふむ、と考え、ひとまず自分が向かったのは。

<世界樹>、我らが麗しの拠点<塔>であった。

探索がてらの材木集め、程度に考えていた<世界樹>訪問だったが、
中は予想外に荒れていなかった。

流石に木製の家屋などは見る影もないが、その他は少し手を入れれば
史跡レベルに見栄えする観光名所になるだろう。

「最近客も少ないって言ってたから、手入れされなくなったってこと
かな」

ゲーム時の記憶と照らし合わせながら、ひとまず目指すは侍ギルド。
訓練場辺りはどうなってるかな。

しばらく記憶を頼りに歩き、迂回し、たどり着いたその先には。

苔むし荒れ果て朽ちた建物が、あった。

「ただいま」

軽く頭を下げ中に入る。

綺麗に草畑になった中庭などを見ると、少し胸が痛む。

そして建物の中には、入らないほうがいいと判断を下した。

人の住まない建物は痛むのが早い、と聞くが。

一体どの程度人が居なければ、こうなるのだろうか。

「健在状態から何年経った、か。メンツハウスにも言えることだよねえ」

石造りの頑丈優先ハウスですら、あの有様だった。

が、地下部分は驚くほどの痛みがあつたわけでなく。

「何者かに破壊された、が、わかりやすく納得できる答えかね」
頭にくる話だが、仕方なし。

望まざるとはいえ、住んでやれなくなつたのは事実であるし。

ほう、と一息溜息をこぼすと。

自分はく飛行>で宙を舞い、隙間を縫って屋上空庭園を目指した。

もはや庭園は見る影もなく。

無秩序に生い茂る大小の木に埋め尽くされ、真ん中の大木に吸収された様に森という一本の木に擬態していた。

こちら辺から適当に材料を間引かせてもらおう、と、愛刀を抜き加工を考えて材料を切り出す。

音もなく切断を成していく愛刀に感謝を捧げつつ。

太陽が一番高くに位置して地上を照らす辺りの時間で。

自分はそれを、発見した。

見覚えのある、一つ扉。

中を覗けば、自分の時と同じような作りの密室。

そして、開け放たれた扉の中、床に刻まれた6本の傷。

それは、果たして。

自分がこの世界で過ごした日数と、同じではないか？

自分は即座に目以外の目を見開いた。

気配視覚、及び魔力視覚。

肌を目とし、魔力を目とした。

まだ、近くに居てくれるか？

周囲をくまなく目ならざる視覚で射ぬく。

居なければそれは無事な知らせ、とばかりに安心出来る気もするのだが、と。

自分は、それを、見つけた。

それを見つけて走り、弱々しい呼吸で伏せる彼女に、ひとまず急ぎの光腕をぶち込んだ。

きゅっ、という甲高い悲鳴を上げて地面に伸される彼女。

アレから五年だと、もう高校〜大学生くらいかね？

「いったいなー、何するん！」

元気よく立ち上がった彼女は、文句をいう相手をまじまじと見て。

「ひとまず、久しぶり。こんなもんしか無いけど、食ったときな？」

好意でもらった生鮮食料を袋ごと彼女に渡すと、時間を止めた彼女にデコピン一つ。

「ひとまず一人目、痴ロリンげつとだぜー」

デコの痛みでしゃがんだ痴ロリン・・・侍組最年少の女侍ことエリスとの、再会であった。

旅立ちそれは暗雲で

ひとまず材木と、友人一人を拾って村に戻った。

一定距離を離してついてくる友人を、内心苦笑いしつつ。

あー、気になるか女の子だし。

平気平気、それほどでもない、と内心想いつつ。

自分は取り急ぎ、村はずれの施設準備を整えると、バケツに銀貨一枚投入。

「湯加減はどうだねエリスさんやー」

女湯の二重衝立越しに、湯浴み中の痴口リンに聞いてみた。

「サイコーです」

ちよつと熱めが好きなんですー、と江戸っ子気質な答えが帰ってくる。

それはなにより、と返答し、その場を離れて周囲を警戒。

・・・異常なし、念のため空とかも警戒しようかとも考えたが、鳥一匹飛んでいないようなので杞憂というものが。

六日間の引きこもりだもんね、汚れも二オイも気になるだろうさ・・・

・と、ゲームだったら心配もないようなことを思いつつ。

女湯の釜近くで材木を取り出し、自分は生産加工メニューを開いた。網膜投射的な効果なのか、VR的に生産窓が開く。

PC的ゲームスキルは使用可能であるらしく。

外からみれば自分が鋸や鉋で看板を作っているように見えるが、実際は道具選択と材料選択を行っただけである。

「ふむー、精密生産は自分自身がやってるって感じなのに対して、簡易生産は外の人がやってる他人事って感じだよねー」

結局、現状の把握に対する判断材料を再確認できた、とても思えばいいか。

ゲーム的な要素が地形などしか無い世界。

ゲーム的要素を使用できる外の人に入った自分。

この世界・・・に、ゲームデータをぶち込んで、混ぜた・・・？

となると、この世界そのものも、リアル系ゲームとして見ればいいのか・・・？

そしてこの場合、自分は外の人に引っ張られてオマケで此処にいる羽目になってるのか？

断言は出来ない所がアレであるので、ひとまずは思考中断。

取り急ぎ、大看板を掲示板として村の入口辺りに立てさせてもらい。簡易生産で作った羊皮紙を貼りつけ。

「俺は・・・ここにいるっ！ スケエエエエエ・・・」

・・・ベイス。

嘘です、ちゃんと書きました。

メリウより親愛なる友人達へ。

ひとまず首都に行ってください。

エリスも拾いましたので、念のため同道することになりました。

何事もなければまた戻ってきますが、首都に来るか此処で待つかの判断は、お任せします。

月 日。

P.S.

生きてるよ！

そんなこんなで日数経過。
予告通りに迎えが来た。

今回は流石に単騎ではなく、程々に重装の騎士が二名程お供に。

「おまたせしました」

綺麗に礼を送ってくるモノさん。

おおお、なんかカコイイー、と腐エンジンをギョんギョん回すエリスにチョップびし。

「で、そちらのお嬢さんはメリウさんのお仲間ですか？」

はぐれた仲間の一人か、との問いである。

「はい、仲間の一人と言うか、妹的存在と言うか」

間違っても腐っていることは悟られてはならぬ。

自分は心に誓った。

具体的にはモノさんを、汚染から守るために。

「ほう。ではこの方も、と思ってよいのでしょうか？」

モノさんが言外にエリスも魔法を使えるのか、と聞いてくる。

自分は小さく頷き、ひとまず自己紹介させようとエリスを背後から引っ張り出す。

「エリスと申します。道中よろしくお願いします」

ぺこり、と頭をさげ、ボロが出ないレベルでの自己紹介は終了。

ほっと胸を撫で下ろし、エリスを再び背後に戻す。

「では、行きましょう」

馬車を用意しましたのでこちらへ、と促される。

自分だけならともかく、多人数移動で徒歩は勘弁願いたかった為、渡りに船で正直助かる。

「乗り心地は良くないのですがね」

申し訳ありません、と、頭を掻くモノさん。

四人乗りの屋根付き馬車の扉を開くと、どうぞ、とばかりにエリスに手を差し伸べた。

おおジェントリー、と感心したが、

「馬車つてはじめてー」

と、差し出された手に気づかなかった痴ロリンがズカズカと乗り込み。

モノさんと自分、男二人で苦笑い。

すいません、天真爛漫な奴でして、と一応フォローじみた事は言うておく。

苦笑いのまま、お気になさらず、と御者席へ行くモノさんの背中を見送りつつ、自分も馬車へと乗り込んだ。

さて、のんびりと馬車旅の始まり、始まり。

しばし時間は戻り、自分とエリスと合流して飯風呂済ませて一応の用心としてハウス地下に引きこもって一息ついた頃。

自分と彼女は現状把握のため、この世界（仮定）についてから今までのことを語り合った。

自分の話は掻い摘めば扉開けたら落っこちて川流れの末に空飛んで、道見つけたから一晩歩いて此处にいる、というだけなので詳細までは語らずにサクッと報告。

対してエリスの話は。

自室にて課題のレポートそっちのけで東京タワー×通天閣×嫉妬に狂うエツフェル塔のコピー本原稿を描いていたところ、一瞬の停電。気がつけば見知らぬ密室に外の人エリス姿で放置プレイ。恐る恐る1つだけある扉を開けてみたらあらビックリ。

鬱蒼と生い茂る、緑緑緑。

閉めて開けて閉めて、を数度繰り返し景色が変わらぬ事を確認すると、エリスはひとまず、引き籠もって眠りについたそう。

地味に二徹してたそう、夢でなくても幻覚とかかなあ、とか、きつと原稿描きながら寝落ちしたんだ、的に思っていたフシがある。で、目覚めればそこには一つ扉。

うあああ、夢じゃなかった、夢じゃなかった、と、空腹に耐えかねて手持ちの袋から懐かし外見の携帯食料を発見し齧り付き、味の凄まじさに悶絶したそう。

「なんとというか、肉の香りの微かにする高野豆腐を、戻さずに齧ったみたいな感じ」

味気なかったんで捨てようと思ったけど、いつ新しい食料にありつけるかも分からなかったのひとまずキープしておいた、らしい。で、その後は部屋の中でふて寝したり、コソコソ外に出て花を摘んだりしたらしい。

正直、風呂に一週間近く入れなかったのはコミケ前の修羅場以来で厳しかったです、とエリスは語った。

記憶が確かなら・・・こっちに飛ばされた日が、そのコミケだった気がするけど・・・うん、女の子に聞いちゃいけない事柄な気がしたのでスルーしておいた。

自分にもそれくらいのが、あった。

で、日は過ぎて喉の渴きに刀の露をすすり、食料が尽きて仕方なしに草でも食むか、と覚悟を決めて外出し、目を回して行き倒れた所を自分とエンカウント、らしい。

「一週間ぶりのパンとかベーコンとか、泣くかと思いました」
ぶっちゃけ、食べながら泣いてた。

「そか、ひとまず無事でなにより、だったね。もう少しだけアクティブに動いたらあつさり村発見できたんだろっけど」
で、普通に宿に泊まったり温かい食事を摂ったり出来たんだろっけど。

「いやいやいやいや、さすがにそれは結果論ですよ。私都会っ子なんでこんな緑なす場所に放置されたらへたに動けませんよ」
半泣きのエリスを宥めつつ、まあ、そんなもんなのかね、と適当に頷いておいた。

ちなみに自分は山育ちなんで、ぶっちゃけ樹海に放置されても鼻歌交じりで脱出できたりする。

くそっ、役に立たねえ中の人技能だなオイ。

「さて、で、現状の不可思議な点としては・・・何でゲームキャラの中に入ってるのん、って事ですかね」
自分の手を開いて閉じて、と動かしつつエリスが言う。

「だね。まずは昔のゲームで作成したキャラの技能そのままに、ソレになってしまっている事」
自分は言いながら、人差し指を立てる。

「次は、ゲームの地形そのままの場所に、放り出された」
人差し指に引き続き、隣の中指を立てた。

「シンプルに、ゲームの世界に入っちゃったー、とかなんでしょう

かね」

ああもうメルヘンだなあ、とエリスが憤慨。

こういうのは二次元だけでお腹いっぱいですよ、と、頬をふくらませている。

「んー、たしかに単純に考えるならソレでいいのだろうけど。 実際問題として、ゲームにあったものでここにはないもの、とかも多々ある」

ぴつと、薬指を立てつつ。

強いて言うならコミュニケーションツールなどがソレにあたる。

メールに掲示板、ギルドなどの組織も怪しそうです。

あとは神様との交信も出来なかった。

「え、神様ダメだったんですか！」

くそう、地味にポイント貯めてたのに！

地団駄踏むエリスさんたら、見てて飽きないリアクション芸人。

「うん、自分も欲しい魔法とかあったんで試したんですけど。 ダメだった」

つまり、神様経由の授かりもののパワーアップが、禁じられている。

「だから、新しい魔法とかは・・・可能性の問題だけど、PC間なら、もしくは・・・と期待してたりするよ」

訓練ポイントとかはどういう扱いになるか分からないけどね、と続ける自分。

たしか、コンセプト的にはく訓練にひと月費やす>という単位だった気もするので、みっちり一月師事しないとダメなのかもしれない。

「うー。 なんとというか、世は不思議に満ちてますね」

早く帰って原稿の続き描きたいー、と、整えた寝床にダイブするエ

リス。

もう考えたくない、ねたーい、とか騒ぎ出す始末で。

「はいはい、んじゃおやすみ。　自分は廊下に出て右手法で進んだ先の2つ目の部屋にいるから、何かあつたら諦めて死ね」
にこやかにエリスを見捨て、即ダツシュで去る自分。

「はいい・・・え、最後なんて・・・ZZZZ」
ツツコミ途中で力尽きたのか、エリスの漢らしい寝息が聞こえてきた。

場面戻って馬車の中。

往復三日の時間で行き来可能ということは、一日半未満の旅路ということかー、などと考えながら、揺れの激しい車内で尻を叩かれつつ。

「うわぁ、思ってたより早いですね、馬車って」
満喫しているエリスの楽しげな姿に、少し心がなごむ。

「まあねえ。　車レベルは出ないけど立派な移動手段として確立された物だしね・・・はしゃぎすぎて落ちるなよう娘っ子」
クッションになるものないかなあと無限袋を漁りつつ、窓を開けて風に髪を踊らせてはしゃいでるエリスに落ちないよう注意を促す。

「はい。　メリっさんってウチのサブリーダーみたいだねー」
引率の先生みたい、と言ってくるエリスに、

「大学生にもなってそのはしゃぎ様だから、過去は推して知るべし、

だよな。 エイジの苦勞が忍ばれますわヨヨヨ」

同士は今何やってるかねえ、と、物思いにふける。

あとは、ひとまずクッションがわりに昔討伐した四足獣の毛皮を丸めて尻の下に引く。

おお、案外いいクッション性能。

「あー、メリっさんだけズルイー。 私にもプリーズ！」

歴史書に残るようなプリーズを吐きよるわ・・・などと笑い合いつつ、自分は竜の鱗を差し出した。

「わーい、このハードな感触と若干の粗さが私の尻を削りーってコラあー！」

べちつと、と、叩き返された鱗を仕舞い込み、仕方なしに同じような毛皮を投げて渡す。

「さんくすー、うわーい、モフモフだー」

座るところか寝転がり、毛皮にじゃれ出すエリス。

「ダメな大学生がおるわ・・・」

最近の子はこんなに幼いのだろうか・・・と、我が国の教育について頭を悩ませる。

ひとまず日 組潰そうぜ。

「ふーんだ、今の私は一五歳のエリスだもーん。 歳相応だもーん」

もーんとか言わない、と突っ込みつつ。

ガタガタドツカン馬車は進む。

そして、その数時間後。

夜の帳が下りるか否かの、明るい闇の中。

その一団は、現れた。

遭遇それは幸運で

護衛二騎に緊張が走る。

即座に馬車と一団の間に割って入り、鞍から槍を引き抜き警戒態勢。道を遮るように一塊になっているその一団は、長い流浪を思わせるボロボロの外装姿で統一された、とてもとても怪しげな集団だった。

「何者ですか？」

御者台の上からモノさんが一団に問う。

そこから動かないところを見るに、最悪の場合は轢き逃げアタックしてでも走り去る算段か。

ソロ活動で死にかけてた辺りといい、結構武闘派なのかもしれぬ。

モノさんの問いに、怪しげな一団の先頭にいた男が答える。

「助けて欲しい。子供が魔物に襲われて大怪我をした」

どうか、この通り、と、目深にかぶっていたフードを取り払い、頭を下げつつ答えた男の顔を見るなり、護衛二人が驚きの声を上げた。

「魔族・・・」

「もう、こんなところまで・・・」

嫌な予感しかしないフリをありがとう。

最悪の気分だ。

「とまあ、このままグダグダやってても気分悪い流れしか見えないのでサクッと状況を進めてみる」

自分は気軽に扉を開くと友人の格闘家の真似をして音もなく跳躍、着地。

あ、ちょっと・・・と制止するモノさんたちをガン無視して、一団

へと近づいた。

「怪我した子供って、どこです？」

大怪我と言ってたね、時間が惜しい。

答えが返ってこず、もう面倒だから一団を「見る」。

集団の真ん中、守られるような布陣で・・・すぐさま消えそうな小さな気配が「目に止まった」。

「え、あ・・・？」

「はいはい、失礼しますよーっと」

先頭の男を華麗にスルーして一団を掻き分け。

集団の真ん中。

母親らしき人に抱えられた、ソレ。

どす黒く固まったボロ布を包帯替わりに巻きつけられた小さな小さな塊。

微かに、ほんの微かに呼吸しているように、見える。

赤子、といっても差し支えない幼子だった。

「間に合った。よく頑張ったね」

<白銀癒手>。

必要以上の気合を入れた回復魔法が幼子を撫でるように包みこむ。すると・・・なんとという事でしょう。

弱々しかった呼吸は穏やかでしたっかりした寝息に。

あからさまに足りなかった体の欠損部位も、瑞々しい肌の張りをもった、まっさら状態に再生したではありませんか。

そんな状況に驚きを隠し切れない周囲をよそに、ココで匠の粋な計らいが。

「あー、皆さんも結構、体傷んでますねえ・・・」

スキャンがてらに気配視覚で体表をみた感じ、結構痛そうな方々が

多い・・・<全究回復>。

光の雨が、流浪で削れた一団に降り注ぐ。
痛みを押し流す鮮やかな光雨に、一団は誰からともなく天を仰ぎ見る。

「神よ・・・」

あー、まあ、偉大なる自由神様にでも祈るがいいさフハハハハ！。

と言うところで、ミッションコンプリート！　なんかくれ。

「では、これで失礼をば。　お大事に」

まだ呆然と、全快した幼子を抱きしめている母親的な人（不確定名）に笑顔で別れを告げ、行き掛けの駄賃に寝てる子供の頭を撫でて報酬とさせて頂く。

あー、間に合ってほんと良かったわさ。

助けられるガキンチョに死なれてたまるか、しかも目の前で。

自分は来た時同様に一団を掻き分け、先頭にいたく魔族>呼ばわりされてた男の人に軽く会釈して。

何事もなかったかのように、馬車の中へ。

あー、なんか喉乾いたー。

「おかえりー、どうだったー？」

流石痴ロリン、毛皮に横たわって我関せずで聞いてきよるわ・・・。

「んー、子供瀕死ー、助けたー。　大人も怪我人ばかりー、助けたー」

無限袋から売り物以外の安酒（要は失敗作的なもので、普段飲みなら充分な味だった）の一升瓶を取り出した。

そして栓を親指で弾いて引き抜くと、ラッパで三口程流しこむ。
つかー、んまー。

「た、隊長！ 私も欲しいであります！」
やけに美味そうに見えたのか、痴ロリンが物欲しげにバクシーシバ
クシーシ騒ぎ出す。

「あつれ、飲んでもいいと思ってるの未成年？」
お酒は二十歳になってから。

「うっうー！ ワ、ワタクシ何を隠そうコミケ前日に二十歳につ
・」

取ってつけたように自己申告してくるが・・・とても、疑わしい。
ちと聴き込んでみるとする。

「えー、んじゃ西暦何年生まれか即答せよー」

「年であります！」

「まだ18歳の計算じゃねえか。嘘つきには罰として一生BLに
関われない呪いをプレゼント」

「げえ、それだけは・・・それだけのご勘弁をお代官様」

「隊長なのか代官なのかはつきりさせる」

「すみません」

「ここままで、テンプレ」

漫才してしまった。

エリスも満足気に、かいてもいない汗を拭う仕草をする。

しゃーない、別に自分も二十歳前にはゴニョゴニョー、だったし。

「ミンナ二八、ナイシヨダヨ」
たまには甘やかしてやろう、と、袋から取出しますは。
ストック数、10本の最上級。

過去オークションで200白銀貨を叩き出した一品（ちなみに、飲めば能力値が上がる等のデマが流れてた時期での過剰熱を帯びた結果だったので通常だったらケタ一つ低かった）、称して<神話級>。

「わーいわーい、メリっさんゴチになりまー・・・うつまあ」
ハイテンション維持は、一口飲むまでだったよう。

素にかえった口調で呟いたあとは、ただ黙々と、ちびちびと、飲み進めている。

・・・いい舌してんなー、よく味わってお飲みー。

真剣に<神話級>を味わうエリスの希少な真顔を肴がわりに眺めつつ、自分は安酒を思うさま腹に流し込んだ。

いやあ、仕事の後の一杯は格別じゃあ〜旨すぎて小便チビリそうじやあ。

もう今日はこのまま終わりでいいよね、おやすみ・・・。

コンコンコン、ガチャ。

「あの、その、ひとまず宜しいでしょうか・・・？」

困った顔でモノさんが馬車の扉を開け放った。

背後には魔族呼ばわりされていた一団の代表格っぽかった男性も控えていて。

更にその後ろには、状況理解が追いつかぬ体の騎士二人。

「こちらの方が、せめて礼と・・・出来ればお名前を、と」

毒気を抜かれたモノさんが、魔族男性をズツと前へ押し出す。

あつね、自分酒飲んでるから絡まれるとも思っただんな。

ひとまず一升瓶片手に首だけ動かして様子を伺う。
この時の自分、若干目が据わっていたのかもしれない。
外の客人衆が怯えた気配を出した気もしたが。

・・・うん、堅苦しいのも面倒なもの、省こう。

「夜も近いし、野営準備しちゃいましょう」
さ、動ける人は手伝ってー、と、真面目に飲んでるエリスを馬車内に放置して表に出た。

開け開けよ無限袋、溜め込んだ物を出してみせー、と、若干酔っぱらいモードでシヤランラしてみんとす。

生産系の素材は地味に備蓄があるでよー、とばかりに、簡易・詳細の両生産もあわせてハツチャケてしまった。

結果、家、とは行かないまでも風雨を弾く全面形大型テントが完成した・・・頑張りました。

・・・レシピに落としておこう。

「もう訳がわからないよ」

モノさんがQBって頭を抱えてしゃがみ込み。

「・・・」

目をぱちくりさせて言葉もない様子の魔族な人に、ひとまず皆呼んでおいで、と促し。

「ご馳走様でした隊長。 私に出来ることがあればご命令を」

<伝説級>を飲み干したのか、馬車から出てきて、いつになく凛々しい様子で聞いてくるエリスに、夕食準備や一団の女性や子供の取

りまとめ他、幾つかの指示を出し。

・・・ちなみに翌日「昨日はご苦労様、真面目になるとカッコいいね」と言ったら「え？」と返答が帰ってきた所を見ると、この時純粹に記憶なくなるくらいに酔った状態で軍人口ロールプレイしてた模様。

閑話休題。

「さて、では楽しい楽しいキャンプの始まりですよー？」
林間学校の引率気分を楽しみながら、ひとまず場をカオスにしてみた。

魔族、と言う種族が現れたのは、年代も定かでない大いなる過去の話、なのだとか。

大昔、天使と悪魔の争いがあり。

地上に地獄へ続く大穴が開き。

悪魔と共に這いでてきた種族を指して<魔族>とした、らしい。

で、外見的には人と悪魔を足して、悪魔っぱさを薄くした感じなのが彼ら、と言う印象。

肌が若干黒めで、額あたりに角っぽい突起があるかなー？ くらいがその外観。

身体頑健にして異貌をもち、古代の言葉を操り・・・人を喰う、とされている、らしい。

「で、そこら辺どうなんですかい、本当？」

ひとまず安酒を樽単位で開放して皆に配り、酒盛りしつつ、魔族の代表的な人である所のお名前テトラさんに聞いてみる。

「いえ、基本的に我々は人間と大差はありません・・・人も食べません。地獄・・・いわゆる古代文明時代の地表に取り残され、悪魔兵器の雑兵を喰らって生き延びたのが我らの祖先だ、と代々伝わっています」

テトラさんは一息に言うと、丼に注いだ安酒をカパツと煽った。いい飲みっぷりすぎる。

「どこかで聞いた記憶がある話になってまいりましたデジャヴ。つてか、テトラさん達つてく悪魔喰いの子孫だったんだねえ」

きゅきゅーつとマイー升瓶の中身を減らしつつ、昔のゲームを思い出す。

一目見てスルー決定した、いわゆるく希望>シリーズクエスト。ぶつちやけると古代文明を滅ぼした天使と悪魔の抗争系歴史発見クエストだった訳なんだが、流れるに天使に味方して悪魔と戦い、本拠地の地獄へ侵攻し・・・な流れとなったときにく悪魔喰い>という新種族開放がなされたわけだが。

歴史的背景はまんまテトラさんが語った通り。

で、種族性能は身体的能力が高く、外見が悪魔寄りつてだけ。

・・・ああ、魔族と呼ばればそうかなあ、という外見ではある。確かあの時は、えーつとなんて名前だっけ。

「あーつと、えーつと、ボイドじゃなくてレイじゃなくて・・・
ヌル、か」

NULL、だっけかねく悪魔喰い>を纏めてた人にして、新種族開放クエストくれた人。

そんなことを口にした途端、テトラさんが驚きの声を上げたりした。超絶語りだったので、箇条書きでお送りします。

- ・何でく悪魔喰い>の事知ってるの？
- ・ヌルつて1000年前のウチら伝説の長老様なんだが。

・ってか本当にアンター一体なんなのさ？

うん、要らん情報が増えた。

酒が入ってるんで推理も後回しにする。

でも、ひとまず覚えておくべきは。

時代的に＜希望＞シリーズの千年後が、今。

・・・ってことは、＜塔＞、1000年経っても大丈夫、なんだ！？
すげえぜウチらフリーメ ソン、超石工過ぎて逆にヒク。

そして我が家エ・・・流石に1000年は越えられなんだか・・・
頑張ったんだろうなあ合掌。

さて、そろそろテトラさんが酔っ払って絡み始めてきたので、退散
するかのう。

「えーっと、酒入っちゃってるので細かい話はまた後日、というこ
とで」

細かく分身して体の像をずらし、掴みかかってくるテトラさんから
逃走。

お待ちをー、と追いすがろうとする彼に周囲の死角をつき、えい当
身。

キュツと悲鳴上げ、毛皮ひいた地面に突っ伏すテトラさん。

ひとまず一人になった自分は、酒盛りサバトを観察・・・騎士二人
は魔族さん達と肩くんで歌うたってますが・・・善きかな善きかな
モノさんはどうしてるか・・・あ、いた。

外で周囲警戒とかしてる辺り、真面目だなあ・・・。
結界張ってることとかは言ってたっけ。
つまり自分のせいかな。

「お勤めご苦労様です」

「一応酒も勧めてみるが、仕事ですので、と固辞される。」

「世情も分からないのでひとまず酒入れてみましたけど・・・結構適当に差別偏見はあるんですねえ」

「げえ魔族！ 的な反応だったんでどんな確執が！？ と思ってたんですけどね、と続けてみる。」

「ええ、詳しくは私が語るより歴史書辺りを参照なさったほうがいいでしょう」

「それなりには色々あったんですよ？ と、意味ありげに言うモノさん。」

「まあ、単純時間換算で言うならそうだろうねえ・・・ってか、よく国が千年保ったねえ。」

「恐らく、私の国はあなたの知る国とはまた別のものだと思いますよ？」

「それ程歴史はありませんしね、と続ける。」

「ああ、そうかー、我が鉄の国は滅んだかー。」

「ん、色々と情報入ってきて混乱してきました。ひとまず仮眠取ります」

「何かあったら起こしてくださいな、と言い置いて、モノさんの近くに横になる。」

「きつとこの人のことだから、夜通し頑張ってしまう気もするので。ひとまず時間指定の〈覚醒〉魔法を自分にかけて、数時間後に起きることにする。」

「ではではひとまず、酒盛りの喧騒を子守唄にして。」

「ガキンチョー人も助けられたし、いくらか現状に対する情報も増え

た幸運な日に、サヨナラ。

おやすみなさい。

道行きそれは情報で

おはようございます。

番犬役の自分です。

ごきげんよう。

寝ろ、寝ない、の闘いになった夜番を賭けたVSモノさん戦をく睡眠>魔法で大人げなく勝ち上がったの朝でございます。

地平線から登る朝日を温燭飲みながら眺める贅沢をしつつ。

昼間暖かくてもそれなりに夜は冷え込みますねえ、などと独りごちて。

んー、と伸び一つして。

では、朝飯の準備でも始めますかのう。

<魔族>さん達に振舞っちゃったので食材が尽きた。

もう少し日持ちするような物を用意しとくかなあ、と思いつつ。

「では、我らは先を急ぎますので此処でお別れですね」

<睡眠>から目覚め、朝食準備を手伝ってくれたモノさんが<魔族>一団との別れを口にする。

あつれ、遭遇時の反応からしてこのまま行かせちゃったらマズイのでは、と思ったりもしたのだが。

「行きずりの旅の一団と一夜を過ごしただけです。 何も問題はありません」

と、ニヤリ笑うモノさんが、ちと愉快。

「あー、隊長狡いー、即座に美味しいところ持っていくその姿勢はどうゆうことなのー」
騎士さん二名からブーイングが上がる。

「もうこのまま彼らも連れて行きましょー、どうせ人手はいくらあっても足りないんですしー」

騎士の一人が言う。

ほー、人手、足りないんだ？

「いやいや、落ち着きなさい。私的にはソレもいいかな、と思うのですが・・・昨日の私や君たち自身の反応を思い出しなさい」
モノさんの言葉にハツとする騎士二名。

あー、すっかりお友達気分になって忘れてたかー。

「魔族・・・もうこんなところまで・・・」
エリスが物真似して要らん油を注いだので、即制裁チョップびし。
無駄に似ていたのがまた腹立たしい。

ほら、騎士さん達黙っちゃったじゃないか。

「・・・と、言うわけです。なので、ひとまずはコレで納得して下さい」

身内に言い聞かせると、モノさんは一団に振り返り。

「申し訳ありません。小さなお子さんもいらっしやる方々を保護も出来ぬ現状でして・・・」
深々と頭を下げるモノさんの姿に、脳内のレッドアラートが鳴り響いた。

うへえ、額面通りに受け取ると・・・幾つか考えたくない可能性が上がってくるなあ。

例えばほら、何がしかの戦争終結直後だったり、とか、ね？

焼け野原復興に関して、不意に湧いた魔法使い捕まえて働かせよー
ぜー、という流れだったらどうしたもののか。

「・・・よほどキチガイじみた「上」でなかったら働きそうな自分が
いる・・・。」

「いや、気にしないで欲しい。むしろ子供を助けて頂いただけで
も我らにとって奇跡としか言いようがなかった」

その上、露に濡れぬ寝床と酒席まで設けてもらい、何をこれ以上・
・と言葉に詰まるテトラさん。

ただ、心残りは・・・と、自分をチラ見してくる。

「・・・あー、どうしたものかなー」

そう言えば昨夜、色々話すよー、とか約束した覚えもある・・・ん
ー、どしよ。

自分が戻ってくるまでこちら辺でウロウロしててー、とは言えない
し。

かと言って代表格っぽいテトラさんだけ連れていくのもアレだし。

「もういつそ騎士さん達二人に護衛頼んで、皆さんを<世界樹前>
村まで送ってもらえばいいのかな」

で、皆への偏見が強いようなら<世界樹>辺りに滞在してもらって、
ソレの監視つてことで騎士さん達に物資補給及び対外的な防壁にな
つてもらえばいいのでは、と提言してみる。

よそ者の自分でもそれ程苦もなく受け入れてくれたし、いけるん
じゃないかなあ、なんて楽観視していたのもあるけど。

「おお、二兎を追う妙案？」

メリっさん伊達に長く生きてないねー、と茶化す痴ロリン。

「それは・・・」
ちと考えこむモノさん。
危険がないと思われる難民チツクな人々の保護も視野に入れられるか、と、思案顔。

「<世界樹>?」

首を傾げるテトラさん。

人を避けて移動とかしてたなら知らなくても不思議はないか。

結局、騎士さん達二名の後押しもあり、自分案で行ってみようとなつた。

ただ、様子見で村の人には<魔族>というのは極力隠し、村でなく世界樹に直接行こう、という流れになつたが。

モノさんは、一応念のためと村長宛に一筆書いて「長にだけは事のあらましを伝えておきましょう」と手紙を騎士に託し（自分も念のために文面を盗み見たけど不振な点はなかったのでホツとした、二重の意味で）、真剣な顔で騎士達に令を出す。

真面目な顔でそれに頷き、騎士達は一団の護衛として自分達と別れ。首都へと向けて、自分達三人は出発した。

馬車旅はのんびりと。

自分は御者台、モノさんの隣に陣取らせてもらうい、彼に国とやらの現状を聞きながら長閑に進む馬の蹄音に脚でリズムをとっている。カポツ、カポツ・・・カッポー死すべし・・・モゲロツ、モゲロツ。

「現在我が国は、独立戦争の疲弊から辛うじて立ち直った、といった所です」

ポツリポツリと返ってくる言葉に相槌を打ちつつ、先を促す。何度目かになる大きな国の建国、戦争、小さな国の独立。飢餓や疫病等の<ラスボス>が蔓延する戦の爪痕生々しい辺り。それが、今らしい。

「そんな中現れたのが、一人の<魔法使い>でして。ちょうどメリウさんとお会いた日のことです」
なんでも、怪我人病人に満ち溢れた教会廃屋壁面に突然現れた扉をくぐってやってきた男が、瞬く間にその場の全員を光雨や光腕、更には光剣のようなものでバツバツサと癒しまくってそのままどこかへ去った、そうなの。

「荒れ果てたとはいえ一応国の体裁はあるわけでした。傷つき病んだ国民を救った英雄を探せ、という号令が出されました。それで近隣を兵が駆けまわることになり・・・と言う流れですな」
そして、夜道をゆく貴方に遭った、と言う次第です、と、モノさんが語る。

「ふむ。ぶつちやけモノさんは、その癒しまくって怪人が自分なんじゃなかるうか、と思っただけですか」
だから死にかけてたモノさん回復したのが魔法とわかると「そうであるべき」なんて思わせぶりなこと言っただんじゃ・・・。
しかし、光雨、光腕、そして光剣・・・ねえ。
モロにく全究回復><白銀癒手>、それに<浄化>だなあ・・・全部使える坊さんに心当たりがありません。

「はい。で、実際はどうなんでしょう?」
にこやかに小首を傾げるモノさん。
ははは、コヤツ分かって聞いてやがるなどうしてくれよう。

「えーっと、似たようなことは出来ませんが、自分じゃないですねえ。むしろ、自分の仲間がその条件に合致したんですが・・・」
世界は広いし、坊さんでない可能性のほうが高い気もするけど。何故か、犯人はヤツだ、と自分の第六感が囁いている。

「癒された人の証言とかで、その魔法使いの外見情報とかは集まらなかったんですか？」
ひとまず情報収集。
つてか、ヤツなら目立ちすぎてどう考えても一発バレ必至のはず。

「はい、それがですね・・・背が高い、というところは皆共通の証言なのですが」
細部が、マチマチなんです・・・と、モノさん。

外套を目深にかぶっていた、いや素顔だった、むしろ骸骨だった、痩せていた、ふくよかだった、筋肉質だった・・・等、相反する様なものまで含まれていたそう。

うわああの野郎（脳内確定）、扉から出てくる前に<幻影>纏って見た人固有の印象操作しやがったな・・・！
ああ、それなら見つからないわけだ・・・きつと、奴は。

「はー・・・。ナルホドナルホド。大体わかりました・・・」
ひとまず、気が抜けた。

そして、仲間の一人が、行く先で待っているという確信が持てた。
今頃奴は、のほほんと観光チックにそこら辺をねり歩いていることだろう・・・。

「え、なにかお分かりになったんですか？」
すわ、英雄様の所在とかですかっ、と鼻息荒く食いついてくるモノさんの顔をガツと掴んで前を向かせつつ。

「恐らく、ですけど・・・そのく英雄さま、まだ首都に、いますよ?。」

見知らぬ所で迷ったら動かない、の法則を遵守する彼だったら、恐らくは・・・と言う注釈はつくけれど。

それから数分、自分はモノさんの顔を鷲掴みにして強引に前を向かせたままで居なければならなくなった。

頭に血が上ると血行・・・結構猪突な人なのだね、キミ。

ちなみに、やけに静かだなあ、と思ったら。

「ZZZZZ」

ウチのお嬢が、涎垂らして熟睡こいていたりした。

うん、長閑のどか。

自分は、ヒゲを書き込んだ。

到着そこは始まりの

首都、到着。

それなりの規模を持つ、大きな町のようだ。

そう、大きな、町である。

間違っても都市ではなかった。

50m上空あたりで見渡せば全域を視野に入れられる程度の町が、モノさん曰くの「首都」であった。

しかも、ここは……。

「方角的にもしやと思ったら。ここ、始まりの町か」

ネットゲームのテスト最終イベントにてあっさり滅んだはずの、

あの町。

その後は廃墟として復興もされずに見捨てられたと聞き及んでいた、あそこである。

「建物とかは大きなの以外全然別なんだね」

眠りの世界から帰還したヒゲ痴ロリンが、馬車の窓から上半身乗り出して周囲を観察。

危ないから身を乗り出さないよーに。

「そうだね。むしろ滅んだって聞いてたから大きな建物も全てダメになつてるとばかり思ってた」

振り返ってエリスに注意をしつつ言う自分。

「ほ、滅んでませんよ？ 物騒な嘘話をしないで下さいっ」

ギョツとして声を上げるモノさん。

ああ、自分の国の首都を滅んだはずだの何だのと言われればいい気分はしないだろうけど。

「あー、その、なんというか。 自分達が知っていた場所に似てるなあ、と」

あはは、と乾いた笑いを上げて茶を濁す。

「・・・一度じっくりと、お話を伺うべきなんでしょうかね・・・」
ちよつと座ったモノさんの目が、怖かったりなんかして。

素直に話しても状況が好転する気がビタイチしないので、どう考えても嘘しか言わないけどねえ自分。

「そこら辺はそのうちゆつくりと。 で、結局自分達は首都の、このどなたがいる所に向かっているんですか？」

なんだかんだで聞いていなかった事柄について聞いてみるとする。

最初に聞いとけよ的な事だったけど、ある意味どうでも良かったのでスルーしてたのですが。

「私達に英雄搜索の令を出した、騎士団長にお会い頂きます」

民を虐げた王族に反旗を翻したクーデター首謀者で、ある意味今の国の王様みたいな方なんですがね、とモノさんがぶつちやけた。

初耳。

「歴史がないとか言ってたのは、単に独立して新建国した赤ん坊な国だからって意味ですか」

正直、権力者とかにトキメけない性質なので、数日前の会話なんかを思い出しつつ茶々入れる。

あ、そうそう、数日前で思い出したけど。

「あ、話の腰をへし折りますけど、迎えに来てからモノさんの口調が変わったのは何故でしょう？」

頼れるオジサン口調から、にこやか爽やか系テンプレ詐欺師口調に

変わった気がするね。

「え、あ、はあ。実は私はこっちが地ですて」
それなりに部下がいる手前、普段から演技も必要なわけですて、と苦笑い。

ふむ、幾らかは気安い奴と認識されたのかのう自分。
ならばよいのだがが。。。

「あー、いまさら メリウくん、今までの口調は忘れてくれたまえ。
・ ・ ・ とかイイ声で言われても笑うしかなくなりませぬね」
幾らかでも肩肘張らずに話してできるんだったらそれに越したことはありません、と、ケタケタ笑ってみる。

「あー、出来れば笑うのはご勘弁を。 っと、そろそろ到着します」
先程から苦笑いしっぱなしのモノさんが、表情を引き締めた。

さてさて、状況はどう流れますかね。

通されたのは首都中央に位置する・・・ゲームの記憶だと公園とか噴水とかあった辺りに建てられた簡素な建物の中だった。

事務処理でもしてるのか、羊皮紙の山に埋もれる初老の騎士が気難しげにこちらを値踏みしてくる。

人相悪いので、無意味にガンつけられてるようで気分が悪い。

「なんかいけ好かない爺ですね？」
思わず素直に言ってみた。

「「ちよっ」「

モノさんとエリスが慌てるが、なんとというか正直面倒になってきているので、巻く。

「こんにちは、メリウと申します。ひとまずこの町の怪我人病人を助けたというく英雄様ではないですが、似たことは出来ると思います。それを踏まえてお聞きしますが、自分に何か用ありますか？」

聞きたいことだけ聞く。

初老騎士はしばしガンつけたまま固まっていたが、不意に力を抜くと、愉快そうに笑った。

「モノ、愉快な人を見つけてきたね」

おや、やけに声が若く、高い。

そんなに興味もなかったのだからちゃんと見ていなかったその騎士の顔をよく観察する。

老いの表れのシワだ、と思っていたものは、火傷で引きつった痕であった。

顔全域が、焼かれていた。

それも恐らくは、子供の頃に。

そして恐らく顔だけでなく体広域がああなのだろう、と、外の人知識が囁いている。

それを加味して、声の感じから察するに。

彼は、それほどの年かさではないのだろう、と憶測できた。

少なくとも・・・自分よりは年下だ、と感じた。

「お初にお目にかかりますメリウ殿。僕は騎士団の長をさせていただきます。ただいてるノナと申します」

椅子から腰を上げ、丁寧に頭を下げる団長さん。

うん、ひとまず聞いてみようか。

「とりあえず、ノナさん。その火傷、治します?」

すれ違う人が、振り返る。

四人連れ立って食事でもと外出した時から、衆人の目が向けられていた。

足取り軽いモノさんと、ニコやかなノナさんは、気づいていないよう
うで。

「ノナさん、女の人とは見抜けませなんだ・・・」

私とどっこいの胸装甲の薄さだったしなあ、とはエリスの言。

「それは自分もたわさ。もろにモノローグで彼呼ばわりしちゃったわさ」

どうでもいいことだけど語尾にわさつけるとわさビーフが食いたくなる自分。

悔しい、でもそんなもんここにねえよちくしょう。

先ほど答えも聞かずにノナさんに光腕ぶち込んでしまった訳ですが、あまりに劇的ビフォーアフター過ぎてちよつと驚いた。

なんという事でしょう、初老の男性とばかり思っていた人物が、みるみるうちに見目麗しい女性に成ったではありませんか!

・・・ねえよ、と、エリスともども突っ込んでしまったのは仕方あるまい?

「でも、よかつたね。今でも痛くて仕方なかつたんだってね」

エリスの言葉に、そりゃそうだろうさ、と返す自分。

むしろ、よく生きてたねレベルだと、素直に思う。

出迎えてくれた時のアレも、ただ単に普段通りの痛みに顔をしかめ

てただけなんだろうなあ、とか思うと喧嘩っ早い反応してしまった自分の子供っぷりに絶望したりする。

「あんまりに痛ましくて強制治療しちゃったけど、クリーム無くてよかった・・・」

この火傷は！ 僕の生きた証だ！ とかロマン語られたらどうしようかと思ってました。

最悪、じゃあもう一度焼くよ？ とかの流れになった、のか・・・？ 爆炎壁に女の人押し付ける自分を想像して、胃の腑がキュツとなった。

一応快癒を喜んでいただけてるようなので、ホッとしておりますが。

自分とエリスの十数歩先。

軽やかに、踊るように。

痛まぬ体で跳ねまわるノナさんと、それをすんごいイイ笑顔で見守るモノさん。

道行きがたら断片的に、幼なじみー、とか彼女のために騎士にー、とかは聞き出した。

有り体に言つと、とっ捕まえて三秒で吐かせた。

そんな王道的关系に、やおいじゃないけどエリスもトキメイたらしい。

やおいじゃないけど。

「さて、んじゃ二人の世界に突入しそうなモノさんノナさんを追いかけるとしますかー」

そしてモノさんの奢りで容赦無く飯食おうぜー。

大人の本気を見せてやるう・・・無駄になー！

「あいあい！」

腹減ったー、と声高く同意するエリスを引き連れて。

なにか忘れてしているような気もする首都観光？が始まった。

「あつね、ウチの出番は・・・？」

今回は、なし。

昼食それは蒼白で

食事をとりつつ情報収集。

世間話と自分内常識の、すり合わせ。

自分とエリスの食欲に、顔色を青から白に変えて諦めに満ちた薄ら笑いを浮かべているモノさんをにこやかにスルーしつつ。

「自分達の言うく国」の意味・範囲と、あなた方のそれとに、こんな差があるとは」

モリモリと容赦なく15本目の鶏モモ焼きを胃に収めつつ独りごちる。

ああ、シンプルな塩味うまー。

塩ふって焼いただけでこの味ってのは素晴らしい。

と、シンプルな料理に舌鼓打ちつつ世間話なんかをした結果、彼らの言うく国」の範囲が、実に自分的認識の「市」に近いということが判明した。

都市国家、とか言えば聞こえはいいのかもしれないが単に人が少ないのだろう。

結果、集っても大した集団になりえず・・・という流れだろうか。

「僕達からすると、そんな大きな国があったという事のほうが驚きなのですが」

控えめにパンを摘むノナさんが、自分の語った「国」の規模に対して驚きと疑惑の声を上げる。

顔面蒼白のモノさんも、コクコクと頷いているが・・・。

あー、物資不足の折の豪勢な食事だものねえ・・・高価いだろっなあ、他人事だけ。

ゴチになりましたー。(過去形)

「私達の国は4つの町を治める大国、という感じなのですが。それを全て併せてもメリウさん達の知る一都市の半分にも満たない、とは……」

驚きです、とモノさん。

先程から水を少し含んだ程度で食事は摂っていない。

「聞いた限りの人口だと、50人位が敵と戦っても大戦争扱いされそうですね」

きゅーつと口に頬張った肉野菜その他を水で流し込んだエリスがフオークをくるくる回しつつ茶々を入れる。

空いた皿の量は自分と同等、やるな痴ロリン。

伊達に欠食児童じゃない。

「ははは、大は付かないかもしれませんが確かに戦争の範疇になりますね」

騎士団員の半数が出張る事になりますからね、とモノさんが続けた。

「ふむ。クーデターやら何やらで人同士が争える余裕があるってことは、魔物とかの数は少ないんですか？」

なんだかねだでここ一週間程度過ぎしてみても、魔物との遭遇はモノさん瀕死事件の時だけだったし。

魔族（仮）さんたちを襲ったのは、また別の魔物だったのかなあ、とか思うと、少なすぎる気はしないのだけど。

そんな自分の疑問に、さっと二人の顔色が陰る……おい、まさか……。

「いえ、実はこのところ、魔物の数が増加しているようなのです」
一匹二匹程度はよく見かけられ、十匹程度の集団の目撃例も上がっている、という。

「そんな中でクーデターやらかさなきやならないと判断せざるを得ないほど酷かったんですかー、この国の王様」

口元をハンカチで拭っていたエリスが、なんともいえぬ表情で聞く。

「それについては詳しく語ると日が暮れますので結論だけ。酷王でした」

ノナさんが実にイイ笑顔で親指を下に向けた。

その仕草、この国にもあるのか・・・。

「余りの酷さに王を守る騎士団そのものが敵に回りましたし、クーデターといっても殆ど無血勝利という感じだったのですがね」

お陰様で人同士の潰し合い、というほどの被害は出なかったのですが、とモノさん。

あれ、でもそれだとおかしくないかな？

「だとすると、何で神殿跡に多数の病人怪我人が居たんですか？」

と言いつつ、あ、と気がつく。

もしかして、だから、酷い、と言ったのか・・・？

「そのご様子だと気が付かれましたと思いますが・・・そうです、王の暴虐の被害者があそこに集められていたのです」

それとは別に、圧政による貧困、飢餓、それに付随する病の蔓延・・・と、ほんの1週間前を思い出したのか、語るノナさんの口調は重みを伴った。

きつと。

殆ど死体置き場と同義だったんだろうな、と、思った。

「そんな訳で、最初は殆ど玉碎覚悟で暗殺を狙おうという形だったんですが」

そんな中現れたのが、その<英雄>・・・癒し魔・・・だったらし

く。

「押し込められていた病人怪我人達が嘘のように健常に戻り……中には死人が生き返ったという眉唾な報告も上がっていますが……怒り心頭の彼らが王に突貫したのは言うまでもなく」

あー、それ、きつとホントに生き返ってる。

リアル死に戻りだったら、そりゃ……凄まじかるう、色々と。

「その勢いそのままに周囲を巻き込んでの暴動に発展。もう革命と呼んでいいのかもしれませんが」

モノさんがノナさんの説明を引き継いだ。

「そして、それを鼻で笑った王が騎士団に鎮圧を命令して……」
棒切れ振り回す奴隷共を蹴散らしてこい、などと口走ったらしい。
いやあ、よくその王様それまで生きてられたなあ。

自分を守るもの……多分騎士団……を、そんなに信用してたのかねえ。

「で、華麗に騎士団の矛先が、王に向いた、と」
なるべくしてなった、って感じですねあ。

暴動の規模が大きすぎて騎士団員が日和ったりもあつたんだろなあ、とは口に出さずにおいたけど。

「そして当時の騎士団長、つまりモノが父を……王を討って暴動は終了しました」

ノナさんが淡々とした口調で締めくくった。

あー、そーいう流れかー。

「ふむふむ、どうやって騎士団に言うこと聞かせてたのかなあ、と疑問だったけど。ノナさんが人質だったのかな」

頭の中で状況をシミュレートしてみんとす。

王様：暴君。

ノナさん：人質（対モノさん用？）。

騎士団：人質を盾に従わされる。

住民：奴隷扱い、王様やそれに言いなりな騎士団に恨み？

「暴徒が王の首を獲る前にモノさんが又ツ殺して騎士団の点数稼ぎして、幽閉されてたノナさん救出して団長代替りして武力（権力）持たせる。さらなる点数稼ぎに騎士団動員して＜英雄＞探し・・・つてことでいいのかな」

大雑把に状況を組み立ててみた。

どうでしょう、と二人に目をやると、小さく頷いている。

大筋で合っていた、という事かな。

「そしてモノがメリウ殿に出会って、今に至る、ですね」

他の騎士達が戻る中、モノだけが中々戻って来ないので肝を冷やしました、とノナさん。

あー、最初は深夜の搜索で、そのまま村とか巡回して・・・で、魔物の集団に殺されかけてた、と。

「となると、・・・今この町には、自分とエリス以外の＜旅人＞は居ない、ということでしょうか」

恐らく潜伏してるだろう坊さん含めても3人が、と思いつつ。

「はい、残念ながら＜貴方がた＞と出会う幸運に恵まれたのは私だけのようでした」

魔法使いの保護、なんて思わせぶりなことを言ってしまう申し訳ありません、とモノさんが頭を下げる。

ザクザク人数居たら流石に顔見知りでなくても気がつくしなあ。

自分もエリスも、地味に探查系スキル充実してるし。仕方なし。

んでは、議題・今後のことについて、と行きましようか。

「英雄探してたら類似品見つかったと言っただけの自分達は・
・ひとまず用なしという形でいいんじゃないかな？」

あの癒しマニアが潜伏してるとするならば、もはやこの国と言うか町には重篤な患者は皆無だろうし。

予想通り奴がいるとするならば。

きっと辻斬りならぬ辻癒し&即逃亡くらいはやってのけるはず。

もしくはスニークゲリラ癒しやらバックスタブ的癒しもしているかもしれない。

むしろ夜中に空飛んでく全究回復の雨を降らせ続けるくらいの狂った絨毯爆撃すらいやかねん。

嫌な絵ヅラの想像をしてしまい額に汗をかき始めた自分を奇異な瞳で見つつ、モノさんが口を開いた。

「いやいやいやいやい・・・大恩あるあなた方にそんな、用なしだなんて・・・」

大慌てで立ち上がり超否定ポーズのモノさんがちょっと面白い。

「私はなんにもしてませんがな」

これエリスさんや、ふてくされない。

正直な所、君は秘密兵器と言うか切り札なので、今はまだおとなしくしてて下さい。

「モノの助命。 僕の治療。 少なくとも僕達二人は貴方に返し切れない恩が来ています」

改めて、と深々と頭を垂れるノナさん。

併せて頭を下げるモノさん。

「しかし、僕達からお返しできるものがないのが……」
心苦しい限りで、と、搾り出す声色が苦く響く。
そんなに気にしなくていいのにな。
無い袖は振れないものだよ。

「いや、もう何度もありがとう、とお礼はいただきましたし。それでいいんじゃないですかね」
別に命を削って皆を助けるといふ幸福の王子的なイイハナシじゃない。

謎状況で苦もせず手に入れた暴力的な能力で好き勝手やらせてもらってるだけだしね。
なので、そんな切なそうに二人してこっち見んな。

「んー、あ。それではお願いと言いか頂きたいものがあるんですけど」
ふと思いついた。

一応モノさん巡回してたんだからあそこもこの国の所属なんだと思うし。

え、モノ？ と、コレは僕のですとか言い出したノナさんにチョップかまして。

……エリスさん？ なに鼻息荒くしてるのかな？ かな？

「<世界樹>、自分の物にしてもいいですか？」
言うだけならタダだしね、と思ってる。
思い切って言ってみた。

強襲それは食料で

<世界樹>・・・<塔>の所有権とかくれなひかなあ、というムチヤぶりへの返答を待つ一瞬が長く感じた。

そして、それがノナさんの口から発せられる前に足元から全身に伝わる、地響き。

「!?!? 地震?」

そそくさとテーブル下に避難するエリス。

「いや、構造上この世界には地震ないだろ」

地獄ならいざしらず、と呟きつつ表へと駆け出す。

地響きは定期的にやってくる。

そして、脚から伝わる振動が、どんどん大きくなっていった。

肌が告げる振動の元へ、目を向ける。

町を囲む柵の先、強大な肉の壁がまっすぐにこちらへと、向かってきていた。

「ああ、こんな感じになるんだ。歩くだけでこの振動とか」

視覚情報だけで揺れてるのと、実際に脚やら肌やらから感じる振動の違いがこんなにも相手の巨大さを実感させてくれるとは。

「いったい何が・・・!?!?」

自分を追って食堂から駆け出てきたモノさんにノナさんが、ただ啞然とした。

あつれ、最近ココらへんには回って来てなかったのかね。

昔は月に二回は来てたと思うんだけどなあ。

「懐かしいねメリっさん。ベヒモスだねー」

おお、揺れる揺れる、とはしゃぎながら現れたエリスの手には、彼女の愛刀がある。

坊さんが居てくれたとしても、三人、かあ。

ヤレなくもないか・・・最悪自分が・・・になればいいし・・・、と、打算的計算完了。

「モノさん、町の人達に避難指示ヨロシク。行ってきまーす」

ヒヤッホオウ、肉だ肉だー、とハイテンションなエリスを引き連れて、懐かしのベヒモスめがけて。

突貫。

火に強い表皮をしているといっても、焼けないというわけではない。

<爆炎壁>を町前に展開し永久化。

三重に重ねた灼熱の壁に少くない損傷を与えられて後退するベヒモス。

ひとまず、進路妨害程度にはなったか。

「まず足を止めないと。先生、お願いします」

自分の先生コールに応え、どーうれー、と、似合わぬ爪楊枝をくわえて半身立ちするエリス。

手には抜き身の愛刀<水神刀 蛟>。

<塔>トツプグループの一角。

侍組の最年少剣士にして、最終<剣聖>。

その視線の先には巨獣ベヒモス、わずか二十数メートル先にあるピルのような足。

「秘奥 雲斬りの太刀」

両手で握った<水神刀>の刀身がエリスの意思に従い金属から水の

ごとく変化した。

水精剣化。

灰剣士の雷神剣同様に、魔法化する物理攻撃。肩に担ぐように構えたその水剣が、気合と共に振り下ろされる。

「アッーーーーー!!!」

何度聞いても、その気合はどうよ？ と突っ込まざるをえないが、なんとか我慢した。

ついネタを仕込んでしまう芸人気質には拍手を送りたい。

気合と共に振り下ろされた刀が、地面付近でピタリと止まる。

ベヒモスとの距離は変わらず。

傍からは只の素振りにしか見えぬそれは。

空を往く雲を断ち、地面までを一直線に裂き。

透明な水の飛沫を伴い飛んだ鎌鼬が、容赦なくベヒモスの右前足、後ろ足を縦に切り裂き、足の外側半分ほどを切り飛ばした。

最大射程距離 2.4 km を誇るエリスの秘奥義（多重奥義の奥義化）。

文字通り、雲を斬り裂く太刀であった。

「流石剣聖殿、GJ」

仕事は終わった、とばかりにUターンしてきたエリスとく白銀癒手
> ハイタッチを決めつつ労をねぎらう。

「今思ったけど、頭狙ってたらそのまま持っていったのかな？」

上がった息が瞬時に整い、痛みに地面をのたうつベヒモスを観察するエリス。

「今切り落とした辺りは骨とかが絡みにくい部位だし切断武器と相

性が良かったただけだと思う」

いかに奥義、いかに魔法化といえど。

技は武器の属性に依存する。

刃物は丸い硬度の高いモノに、やや弱い。

頭を狙っていたら、最悪弾かれてしまったやも知れぬ。

「そかー、難しいねえ」

小さく舌を出しつつ、再び秘奥の構えをとるエリス。

逆側の足を削いで移動を禁じる腹づもりのようだ。

流石侍組の冷徹サブリーダーに仕込まれてただけはある、容赦無い。

すわ、自分もしかしてもう出番なくね？

足元から響く振動に違和感を感じつつ居たたまれなさを・・・何だ

この振動？

今目の前で地面をのたうち回っているベヒモスの揺らす地面の振動・

・・・とは別のリズム。

震源は・・・後ろ・・・町、だと？

「エリス、あと頼んで、いいか」

爆炎壁越しに町を睨む自分に違和感を感じたのか、エリスも何かを

探りだす気配。

そして、彼女の表情も硬くなった。

「任せて。即トドメさしてソツチ行くから！」

頑張ってるね、とサムズアップ、即時自分に背を向けてベヒモスを着

実に切り取っていく。

「そつちも気をつけて。もう秘奥義は使わないほうがいいよ」

一発で息上がっちゃうからね、と、一応の注意をしつつ。

自分なく飛行>魔法を解き放ち、宙を舞った。

まさかの、挟撃だったようだ。

組織だった行動では無く、ただ単に偶然が重なっただけなのだろうが。

エリスが戦闘中の場所から町をまっすぐ突っ切って反対側。

町敷地内への侵入を許し、ベヒモス二匹目・・・ベヒモスBと呼称する・・・が、足元を蹂躪していた。

ベヒモスBは、気の赴くまま歩いているだけ、なのであろうが。

「踏み潰されるアリ気分はいかがですかっか」

永久化した魔法を全開放しつつ、自分はベヒモス直上をまっすぐに上昇していた。

こまめに削っている隙がない。

このままでは十数分で町が終わる。
ならばどうする？

「こっする」

雲を突き抜け息苦しさを感ずる場所から、一気に直下へ向けての急降下。

あの器用さお化け、こんなのをいつもいつも使ってたのかキチガイめ、と毒づきながら。

高高度からの加速つきスカイダイビング、スタート。

空気の壁が永久化された防御障壁に弾かれて割れるような音を連続させる。

ゲームでは影響を受けなかった、空気抵抗。

そしてさらに言うなら、このまま突貫したとしても当然のように自分も同等ダメージを受ける、ということ。

ゲーム物理の恩恵は、無かるう。

「信じてるぜえ魔王産結界魔法っ」
皆に強制的に覚えさせたあの魔法。
ああよかった、強引に覚えさせといて。
機能さえしてくれるなら、これは間違いなく生命線になる。

愛刀を引きぬき、突きの構え。

空の槍ならぬ、空の刀。

迫り来る地表、どんどん大きくなる標的、燃える民家、逃げ惑う人々。

様々なものが視界に入り、一瞬で消えた。

そして着弾前の刹那、自分の目に写ったのは。

上空からの脅威に本能で気づき、思わず空を見上げたベヒモスBの嫌に澄んだ、大きな瞳の輝きだった。

ビギッ。

やりすぎた。

着弾直後、ベヒモスの頭から肩口あたりまでが粉々に吹っ飛んだのは確認した。

悪かったのがその後で。

勢い良くぶつかることだけ考えていたので、止まるという発想がなかった。

いや、一応止まるつもりはあったのだが、地味にベヒモスの肉なり内臓なりで止まるんじゃないかなあ、という適当極まりない他力本願だったのがいけなかった。

対象を貫通破砕した拳句に、自分は地面に激突。

容赦無く地面にクレーターをこしらえて、20m程も埋まったのだ

ろうか。

即時瞬間移動などで脱出すればまだ良かったのだろうが。視野は真っ暗、慌てて上を仰ぎみれば。

首を失ったベヒモスの地が、滝のように降り注ぐ。

結界に阻まれて自分を取り囲むだけに留まる血の海だが、そうそうゆっくりもしてられない。

周りを血に囲まれれば呼吸すらおぼつかない可能性もある。

ああ、結界魔法バンザイ。

激突で粉になることも、血の海で溺れるハメに陥ることも回避できた自分は、即座に瞬間移動で直上100m程へと退避した。

一瞬の暗転の後、空に躍り出る自分。

眼下にベヒモスの死骸を見下ろしつつ、周囲は焼ける民家の地獄絵図。

先ほどまで逃げ惑っていた人々は騎士と思しき連中に誘導されて火の手のない大通りに集まっていた。

避難しそびれた人は、いないか？

焼けだされた範囲を飛び回るが、幸いにも猫の子一匹見つからなかった。

ホッと胸を撫で下ろしつつ再びある程度の高度まで飛ぶ。

そして使うはく雨乞の魔法。

文字通りの雨を呼ぶ、まじないの如き低レベル魔法。

しかし低レベルと侮る無かれ。

威力さえ出してしまえば……この通り。

沸き立つ叢雲、鳴り響く雷鳴。

数分後、土砂降りの雨が、降り注いだ。

「頑張つて駆けつけたら濡れ鼠にされたとです・・・エリスです・・・」
天然のシャワーだね！ とか言ったら殺されそうな目で睨まれたので五体投地で謝罪する羽目になり申した。
仕方なしにく洗濯>魔法にてドライクリーニング。
地味に血まみれだったけど、そんな近接戦になったの？ と尋ねてみると。

「最後っ屁で、吐血されました・・・さっきまで三倍早く動けそうなカラーリングでした・・・」

災難、だったねえ。

ホントホント、ってか、メリっさんなにレザードさんの真似してクレーター作ってんの？ 馬鹿なの死ぬの？ むしろ死んだかと思っただ！ とかエリスとじゃれ合ってる。

「ありや、急いで来る必要はありませんでしたか」

メリウがベヒモスの死体の下敷きになったときは肝を冷やしましたよ、と、どこかとぼけた口調が、頭2つ分高い場所から下りてきたエリスと二人、その声が聞こえた方向に向き直る。

長身の男が、そこにいた。

身に纏った外套はかぎ裂きだらけで痛々しく、毒々しい血のシミがそこかしこに染み付き。

どこかの戦場から戻ったかのようなひどい格好であったが。

「ソッチも何してたかしらんけど、大変だったっばいね」

見た感じ怪我もなさそうで、正直ホツとした。

コッソ、と彼の胸板をノックしつつ。

「二人目、坊さんゲットだぜー」

酒盛そこは腐の香

古代、神はそれに無限に大きくなることを許したという。終末の後に食物として供されるように、と。

最古の飼育牛のこと、ともいわれるそれ、ベヒモス（という名の巨大生物で、けしてオリジナルではありえない）の死体が二分分。あつらえたように、そこは物資乏しく備蓄を食いつぶして存続していた小さな町（住人にとっては大きな国）があり。

さらには歩く食肉を屠殺した人ならざる人がいて。

その人外が、食肉加工から保存までの処理及び設備建造までを瞬間に行い。

以て、動物性タンパク質が、溢れた。

「では、わざわざ歩いてきてくれた食肉さんに感謝を込めて、乾杯！」

かんぱーい、と、周囲の住民たちも思い思いのグラスを掲げ、一気にその中身をあおった。

自然の驚異による首都滅亡の危機が一転、謝肉祭に早変わり。

酒池肉林じゃ、酒池肉林じゃあ。

「ここでトリビア。酒池肉林にはエロい意味はない」

焼き肉の塊を両手に装備して、昔懐かし悪魔神官ごっこをしていたエリスなどに向けて要らない知識をたれ流してみた。

ちなみにこれを教えてくれたのは、今なにをしてるかわからない灰剣士だったりする。

「えええー、酒の池、肉の林で、どうしてエロい意味ないんですかー！」

おかしいですよメリウさん、と、酔いで赤くなった顔に????と疑

問を浮かべてエリスが憤慨する。

・・・なぜ憤慨・・・？

「この前描いた同人誌で、誤用してしまったやもしれませぬ・・・」
肉を食べきつてから地面にorz状態になるエリス。

ああそんなことだろうと思ったよ。

「相変わらずブレませんこの子は」
むしる腐り具合が酷くなっているのでは、と、魔法による偽装を解いたジオが、おおらかに笑う。

「うむ、地味に<塔>所属の全男から、奴に見られたら掛け算されるぞ！ と恐れられたかつてより純強化されたのが今の姿だ・・・」
「っ」

恐れおののけ、とばかりに震えて言う自分に、

「うええええ、何で私の趣味がバレてたんですか初耳ですよそれ？」
エリスが、意味のわからぬことを宣った。

「えっ？」

どこをどうすればアレでバレないとか思えたの？、と自分。

「えっ？」

なにそれ怖い、とジオ。

「えっ？」

さも不思議そうに驚くエリス。

・・・、助けて同士エイジ・・・。
自分は思わず頭を抱えた。

ひとまず人目のつかぬところへ消えます、と、モノさんとノナさんに言い放ち（当然返答が返ってくる前に逃げた）、適当な場所へと河岸を移した自分達三名は、ひとまず互いの近況報告会を行った。自分とエリスの分は既知の通りであるので省く。さて、ジオは一体どんな道程を辿って今に至るのかねー。エリスさん、お願いですのでドウテイという発音に過敏な反応しないで下さい。

「では手短に・・・」
胡座をかいて一升瓶ラッパをしつつジオが語ったところによると。

・ 謎現象で個室の中にレポート、洒落で<灯火>よ、とか言ったらマジで使えてビビる。

・ひとまず何があるか分からないので、密室内で自身のスキル確認、外の人を認識。

・魔法による偽装、及び防御系永久化魔法の開放、突貫。

・扉をくぐるとそこは病人怪我人の掃き溜め。　　おいイ大丈夫か今助けるぞ！　と、我も忘れて奔走。

・見覚えあるような廃墟だな、と気がつくのは認識範囲内から怪我人病人死人がいなくなつて一息ついたとき。

・せっかく治した皆が「神は言っている、治った体で王を誅せと！」とか盛り上がりつつ暴徒レースを始めたこと。

・面倒事の二オイがするので、隠密技能をフル稼働させて事の経過を見守る。

・クーデター成功、色々ゴタゴタしてそうだね、と、ひとまず酒場の屋根裏に潜んで情報収集。

・この町の怪我人病人はもういない、と判断して、近隣の町の様子を見てまわることに。

・<世界樹前>以外の町を回り、病人怪我人などの治療を空からの光雨光剣で済ませ、さあ最初の町（首都）経由で<世界樹前>とやらに行きますか、とした段でベヒモスの襲来。

「で、至る今、という感じですか」

ゴクリ、と一升瓶を空にしておかわりを催促しつつ、ジオが近況報告を締めくくった。

「でも、結界張ってたんだったら何でそんなに服とかカギ裂き作ったりしてるの？」

結構血まみれだし、とおかわりの瓶を差し出しつつ聞いた自分に、

「いや、万が一結界に怪我人やらが触れて誤発動なんかしたら大変かな、と思って治療中は結界解いてたんですよ」

なので、痛みにのたうつ人に引つかかれたり斬りつけられたり、病人に血を吐かれたりしましたねえははは、と。

ジオがなんともないことのように、笑った。
自分、素でこの友人を誇りに思う。

「かっけー、ジオさんかっけー」

強くもないのに飲み過ぎてフラフラになっているエリスもジオをべた褒め。

「素敵！ 褒美にメリッさんを抱いてもいいのよ！」
ひとまず首絞めて落としておいた。

同士の苦勞が忍ばれて、少し泣きそうになった。
もう埋めようか、これ……。

「いや、死んだ目で本気に穴掘っちゃダメですよ！？」
離してくれジオ、この肅女は危険過ぎるっ。

「いけません、土地が汚れてしまいます！」
ジオの言葉に、はっ、と正気を取り戻す自分。

そうか、確かにこんなもの埋められたら近隣住民の皆様にも申し訳が立たないものね。

「ありがとう、ジオ。 過ちを犯さずにすんだ」

「いやいや、いいんですよ、と謙遜するジオと、がっちり握手。

「おいしい、いい加減泣くぞ？ 泣いてしまうぞ！？」

驚くべきことに自力で気絶から復帰していたエリスが、拗ねていた。
ああ、普通にしていれば超優秀なのに、なんて残念な子だコレ。

草葉の陰で同士が泣いているのが手に取るようにわかるわ……。

「いやいやいやいや、何勝手に殺してますかメリウ」

スパッとキレよく自分にツッコむジオは、次の言葉で自分とエリスを大いに驚かせた。

「彼、至極元気にしてますよ」

助太刀それはスタイリッシュな人体消失

息を切らせて「ようやく見つけた・・・っ」と呻くモノさんとノナさん二人に「ちよつと仲間回収しに行つてきます」と告げて即時離脱を果たした自分達。

微かに「ちよつ」という脱力した声と、その場に倒れ込むような音がしたような気がしなくもないけどきつと気のせい。

結果的に町単位で腹一杯になったから明日からきつと頑張れるよ、ふぁいと。

そんなことを考えつつ、エリスを背負つて空を舞う。並んで飛ぶジオの指示にて、先を急ぐ。

侍組サブリーダーにして、やや魔法使い寄りのオールラウンダー。

剣術馬鹿のリーダーのツレにして、一番胃の痛い役回りの人。

そして外面常識人に見せかけた、エロゲーマー。

同土エイジの元へ、今現在フルスロットルで飛行中。

「彼に遭遇したのは、ウチが二つ目に立ち寄つた町・・・と言うか村で、でして」

何故最初にそれを言わない、とばかりに自分とエリスに地獄突きにてツツコミを食らつたジオが咳き込みながら話したところによるとエイジは現在、その村を守っているそう。

平地で見通しの良いく世界樹前>などと違い、山沿いに位置するその村は昔から魔物の巣窟である山方面からのゲリラ的な魔物襲来に晒されているらしく。

「村の周囲を堅牢な壁で囲み、村人の中から何人かを選んで訓練して歩哨に立たせ、エイジ自身が単騎外周掃除、というのを繰り返しているようですね」

すっかりその村の防衛隊長っぽくなってましたねえ、と締めくくる
ジオ。

「うわあ、それに至る経緯が見えるようで怖いわ」
通りがかって村のヤバい状況を救って、このまま捨て置けるか、と
ばかりに持てる力を遺憾無く発揮したんだろうなあ、と、自分の脳
内でエイジが壁作ったり訓練したり悪い子いねがア、と魔物狩りす
る様がやけにリアルに再生される。

「なんてエイジさんらしい・・・」
面倒見が良すぎるんですよねウチのサブリーダー、と、ちょいと嬉
しそうに言うエリス。

ははは、この義理父的ファザコンめが。
あと、一番面倒かけてる貴様が言うなというセリフでもある。

「その村には夜中に到着して、気配消して状況調べているときに彼
とバッタリ会いました」

そこへ直れ魔物・・・あれ、ジオさん？・・・いや、幻覚か、チネ
エ！ ちよ、ま、おま、本物！・・・と言う流れで。

「チッ。それは災難だったねえ、二人の潰し合いにならなくて何
より」

にこやかに胸をなでおろす自分。

「力一杯舌打ちしましたね今？」

ははは、こやつめ。

ははは。

がるるるっ！

「何でこの人達はすぐに空気を殺伐とさせるのだろう・・・」
エリスが、いまさら一般人のようなセリフを吐いた。
腐り姫の分際で。

あ、ゲームの方は地味に名作。
変なプレミアついてたけど、今はどうなってるのかなー。

「で、ジオはサクっとその村単位で癒してこっちに帰ってきた。
エイジは村が落ち着くまで、とその場に残った、ってことでいいの
かな」

言う自分の言葉に、頷くジオ。

「ええ。で、ウチもこの国周囲だけ怪我人病人見回ったらあつちに合流して、出来れば魔物根絶くらいまでは持っていく心づもりでした」

戦力が増えたので、案外夢物語でもなくなって来ましたねえ、と笑うジオ。

「ふむ、でもエイジだつて単騎で結構な使い手のはずだけど・・・
その村近くの山つて、そんなヤバイの？」

あー、でもそんなだつたらとつくに滅びてるよなあ、という自分に、

「正直、ウチらにとってはどうということのない連中なのですが、
単に数が尋常でないらしく」

村人を引きこもらせて偵察に行ったエイジ曰く、山向こうに数千を
超える魔物の集団が暮らす集落があるらしく。

「普段」村周りに出没するのは、その集落からドロップアウトして
きたハグレの連中のようにだ、ということ。

「案外キツイ山を超えてやってくる落ちこぼれ共、か。その道す
がら疲弊してたお陰で今まで何とかやってこれた、という感じな

のかー」

そんなのが平時なのに「エイジが守らなければならぬ」と言うこととはつまり状況が変化した、と見るべきか。

「ええ、山向こうの連中が、こちらの国に興味を持って侵攻してきている、ということですね」

ハグレ者の逃避でなく、意思を持った集団の行動。

集団行動が出来るのなら、幾許かの同族意識やら強力なリーダーやらが存在してしかるべき。

うわぁ超面倒。

「そう言えば最近魔物増えてきてるとか聞いたっけ……」
モノさん辺りが言ってた気もする。

つてことは、侵攻ルートが複数存在するとかも考慮しないとダメか。

「あとは、別の群れが流入してきている、とかですかねえ」

考えられるとするなら、と、ジオが心底嫌そうに言葉を吐き出した。

「しかし不幸中の幸いか、それなりに戦闘力高いメンツしかこつちに来てない気がするね」

人知れず純生産職さん達が死んでいたりする可能性とかは考えたくないもので口に出さなかつた。

<塔>のフリーメ ソン連中だったら自慢の謎技術で20匹程度の小鬼さんは平らにすると思われるけど。

そんな心情が漏れてたか、ジオが苦笑しながら言ってくる。

「あー……でも陶芸のお姉さんとか、貧弱瀬戸物アタッカー、とか言つて陶器破片でブラックジャック作つてオーガとか血まみれにしてた記憶しかないですなあ」

何それ初耳。

つてかあの人地味にウチの格闘家より筋力あった気も。
重いからなあ、粘土とか。

地味に重労働だしなあ、窯出しとか……。
うわあ。

「……なんとというか、別に私達が心配するような事もないと思いまーす」

エリスの声が呑気に答えを出した。

ヤバかったら逃げる位の事はするだろうし、杞憂というものかねえ。
ああ、空が落ちてきたらどうしようっ！ 引きこもるっ！

……どう考えても小学生の言い訳だなあ、故事。

そんなこんなとダベリながら先を急いでいた、数分後。

自分達は、眼下に広がる黒い大地に散らばる息絶えた魔物の新鮮な遺骸を発見した。

村に向かって真っすぐ飛んだにも関わらず、自分達がやってきた方向からの進軍を想定させる迎え撃たれかたをしている。

「挟撃、ですかね」

もしくはコレが罠で、別働隊が村を襲っているパターンですかね、とジオが冷静に脳内戦況を組み立てる。

「うわあ、やっぱりそうみえるかー。まだ焼き討ちとかはされてなさそうなのが救いか……」

村の方角の空を見る。

雲ひとつない空だ。

無論、地面から湧く胸糞悪い黒煙とかも無いようだ。

そしてこの場にエイジがないということは。

「急ぎましょう、予想外に頭が切れる魔物達のようにです」

少なくとも初歩的な策を弄して来る程度には、と、ジオ。それに頷く自分。

「はいよーシルバー、ごーなへー」

運ばれているエリスが、上機嫌に刀を抜いて行く先を指し示した。はいはい、ではさっさと行くといたしましゅうねー。

エイジが築いた堅牢な壁は、辛うじて魔物たちの攻撃を凌いでいた。しかしこのままでは村内部まで侵攻されるのも時間の問題か。空から見た限り、エイジの孤軍奮闘虚しく村は完全に包囲されているようだった。

いかに強力な個人であっても、所詮は点。線や面での攻撃は防げない。

そして一番まずいのは、エイジの持つ広範囲魔法の射程内にすっぽりと村が収まってしまふという状況。

もしくは単純にMPが尽きているのかもしれない。

状況的に、かなりエイジは焦っているだろうことは想像に難くない。

「お待ちどうさま、同士」

ひとまず第一弾攻撃として、サポート爆弾を投入することとする。

地面までの高度10m弱の所まで降下すると。

自分は躊躇なく背負った荷物を投下。

よろしく願います、先生。

「どーねー。うわ、ちょっと高過ぎじゃないですかこれ怖アー」
驚く魔物たちとエイジをよそに腕組みした姿勢で地面に降り立ったエリス。

おお、足のバネだけで着地衝撃を逃したぞあの肅女痴ロリン、スゲ

エ。

流石腐っても、腐ってても、どうしようもなく腐ってても！

「腐ってる連呼しないでイイから早く周り何とかすれー！」

「アアアアアッー！ と気合一閃ほとばしる秘奥義く雲切りの太刀で周囲の魔物を横薙ぎにしたエリスが叫ぶ。

はいはい、では同士にチクるのは後にまわすします。

「んじゃ、自分はあっちもらうね」

ひとまず山方向を掃除しながら・・・逆侵攻してくるわ。

「では、ウチは村周りを」

壁を結界で保護してから・・・ちよつと均してきますか。

こつん、と拳を打ち合わせて。

いつものメンツ所属の二人が、出撃。

その結果は、語るまでもなし。

「ただいまー、あー疲れたー！」

結局山超えて掃除してきちゃったテヘペロっ。

アレへの変身とく報復く結界の併用が鬼過ぎて相手に同情しちゃった。

眼下の村周り掃除を終えていた三人に空から声をかける。

血なまぐさい風がやけに清々しく感じられ・・・ねえよコレ、後で掃除してまわらねば。

「おかえりー、やけに遅かったけどどれだけやりたい放題してたのー？」

結構な返り血に体を染めたエリスがジオに洗濯魔法をかけてもらいつつ手を振ってきた。

「……あー、詳しく言うところ過ぎて夢に見る、とだけ……ごによごによ。」

えーなに聞こえないから降りてきてー、というエリスの声をうけく飛行>を解いて自由落下。

高度エリスを捨て……落とし……げふふん、の、三倍程度。無駄にクリクリと回転しつつ、迫る地面を感覚で捉え。さあ華麗に着地、という段で気がついた。

「あ、物理無効結界、解いてたんだっけ」

一つはエリスを背負ってる時に事故でボヨン、と弾いてしまわなため。

その後は、<報復>で確実に吸収ダメージを敵に返すために。しかも中途半端に格好つけて回転したから、三半規管が狂ってたりもして。

やけにゆっくりと時間が流れた気がした。

変な角度で足裏をそれた着地が、地面をえぐり。

同様に碎けて赤い体液を撒き散らす自分の足先。

魔法を解いたときに「空を蹴った」のもマイナス要因で。

良い感じの勢いも、あった。

痛みは、来なかった。

だけど段階的に低くなる自分の身長と。

三人の固まった笑顔が段々空へと遠のいていくのが、やけに鮮明に感じられ。

「ああ、自分が地面にめり込んで行ってるだけか」

そんな言葉を吐いたつもりだったが。

その言葉を発することもなく頭の先まで自分の元体である赤に没し。

メリウこと自分は、友人三人の目の前で。

地面にぶつかって綺麗に血の池になるという人体消失マジックを披露することとなった。

有り体に言えば。

自分は、死んだ。

暗転そこは密室で

死を想う。

生活を送るうちに、ただ慣れで生きていると感じたとき。

この世の誰も知り得ぬ、しかし誰にでも必ずくる未来を考える。

漠然とした未知への恐怖で、ダレた心に鞭を入れる。

死を想う。

今こうして生き、考えている自分自身は、必ず死ぬ。

物語でも他人事でもなく、確実に死ぬ。

死を想う。

死後には、何かあるのか。

なに食わぬ様子で目覚め、死という眠りに落ちる前とは違う「自分でない自分」として当たり前前に生活していかないだろうか？

死を想う。

一番救いがあるのは、何も無いことではなかるうか。

眠ったきり、それまで。

自分自身が居なくなる。

それで終わり。

実に後腐れ無い。

願はくば、そうであれ。

そう思って、瞼を開いた。

・・・考えることが出来ている時点で、それだけはないと分かっているながら。

地面に衝突して愉快グロ死体になっただけの自分は、今、自殺現場

でない所にいる。

目を見開くと、そこは闇。

もし体があるのなら、と目が闇に慣れるのをじっと待つ。

果たして、目が、そこをうつつすらと補足した。

密室、であった。

あちらに飛ばされた時のような飾り気無い密室・・・ではなく。

明らかな機会式の操作パネル、手では開かぬであろうスライド式のドア。

足下のカーペットに、天井のライト。

謎広告の貼られた壁面。

実に見覚えある、エレベーター内であった。

「どづいつことだ？」

ひとまず室内を調べよう、と歩き回る。

まわろうと、した。

しかして、果たせず。

動くことが出来なかった。

そこでまたしても、疑問。

自分はどうかやって、この密室の上下左右を見回した？

自分だけしかいない密室、闇色に固まったその場所にて。

自分は、死を、想わずには居られなかった。

瞬きした、と、思われる。

自分自身の体が有ったか無かったかすら分からぬエレベーター内で、
なんととはなしに、瞬いただけだったと思う。

その一瞬で、闇色エレベーターは去り。

世界が形を取り戻した。

近くで誰かの泣く声が聞こえた気がする。

その後ろから、怒ったような声も、聞こえた気がする。
血なまぐさい風の匂いがする。

ぼやけた視界に真っ先に飛び込んでくるのは、どこと無く安心した
感のする、友人の顔であった。

「蘇生、成功……ですか？」

ほう、と短くため息をつき、友人ジオが手を差し伸べてくる。
自分は無言でその手を取り、されるがままに引き起こされた。

蘇生……ああ、生き返ったのか、自分は。

「えーと、ありがとう？」

ひとまず、握ったままの手に力を入れて握手に移行。

そのままブンブンと振り回し、感謝の意に花を添えた。

「なぜに疑問系……」

苦笑いするジオの手を解放すると、先刻からイヤな予感があるジオ
の背後を覗き見た。

エリスとエイジが、超良い笑顔で、自分を手招きしていた。

意味もなく、死を思わざるを得なかった。

そんな訳で、殺られる前に殺れとばかりに。

ひとまず五体投地にて謝罪を敢行した。

即時謝罪が自分のジャステイス。

鼻柱がへし折れた気もしたが、外の人も言っている。

「超謝れ」と。

うおわぁ、と、自分の謝罪スタイルに慌てたのかエイジが愉快に声
を上げる。

うひい、と、エリスも謎の吐息。

自分は、死にはしなかったけど、泡吹いて気絶した。

で、目が覚めると、そこは見知らぬ家屋内の様。

その部屋の真中で、自分はガツチリと縄で拘束されていた。

何でさ？

「いや、何でと言われましても、自分の胸に聞けとしか」

自分の右爪先をしきりに気にするジオが、どうでも良さをげに答えてくれた。

あ、先刻潰された自分のボール二個が癒えてる、多謝。

超痛かったので潰れたままだったらオカマ言葉で通そうとまで思っていた。

そしてなにより、よく死ななかった。

二度目の死因、金的、にならずに済んでよかった。

「友人の正気を取り戻すためとはいえ、その股間を蹴り潰してしまつた、死にたい」

感触がまだ残ってるんですがが、と、ジオが悶絶している。

あー、きつと生々しかっただろうねえー。

「メリっさん・・・正気に戻ったか？」

そんな声をかけてきたのは、部屋の外へ通じると思われる扉の外。

うつすらと開いた隙間から、二つの左目がこちらを覗き込んでいた。

エイジと、エリスのようだ。

「失敬な、自分はいついかなる時も正常じゃないか」

蘇生した後の記憶が若干ないけど、きつと覚えてないってことは大したことにはなかったんだよ。

・・・何故目をそらす、三人とも。

「い、いきなりっ、落っこちてきて血の池になって！ 何やってるのこのバカ！」

半分涙目になって部屋に入ってくるエリス。

あー、ごめん。

流石にアレは自分も猛省です。

外の人補正があると思うのでトラウマまではいかなかったと思いたいけど・・・。

「し、心配したんだから・・・怖かった・・・」

半泣きから本泣きへと移行してしまったエリス。

頭でも撫でてあげるべきか、と思ったが、予想以上にガツチリと拘束されていて身動きが取れぬ。

仕方なく、アイコンタクトで同士に指示を飛ばした。

「よろしく同士エイジ」「了解同士メリウ」、とばかりに痴ロリン慰めるのをエイジに任せ、ひとまず外してもらうことに。

グスグスとしゃくり上げるエリスを見て心が痛むが、償いはコツコツとやらせて頂く方向でご勘弁を。

「で、どうでした？ 一回死んでみて」

爪先の違和感から脱したのか、ジオが備え付けのベッドに腰掛けつつ聞いてくる。

「ん。ひとまず、カラオケ屋のエレベーターに、戻った」

動けもしなかったし、自分以外箱の中にいなかったと思う、とも付け加えた。

ふむ、それは・・・謎な・・・、とジオが黙りこむ。

正直、自分も何がなにやら分からない、が。

「ひとまず。ひとまずだけど、＜蘇生＞魔法が自分達にも有効なことが実証された」

こちらで死ぬと、こちらに飛ばされる前に居た場所へ意識が戻る、という情報も得られた。

コレが何を意味しているのかは、まるでわからないけど。

「ふうーーーーー。では、肝は冷えましたが。情報取得感謝です」

ですが、今度はもう少し考えて死んでくださいね？と、釘を刺されて。

はい、と答えるしかない自分が、此処にいる。

魔法があれば、生き返る。

それはつまり、無ければそれまで、ということだ。

自分とジオは、基本死ねないか、と。

ガツチリと亀甲縛りに固められた自分は思っのだった。

質問それはバレバレで

拘束から解き放たれ、今まさにフリーダム自分・・・っ！
さあ、何をしてくれようか・・・と一足飛びに外へ駆け出そうとした自分。

勢い良くドアをバーン！

そして今まさに部屋に入ろうとしていたエリスをドアでバーン！

・・・その、何だ、ごめん。

「鼻を押さえて涙目でプルプル震えているエリスさんたら超可愛い」
ひとまず褒めから入ってみる。

「ふるはいこのしれもの」
五月蠅いこの痴れ者、と、睨んでくるエリスさん、正直すまんかった。

エリスの背後にいたエイジと、室内にいたジオが「何やってんの・・・」と八モる。
外開きのドアは、いきなりあけちゃダメだぞ？
こうなることがあるからなー、以上、本日の教訓でした。

「ごめんごめん、ほーら痛い痛い遠いお山に飛んでいけー」
蘇って縛られていただけなので色々満タんな自分は、無駄にく白銀癒手>でエリスを攻撃。

ぺぷつと鼻を押さえた手の上から更なる魔法的圧迫を受けひっくり返るエリス。

しまったこの魔法、地味に「押す」んだっけ・・・。
廊下をゴロゴロ転がって壁にぶち当たり、きゅう、と目を回すエリスから、そっと目を逸した。

あつれ、またもや失敗じゃね自分。

自分内エリス負債が増量中な今日この頃、いかがお過ごしでしょう。
。。。

「・・・相変わらず過ぎて色々言いたかったのがどうでも良くなっ
たんだが」

一連のドタバタを静かに観察していたエイジが、眉間をつまみなが
ら苦い顔。

ああ、そついやエイジ回収に来たんだつたよね、すっかり忘れてた
や。

「えーと。 お久しぶりエイジ。 色々すつ飛ばすけど無事で何よ
り」

さつきはお疲れ様、と、右手を差し出してみる。

「ああ、お久しぶり。 訳のわからない状況なのを無事と呼んでい
いかは別として、さつきは助かった、ありがとう」

山向こう確認してきたけど、綺麗サツパリだったね、あれどうやつ
たの？ と差し出した右手をがっしり握りシェイクハンド。

シェイクシェイク、ちょ、振りすぎらめえバターになっちゃー。

「・・・いろいろ相変わらずで安心した。 ジオもエリスも変わ
りないようですよと安心したよ」

僕らの他にもまだこつちに来ちゃった人とか居るのかな、と、心配
げに首を傾げるエイジ。

「うん、同士エイジも相変わらずそうで安心だ」

特に周囲への心配っぷりとか、実は負けず嫌いで今まさに握手が握
力比べに移行しつつある辺りとかも。

だが自分とて負けぬ、ふんぬぬぬ・・・。

「おいエロゲーマーズどもー。背後でエリス嬢が二人の硬すぎる握手でフヒつていますが良いのですかー？」
足音を消して部屋から出てきたジオに指摘され、エイジと二人、転がっていたエリスをチエツク。
ふむ？

取り立てて変なところはない・・・。
いや、よくよく見ると、口元に拭った後・・・？

「ジオさん、私はもう腐趣味からは卒業しましたようー、ヤダなモウー」

にこやかに立ち上がり、バンバンとジオの背中を叩くエリス。
・・・いや待て、それは無理がありすぎる。

あ。
まさかこいつ、エイジの前だからって猫被っていい子ちゃんです通そうとしてるのか！

「あはははー、何メリウさん、やだなあ、なに私を見つめてー」
込められた眼力で「協力求む」と脅迫してくるエリスに。
小さく頷く自分。

「途端に動きが胡散臭い気がするけど？」
バツサリ切り捨ててくるエイジ。
ああうん、どこをどう見ても不審人物の挙動だよな。
今から、コレを、騙せるのか・・・？

「エイジに疑われてる現状を打破するぞエリス！ 自分が今から質問を出す、それに答えていくんだ！」
仕方ないので勢いで押し流そう、うん。

「はい、ばつちこーい！」
よし、エリスもノツてきた。
相変わらずの芸人体質に、ああ、もう駄目じゃね、という気分がしないでもないが。

「よし、いい返事だ。では第一質問。半ズボンの男の子にトキメキを感じる？」

「はい！・・・ゲフゲフ、いいえ！断じていいえ！可愛い男の子とか母性愛的に和みますよね！という意味で、はい、です」
・・・限りなくアウトに近いチエンジ。
つてか貴様、腐った上にシヨタコンだと・・・っ

「・・・第二質問、着崩したワイシャツに興奮する？」

「しまっ・・・げふふん、嫌だなあ、だらしないー、そんなの見たら直してあげちゃいますねー」
もうダメだっ・・・だけど勢いで流すしかないっ・・・つてか怖くてエイジの顔色みれねえ。

「第三質問っ、懐かしアニメT&B主人公コンビ、どっちが攻め？」
「ウサギちゃんの背伸びした息子攻めのオジサンの父性受けに決まっているだろ常考・・・うげほっ、た、たまにはお姫様抱っここでウサギちゃんを受け止めて助けてもいいと思っんだ私！」
限りなく酷かったがなんとかもちなお・・・したのかコレ？
つてか、一問目ですでに詰んでいたがな。

「一つ、質問してもいいかな？」
顔を伏せ気味にしているエイジから、ポツリと声が漏れた。
ウヘエ超こええ。

「はい、な、なんでもこーい！」

エリスさんたら超怯えてるー、へいへい、バッタービビってるー。さて、同士エイジはどうトドメを刺す気だ……。

「質問。攻めの対義語は？」

「受け！！」

守りー、守りー！

このバカ……なんとという王道に引っかかりやがる……オワタ。ってかエイジめ、三問目の攻め受けの流れで潰しに来たか、やるなっ。

「……しかも何が間違ってるのかわからない……と言うか、正解でしょ、と胸を張るエリス嬢が痛ましい」
ジオが天を仰ぎ見て。

数分後、村の周囲を男三人で掃除する傍ら。
村の入口に正座させられ続けるエリスの姿があったという。

ひとまずの脅威は去った、と見ていいだろう。

村の人々に惜しまれつつ自分達に合流したエイジを伴って、一路四人は首都という名の町を目指す。

あっちについたら、一応この村への兵備派遣をお願いしとかないとねえ。

そん首都への帰り道。

飛んでいてもいいのだけどね……今の面子、エリス以外は飛べるといふ現実。

「来た時と同じように誰かがオンブしてくれば楽じゃないですかー、歩くのヤダー」

長時間の正座で膝に来ているエリス。
いや、歩きになったの、君への罰ゲームらしいので。

「若いうちは歩いておきなさい、元の世界に戻ったら意味はないかもしれないませんが・・・習慣付けておけば悪いことはありませんからね」

仕事につけば途端に歩かなくなりますよははは、と、ジオが笑う。

「ああ、確かにね。僕は学校の階段なんかを毎日登り降りだから
案外歩けてるんだけどね・・・ほらほら、君は若いんだからもっと
シャッキリする！」

リアルが学校教諭のエイジが、けど外の人の体力を持って帰りたいねえ、なんてこぼしながらプルプル歩くエリスを応援する。
ビタイチ物理的には助けられないけど。

「えりす、しってるか・・・マジで歩かなくなると、足腰が弱る」
もう本気で外の人持って帰りたい！。

痛みのない健常を超えた体が欲しいー、と、妖怪人間チツクに叫ぶ
自分。

そんな年寄り連中三人の体力談義に、エリスは「私も、ああなるんだろうかー」と、将来の健康事情に不安を感じている様子で。

「・・・がんばろう」

色々と、と、咳いているエリスの姿に、自分は小さく笑って。

「がんばれ」

自分にしか聞こえぬ声で、エールを送った。

合体そして出来ちゃった？

題名でエロい妄想した人は、時計の分数回腹筋な。

のんびりのんびり徒歩の道行き日も暮れて。(村到着(夕刻))

魔物討伐(同左) バカ死亡(同左) 行き帰り玉潰しエクス

シスト 一晩明けて 掃除とか(夕方まで) イマココ、な
時間経過である)

夕闇染まる平野の景を郷愁混じりに見て和み。

さて、このまま飛んでいくのも無粋極まりなしくて感じだし、ここ
らで野営しようかと、他三名に声をかけてみた。

「ほいほい、それも中々オツですな」

結構ノリ良くジオが応じてくる。

あー、キャンプとか好きだったもんね確か。

「やったー、ようやく休めるー！」

エリスが大喜びで地べたに大の字・・・おいしい、もうちょっとどう
にか・・・まあいいか。

今まで休憩なしで歩きづめだったしねえ、色々設営はやっとくから
そこで休んでなー。

「別段急ぐ旅でなし、か」

出来れば村に兵士何人が寄越して欲しかったけど、と、心配性のエ
イジが苦笑いする。

そして、足元に寝転ぶエリスを見て苦笑いが深くなったりする。

「んじゃ、サクッとテント・結界・食事準備しちゃうわさー」

手伝うよ、というエイジとジオを制して。

血の池トラウマのお詫びに、と、大人げなく色々駆使する自分。テントと簡易キッチンをゾルゾルと袋から取り出して即時設置、及びその周囲に結構な威力で魔法壁貼ってつと。

ハイ完成。

「夕食出来るまでのんびりしててー」

キャンプといえばあれ、な、カレーでも作ろうと思う。

コメ・・・コメがつ・・・欲しいっ・・・

けど悔しい、無いからナンにしちゃう！

「ほいほい、では手が足りなかったら声かけてくだされー」

即時靴を脱いでテント内に移動するジオ。

設置したテントが、魔族（仮）さん達との遭遇時にレシピに落としものだったので、その広いこと。

・・・だからと言ってロンダートからの月面宙返りとかしないでください縊るぞ糞坊主。

「ほら、エリス。寝るならテントの方にしなさい」

地面に大の字な、たれエリスさん。

エイジに連れられテント上。

いやぁ、正直助かるわ・・・地味に彼女がフリーダムなので。

「あーいー、あ、ちょ、襟首掴んで持って行かないデー・・・あー、楽だからいいかぁ・・・」

すっかり休憩モードのエリスが、すでにダメ人間になっていた。

でもまあ、大いに働いてもらったし大目に見るべきか。

さてさて、んではちやつちやつと飯作りますかねえ。

肉々しいベヒモス肉カレーを胃に収めた四人は、ひとまず合流後の
お楽しみ。

情報交換と相成るわけで。

カクカクシカジカー、マルマルウマウマァー。

「と、言う訳で、このく英雄く様を売り渡せば、自分達は一生楽し
て生きて行けることと相成ったわけだ」

ひとまず嘘は言っていない感じにエイジに情報を流してみる。

「ははは、ぶつちゃけ売り渡してもこちらに来るリターン低そうだ
けどねえ、国力的に」

ですよねー、と素で納得する自分。

「で、ウチが売り渡されるのが既定路線っぽく聞こえてますけど、
そこら辺どうよ?」

ジオはすっかり酔っ払って横になりつつ、適当な文句を言ってくる。

「え?」

真顔で驚いてみせるエイジと自分。

「え?」

ちよいと顔が固まるジオ。

なんとも微妙に空間が凝固する中響く寝息。

「ZZZZZZZZ」

静かだと思ったら、痴口リンはすっかり寝入っていたりした。
寝る子は育つ。

・・・本当に?

「ふむ、んじゃそろそろ真面目にいきますか」
丁度エリスも寝てるようだし、と、彼女と少々距離を取り。
ん？、と、自分の態度に違和感をもったのか、エイジとジオがこちらへとやって来る。
うん、呼ぼうと思ってたから手間が省ける。
野郎三人、面突き合わせ。
ひとまず口火を、自分が切った。

「さてさて、ひとまず。弱音でも吐こうか。自分ら、元いた場所に帰れると思うかい？」
無限袋の中から一升瓶を取り出して、キューツと行きつつ、友人二人に問いかけた。
無論、答えなど決まっているが。

「分からない、だね。なにせよ情報もない、状況が理解出来ない、そもそも元いた場所さえ本当にあったのかと疑い始める始末だよ、僕は」

一息にそう言つと、自分の差し出した瓶を掻つ攫い乱暴に喉へ中身を流しこむ。

ゴクゴクゴクゴクポオ。

げぼげぼっ。

エイジ、慌てすぎ。

ひとまず言おう、落ち着け。

「平気ですか、エイジさんや？」

咳き込むエイジの背中をさすりつつ、ジオが雑巾で飛び散ったブツを拭きとった。

涙目で謝るエイジに、気にせず、と手を振って、瓶を片手に元いた位置に寝そべるジオ。

そのまま瓶の中身を一口あおり。

「今現在分かっている繋がりっぽいのが、死んだら元の場所に戻る、というメリウ臨死情報だけですしね」

しかも体は動かない、しかし周囲は見渡せる、なんて状況なんです。たっけ、と、瓶をこちらに寄越しつつ言うジオ。

それを受け取り、キュキューっと、ごっくん。

「そうなんだよねえ。すわ、魂状態？ 的な視点だったのかなあ、と、振り返ってみると思ったりしてる」

時の止まったようなモノクロの世界、明かりもないようなはずの密室を見通す目なんて、中の人的自分は持っていないはずだし。

あとは、もしかしたら自分以外にも死んでたら、あそこで鉢合わせになったのかなあ、なんて思うけど。

「流石に、ジオと一緒に死んで確かめてくる、なんて言えないしねえ」

<蘇生>使い二人が手に手を取って退場なんて、正直目も当てられない。

かと言って、あの時一緒にいた残り二人と出会ったとして「やあ貴様等、どっちかもしくは両方、試しに死なない？」とは言いたくない。

「現状だと、本当に今を生きる、しか無いね」

咳き込みから回復したエイジが、自分の手渡した瓶を口にし、静かに傾けた。

今度はゆっくりりと、飲み込めたようだ。

「ひとまずは他に迷い込んでる連中がいなかどうかの探索重視で行く、程度ですかね」

残り少なになった瓶の中身を一気に飲み干すと、ジオはムクリと上

半身を起こして胡坐をかいた。
空瓶がこちらに転がってきたのを、ぬるりと袋に詰め込む。

「んじゃ、ここらで弱音さん終了というところで。ひき続いて、なにか気づいたこととかあつたらどうぞ」

どんな事でもいいんで話していいこうか、と、自分は新しく中身の詰まった一升瓶を取り出して開栓。

寝きたれる痴ロリンを少し遠間に、野郎三人のブレインストーミングじみた一升瓶バトンリレーが、続いた。

「で、大学時代にロトの紋章流行らせようとして研究室に全巻寄付したんだよ」

プチ流行で終わったけどねえ、と、語る自分。

色々と話しているうちにどうでもいいような方向へと流れた野郎飲み会、現在の議題は昔流行った漫画。

「ロト紋いいよね。僕も全巻持ってました」

青年誌っぽいのでやってた続きのやつは読んでもないんだけどね、とエイジ。

「実際問題、アレとダイ大は鉄板でしたな」

ドラクエ世代的に、とジオ。

確かにねえ、同意。

「そっぴや、その両方共合体魔法あつたねえ」

未だにバギラの衝撃が忘れられない。

「あつたあつた。メドロアとか強すぎないか、と、当時の少年時代な僕も流石に突っ込まざるを得なかった」
そんなことを言うエイジに「ってかいつも突っ込んでばかりじゃねえか同士は」とツッコんでみる。

「ツッコみにツッコむ・・・でゆふふ」

！？

なにか不穏当な戯言が聞こえたが・・・ん、寝てるな、呼吸からすると。

ふう、野郎どものバカ話で起こしてしまったら申し訳ないな的に思ってたので、ひとまず胸を撫で下ろす。

「で、今ふと思ったが。できないかね、合体魔法」

例えばこんな感じでー、と、自分は何気なく左右の掌に別々の魔法を思い浮かべて発動させてみる。

右の<全究回復>、左の<白銀癒手>。

ボウ、ボウ、と、淡い光を湛えて現れる、それぞれの魔法。

「っっ！？」

なん・・・だと・・・と、三人が固まった。

出てる・・・出てるぞ・・・？

驚きに目を丸くした周囲及び自分。

OKOK、落ち着け落ち着け。

深呼吸ー、吸ってー、吸ってー、吸う。

よし、肺がはちきれそう。

「勢いで行ってしまえ合体！」

別々の魔法が載った掌を、ヤケ気味に叩きつけ。
力任せに押し付けて、握りつぶす。

合わせた掌の内側から、覚えなき手応えが帰ってきた。

自分はそっと、掌を開く。

瞬間的に広がり、テント内に降り注ぐ、白銀色の雨。

「おおっ」と、二人が驚きを露わにし。

外の人補正でいろんなモノの見えるようになった素敵自分アイが捉えたその光の雨粒は。

極小の、手のような造形を、していた。

まさかの合体魔法、できちゃった・・・？

発覚それは限定解除

光の雨に打たれつつ、気持ちの悪い語尾マークに「シネ」「シネ」と大絶賛を受けても自分は元気です。

洒落でやったら出来ちゃった、という笑えるようなそつでないような状況である。

「できた、ねえ・・・」

エイジが半笑いでこちらに視線を投げってくる。

うー、と、こちらも半笑いで肩をすくめてみたりする。

「どういうカラクリなんですかねえ、これは」

早速ジオも同じように試し、再び降り注ぐ当たり判定・・・と言うか押し判定・・・付き光の雨。

ふむ、自分だけのユニークスキルでなくて一安心。

「んー、色々試すしかないかね」

幾つか仮説は思いつくけど、と言いつつ。

もう一つ思いついたのを実行してみんとする。

着想は合体魔法と同じく漫画。

使うのはオリジナルの様に5つでなく3つ、更には種類の違う感じ
で。

<全究回復>と、右手親指に光を灯し。

<白銀癒手>と、右手人差し指に光を灯し。

<浄化>と、右手中指に光を灯し。

「合体」

三つ指のロボットアームの如く、光灯す三点を、合体。

僅かずつ色の違う白光が、ピツと弾いた三本指を鏢とする剣になる。おおお、という、エイジ、ジオの驚きをBGMに、自分は光の剣を真一文字に振り抜いた。

かすかな風切り音と共に振り抜かれたその剣の軌跡を追うように、光の雨が乱れ飛んだ。

「今のところ、だけど。属性合わせたせいか反発もなさそうだね」
神様との交信がなくなった、というルールの喪失を穴埋めするかのごとく。

同時に魔法は使えない、と言うルールも喪失している、と見るべきか。

「ルールの不在、とするなら。魔法だけじゃないのかも、ね」
言うなり抜刀し、エイジが中空を斬りつけた・・・気がした。
しかも、複数回。
鏢鳴りの音だけが小さくチン、と、微かな残響を残す。

「エイジ、今のは？」
ジオが眉根を潜めて尋ねる。
彼が何をしたか、知覚出来なかったのかもしれない。
かくいう自分も、なんとなく、でしか分からなかったので大きなこととも言えないが。
でも、恐らくは・・・

「うん、やっぱり、使えた。連撃と、先の先の同時使用」
ゲームでは併用不可能だった技の合成が、あっさりと実現。
エイジが満足気に頷いている。

「流派技能もそう、か。となると、後は生産とかその他技能なん

かか・・・」

何か混ざりそうなものあるかなあ、と考えるが、別にマラソンしながら薬作ったりするとかに優位性は見当たらないしなあ・・・。

あーでもない、こーでもない。
野郎三人なのに姦しく実験を行う傍らで。

「・・・私をノケモノにして酒飲んで盛り上がったる駄目大人たちがおるわ・・・」

体育座りの半眼状態でこちらを嫉む、エリスの姿があったりした。

「ゴメン。起こしちゃったか」

謝る自分に、エリスの半眼状態は動かず。

「まだ寝てていいよ？ 僕達が五月蠅いようなら黙るから・・・と言っより、もう休むから」

それでいいよね、と、自分とジオに目配せするエイジ。

自分とジオは黙って首肯。

実験はまた後日でいいしね。

「あ、結界は張ってあるけど一応自分が夜番に立つよ」

そう言い残しテント外に出る自分。

外の人の高性能さで三徹夜位なら我慢できることはすでに実験済みよっ・・・。

「あ、ちょ・・・言い出したら聞きそうにありませんな。では、お言葉に甘えます」

聞き分けよくジオがそう言ってくれる。

変に粘られても双方面倒なだけなので正直助かる。

「辛かったらいつでも交代するから声かけるんだよ」
エイジも自分のワガママを優先させてくれたようで。
ありがとう同士。

「うー、地味に目が冴えて寝付けないのですが」
なのでお酒プリーズー、と、まダオ（まるでダメなオンナ）化した
エリスの声に「エリス今何歳だい？」「15さいー」「うん、正座」
という一連のお約束が展開され。

三人の寝息が聞こえてくるまで、そう長くはかからなかった。

さて、余程のことがなければ張った結界でどうにでもなるはずなので。

自分は一人、外で一人酒をチビリとやりつつ。
現状について、考えを巡らせる。

体は昔のゲームで操っていたキャラクター。

心はそこら辺のオッサンな自分、ただし外の人補正があり精神的に
タフ。

・・・と言うより、現在の状態を言い表すならば。

「外の人の性格に、引つ張られているって感じ、なのかも」

今間借りしているこの体に、自分以外の明確な意志が宿っているの
ではなからうか、と思うことがいくども、あった。

声が聞こえてくるわけでもないが、体がそう言っている、と感じる
ことが、ままあった。

もしかしたら。

どうにかして、外の人の心と意思疎通できるのではなからうか？

「メリウさーん、起きていたらお返事ください」

外の人に向かって中の人が声をかけてみる。

・・・返答は、ない。

そんなものか、と、サクッと諦める。

では、次。

外の人を纏って放り出されたこの世界、地理や歴史、人や言葉などにより、ゲーム世界に酷似した1000年後の世界、という事らしい。

石造りのアジトは崩壊し、基礎だけを残した感だったのに対し、地下部分の掘りぬき空洞は年月の経過を余り感じぬ風情であった。

また、<塔>・・・今の<世界樹>付近の鉱脈が、ほぼ手付かずで残っていた辺りも見逃せない。

地上の建物と、地下の状態がチグハグな印象がある。

ココらへんは情報が少なくてなんとも言えないところである。

悩んでも答えが出なさそうなので、更に次。

国の単位が矮小化している件。

単純に人口が激減している、と見るべきか。

まだ世界を見て回ったわけではないので結論は出ない事柄であるが。

そして、重要な事柄が、一つ。

今まで出会った人々に、魔力をまるで感じない、という点。

ゲーム世界であったなら、潜在的な魔力持ちNPCなんていうのもたくさん居た。

少なくとも自分達の魔力視界で見抜けぬ魔力隠形の使い手が居るとは考えにくい。

そんな使い手が居るなら、小鬼さんやらに苦戦するいわれはないだろうしワンダリングモンスターのベヒモスにも対抗手段くらいは持っているそうである。

しかし小鬼相手に死人が出かけ、ベヒモスに対しては逃げ回る術しか持たなかった現状を鑑みるに。

人類は衰退している。

「今更なんだけど、自分達ってかなりの劇薬だなあ」

正直、世界に巣食う魔王のうち何体かは、自分達が駆逐できてしま
う。

魔王<病魔><飢餓><死>。

ココらへんは、正直なんともなってしまう。

試してはいないが、人の墓を暴いて骨でも持ってきて復元してから
<蘇生>は可能であろう。

<浄化>にて病魔は失せ、外の人の技術と知識により飢餓もなんと
かなる・・・と思われる。

「どこまで好き勝手していいのやら、ね。現状でも結構酷いもん
だけど」

きゅーっと、喉に酒を流しこんで。

自分はホウっと息をついた。

まだ朝は遠そうだ。

帰路徒歩それは御褒美で

現状がどうであろうが。

自分がどう思おうが。

誰がどう過ごそうが。

それでも世界は回ってる。

「とか何とか言いながら、あーさー」

長い長い夜の番。

途中から警戒するのも億劫になって、無限水筒の水で延々と酒を量産していた自分がいる。

なんか変な感じで脳内スイッチが入ったのか、もしくはお月さんがキレイだったからか。

<神話級>が六本も出来ちゃった。

うち五本はもうないのだが。

「なん・・・だと・・・」

モソモソ起きてきてラジオ体操始めたエリスに朝の挨拶がてらにそのことを伝えたら、即時orz姿勢されたよ！ 不思議！

「いや、飲み過ぎだろう常識的に考えて」

あとおはよう、と、エイジも起床のご様子。

おはようエイジ。

あれ、ジオはまだかい？

「あー、まだ寝ていた・・・と思う」

自分の問いかけに言葉を濁すエイジ。

んん？ またあの坊さん愉快的な寝相でもしてるのかいな・・・。

ペラリとテントの入り口を、めくって中を覗いてみたならば、
生きてるのか死んでるのか、パツと見分からぬ呼吸の浅さ。
即身仏かコレ、という佇まいの。

「なんで結跏趺坐よ・・・？」

姿勢よくアツパー座禅組んでるジオの姿。

寝るついでで悟りでも開くのか、ジオさんや？

だが、もう皆起きたんだし、貴様も起きねばね？

自分は<悪魔 >に変身するとジオの背後に回る。

そして体を捻ると、一気にそれを開放、巨大な質量をジオの側頭部に打ち付ける。

「おっはにゅー！ チネエクソ坊主！」

ブルルン、と唸りを上げる大きなおムネ。

しっかり足腰踏ん張らねばよろめいてしまいそうな勢いを乗せ、乳
ビンタが炸裂だ。

脂肪分の柔らかさで外傷を負わせず、頭蓋の中身に重さを徹すガチ
技なのは秘密だ。

着弾、いい手応え・・・いや、胸応え？

意味なく叫んでみるか、おっぱ応え。

「だがウチには無意味。 カウンターの応用で重さを貴様に返すぜ

！」

なん・・・だと・・・。

つてか、ジオ、いつの間に目覚めてやがった・・・！？

打撃をそのまま打ち返されて立板のように潰れていくオツパオの痛
みを驚愕で塗りつぶし、自分は即時変身を解いた。

巨大突起物が消え、打ち込んだ衝撃が胸の前を行き過ぎる。

ブワツと衝撃波がテントを内側から打撃し、全体を派手に揺らした。
なんて、威力だ・・・。

「殺す気か！」

「お前が言うな！」
「ですよー」。

「と、ここまでテンプレ」

早朝漫才をしてしまった。

外の二人の、うわぁ、という顔が、しばらく忘れられそうにない。

簡単な朝食をでっ上げ（干しトマト使ってミネストローネ作ったら不評だった。美味しいらしいけど、その、見た目が、ね？ 思出しちゃうらしくて、ね？ 正直スマンかった）、残させるのもモッタイナイので、なんとか強引に胃の腑に収めさせる。ご馳走様でした。

「ごちそうさま・・・コポオ」

なにかこみ上げてきている三名を、ひとまずは安静に放置。テントなどを片付つつ、赤いスープ系は・・・しばし自重しようと思っただ。

そんなこんなで出発。

三人ともすでに通常状態に復帰。
流石である。

「なんだかんだで昼過ぎくらいには首都というか町に戻れそうかな」
来たときは飛んできたし、結構距離感が曖昧である。
程々早いペースで踏破していると思っただが。

「ぶーぶー、飛べばいいじゃんー。 いいじゃんー。 そしてのせてけー」

アヒル口になって抗議してくる痴口リン。

あつね、昨日、色々ガンバロウとか言っただけ？

「うつつ、聞こえてましたか・・・あの、ナシ、というわけには？」
「気まずそうに聞いてくるエリスに、自分は満面の笑顔で答える。

「口だけの奴に飲ますコレは無いなあ」

言いつつ袋から、今朝方出来たトツテオキの<神話級>を取り出す自分。

キラリとエリスの目が光ったのが、見えた気もしたが無視した。

「・・・頑張ったら、飲めたりしますか？」

目だけ爛々と輝かせて聞いてくるエリスに、

「無論。 自分はく頑張った奴は報われるべきだ派>だ」

酒瓶をしまい、嫌な笑顔で応じる自分。

どう見ても詐欺師の顔に見えた、とはエイジとジオの談。

いや、騙さないよ？ 頑張って歩いたらあげるよ？ むしろ先渡しでもいいのよ？

「いい。 町まで歩く。 そしてメリッさんに風呂作らせて汗流して。

そののち美味しく頂くことを宣言するっ」

鼻息荒く早足になるエリス。

先頭にたつと自分達を置いていく勢いで競歩競歩。

あと、知らない間に条件追加されてるけど風呂はドラム缶風呂でもいいのかね？

「ダメ極まりない教育のモデルケースを見た気がする」

アメが甘すぎる、と、エイジがボソツと呟き。

「未成年を釣るのに酒出すメリウへの説教は・・・町に行つてからですかねえ？」

ねえ？ と、エイジとうなづき合うジオ。

「・・・伝説級>三本くらいで手を打たない？」

自分はダメ元で買収を試みた。

「「NO」」

声を揃えて、拒否された。

拳句、即買収とか保護者の立場としてどうよ、とか。

延々と説教喰らうハメになったのは・・・蛇足。

いきなりトツプスピードで早足したエリスがへバツて、後続の二位集団に飲み込まれるのは20分後であった、というのも蛇足。

ベヒモスに踏み荒らされた町の復旧工事真っ最中に、自分達は戻ってきた。

瓦礫を担いで集積場所に積み上げていたモノさんに即時見つかり、自分達四人はノナさんの元へと連行される運びとなった。

で、色々話してエイジも紹介。

彼への感謝と共に、守っていた村への兵員即時派遣を行うモノさん。また、一応魔物の集団を掃討してきた事も伝え、今後の警戒の糧にでもしてもらおうこととした。

たまたまノナさんへ報告しに来てた見知らぬ騎士が「そんな大群居るわけない嘘つくな」とか言い出すので、耳引っ張つて外に釣れだした拳句に「禁じ手」で喰らった魔物集団の装備の山を袋から排出しきつてその騎士を埋めたりもした。

重量で死なないように空間残す感じでパズル的に組み上げたので、頑張れば今日中に脱出できると思う。頑張らないと死んでも出れんが。

「ただいまー、何あの小僧？」
ストリートにモノさんに尋ねてみた。

「申し訳ありません。先週入団したばかりの見習いでして」
剣の腕がそれなりなので、それを鼻にかけていまして・・・など、実にわかりやすい説明を頂いた。

「チャンバラしたくて入団したら避難誘導だの報告の使い走りです
「たれた、と」
なんてよくいるキャラクター・・・っ。
自分がちよつと感動しているその横で。

「でも、いきなり魔物の装備で出来たパズル迷宮に閉じ込められる
というよく居ないキャラになったようだけど・・・」

「相変わらず気に入らない相手への沸点が低いですなあメリウは・・・」
「分かります分かります、ボクも最初いけ好かない爺とか呼ばれ
ました」

「敵意とかを直接反射してしまう感じですかね」
「私気づいた。ノナさんとサブリーダーの一人称が被ってる件に
ついて」

自分の性格診断会議及び、我が道を往くエリスさん素敵！ な空間
が発生していた。

「・・・」
自分は、ちよつと無表情に、そちらをじーっと見つめてみた。

じーっと。
じー。

視線の先、性格診断してた皆が、何故か我先にと、逃げ出した。

「え、あれ？ みんなどうしたんだろ？」
きよとん、とその場に残るエリスの頭を無表情に撫で付けて。

「一段落ついたっばいからエリスへのご褒美タイムと行こうか」
ほいよ、と、酒瓶一本手渡して。

自分はひとまず、風呂でも作るうと思つ。

採掘それは暴走で

首都から少し離れた場所に、採掘場を作りました。

自分一人じゃないのが今回の強みよ、とばかりに同士エイジと共に地下迷宮作成に余念がない今日この頃。

あまり掘りすぎると地獄につながっちゃうかなあ、などと出来もしない妄想をしつつ。

今日も今日とて、掘れ、ほれ、ホレイ。

「久々にマインクラフトやってる気分だなあ」

この世界でもブロック単位で掘れたらいいのになあ、と現実逃避しつつ。

ガッツンガッツンガッツンでガッツン。

おおっとミスリル発見・・・こっちはなんと・・・ボーキサイト・・・？

灰剣士辺りが居たら夢のアルミニウムが我が手に？

超ジュラルミンとか超々ジュラルミンとかが、我が手に？

ふおおー、漲ってきたアー！

「狭いので騒がないで下さい」

何故か敬語のエイジがとて怖かったので即時黙りました。

でもなあ、同士ならわかってくれると思うけど・・・

「ん？ 節操無い地層だね？」

キョトンとした顔で無限袋に文字通りの玉石混交放りこみつつ首をかしげたエイジ。

そうじゃねえよ！

そうじゃないんだよエイジさんってば。

ファンタジーな住人にジュラルミンの盾渡して驚かれたりとかした

くないもんかね!?

「いや、全然」

どうでもいいが手は動かしてくれ、とばかりに作業に没頭するエイジ。

ああ、そういう奴でした・・・。

クールに仕事するジェントルメン、それがエイジという男でした。仕方なし、自分も真面目に無口に働きますか変身<人間 >スタイルッシュ脱衣おっぱいぶるんぶるん。

さあてツルハシツルハシつと。

カッソーンカッソーンおおつとアダマタイト。

掘削孔の中は蒸し暑くてイカンねエ。

「・・・目のやり場に困るんだが?」

とか言いつつ超ガン見してくるエイジさん。

ああ、そういう奴でした・・・

見たいものは見たい、下らぬ誤魔化しなどはせぬのだ! と言う紳士が、エイジという漢であったわ。

奥さんに殺されればいいと思うがいかがか?

あと無事に帰れたら娘さんにチク「ヤメテ!」あいよ了解、今回は見逃してやろう。

「ハメられた・・・」

肩を落として作業に戻る漢。

ククク、どうよ、ちょっとは漲つたろう?

「中身が同士なのわかってても襲いかかりたくなくなりました、まるしやーないよねえ、ソコラはー」。

だってほら、おいちゃんらおじちゃんだし。

その、なんだ、ねえ?

「性欲を持って余す」
ですよねえー。」

自分はエリス拾っちゃったんで中々発散出来なかったんだけど、エイジの旦那はどうだったよ？ とか聞いてみた。

「あー、僕は案外暇あったから」
村守るのも不眠不休じゃなかったからねえ、と続けるエイジ。

「でも、見張り交代程度で実質単騎の村防衛だったんだろ？」
頑張ったなあ、正直村の超人って感じだし、若い娘さんとかが宿に押しかけてきやーエイジさん抱いてーとか無かったのかいホレホレ吐いちまえようー、とか馬鹿話が花咲く。

二人して、手は休めず。

カツンカツンと掘り続け。

ふと背後を見れば、出口から差す日の色はすでに燃えるようなオレンジで。

二人同時に突き刺すピッケル、ピタリと止まる動作もシンクロ。

「帰ろうか」

ハモっておつかれ手を叩き。

自分とエイジは、帰路についた。

・・・変身解くのと服着るの忘れてて、ちょっと町の青少年とかを前かがみにさせてしまったのは、蛇足。

敗因はエイジも感覚が麻痺していたこと・・・。
単純作業は心が死ぬね？

おつかれさまー、と出迎えてくれたエリスに二人して手を振り。自分達は食肉さんに踏み荒らされて適当に整地されてしまった旧貧民住宅街、現資材置き場にやってきた。

さあて今日一日の自分と同士の採掘力が白日・・・日が暮れてるから橙日とでも言うのかな・・・に晒される。

無限袋を逆さに、だばあ。

まずは石材・・・粘土・・・銅・・・鉄。

周囲にいた住人や騎士達がそれを見てギョツとしているのが分かるが、

「手品です」

と、白々しく言い放ってニコニコしてたらなんか拍手された。

エイジの、なにか諦めたような半笑いがちよいと気になったが貴様も道連れだからね、この見世物状態。

よし、皆の視線を集めたし、ココで変身してドッカンドッカんとウケを・・・。

「猥褻物陳列すんなよ？」

ガツと後頭部掴まれて注意を受けた、チツ。

「ノリだけで色々すんな、な？　つと、僕達頑張りすぎたんじゃないかね、これ」

説教しつつ前に視線を戻して軽く引いた声を出すエイジに、

「ん、なにがうおわあ!？」

自分も袋の吐瀉物を確認し、驚愕する。

なんというか、食肉さんくらい、有りそうなんですけど。

そして、まだ、袋の中身、あります・・・。

自分は静かに、袋の口を、閉めた。

広い湯船で手足を伸ばし、ゆっくりと息を吐き出して。
あああああ、生き返るわあー！。

「今日はお疲れ様でした、見てきましたよ何ですかあの石山？」
半身浴中のジオが呆れ半分で聞いてくる。
いや、ちよつと暴走しちゃってねー、エイジが。

「メリツさんもかなり狂った量掘ったじゃないか」
僕だけのせいじゃないからねアレ、と、頭を石鹼で泡立てていたエイジが反論してくる。

共同浴場。

ひとまずエリスへの御褒美（という名の強制労働）で作った風呂を
改装、増築してごらんの有様だよ！

大人10人程が一気に浸かれる浴槽と同数が使用できる洗い場を完
備。

燃料は薪。（廃材が溢れているため）

一時期<爆炎壁>を永久化して熱源にしようとも思ったが、インフ
ラ整備にいちいち永久化魔法なんて使ったら自分が死ぬ。

そんなこんなで、普通の薪風呂が出来たわけだ・・・レシピのお陰
で、2つ。

熱源の有効利用のため隣り合った施設になるけど、そこら辺は今後
運用考えて下さい。

・・・と、モノさんあたりに案件は投げてある。

水源は現状上水道の水をそのまま引いてきている。

案外水量豊富なのが助かる。

クーデター起きなかつたらこの風呂に使った水代で百人単位の食費が賄えたというから・・・風呂の文化は育たないわなあ、そりゃ。ノナさんとエリスの姦しおにゃのこトークで「お風呂？ 水浴びのことですか？」「oh」というやり取りがなされた、というのはさつき聞いた。

無言でノナさんの襟首掴んで風呂直行したというエリスの満足気な顔といったら。

「さて、材料はアレで足りると思うし。明日からはいよいよシムシテイだね」

ザブつと湯船に肩まで浸かったエイジが、深くため息をつきつつ言った。

「そだね、どんなのにしようか。水道用ポンプ設置とか面倒だし、平屋かね？」

石造りだと漆喰で固めるんだっけ？ とか家談義になったり。焼けると脆くなるんだっけ・・・んじゃレンガ焼いて・・・いつそ木造というのも・・・云々カンヌン。

「お二人とも、ノボせませすぞー」

早くも上がり支度のジオの声に、自分とエイジの目が醒める。ああ、サンクス坊さん。

「僕らも上がるうか」

「そだね」

んじゃ、キュツと一杯やりながら。

明日の建築計画でも練りますかあ。

建築そこは食肉さんが踏んでも大丈夫(前書き)

俺、三部作書き終わったら魔王ローキックと勇者ヘッドロックの話
書くんた・・・ゴフッ

建築そこは食肉さんが踏んでも大丈夫

暴君による圧政を神の御加護（祈りの言葉は「イキロ！」）の後押しで跳ね除け、自由への第一歩を踏み出したこの町。

喜びに沸く住人達に浴びせられる現実という名の冷や水。

天災の如き巨大な魔物の挟撃に遭ってしまいました。

もうここまでか、と皆に諦めが漂ったその時。

カカカツと現れた謎の救い主達が、訳も分からず逃げ回る住人達をあっさりと助けてくれたのでした。

しかし、残されたのは無残に踏み荒らされた町。

せつかくの明るい未来を夢見た高揚はどこへやら。

一転、町は、住む場所を失った人で溢れかえってしまうことに。

そんな状況を見るに見かね、二人の匠が立ち上がりました。

目を覆いたくなるこの焼野原じみたこの光景が、いったいどんな復活を遂げるのでしょうか…。

「で、どうする？ 塔作って油圧エレベーターとかつけちゃおうか？」

「バイオスフィアを地下に造って有事に備えるとかどうだろう？ 現実では失敗したらしいねあれ」

自分とエイジの明るい都市計画は、酒も入って愉快的感じに纏まりを見出せないでいたが酔っ払いだから気づかない。

「あああ、ダメな大人がまた飲んでる私も混ぜてー」

風呂上がりのエリスがすさまじい勢いの摺足で滑るように酒瓶をかっさらっていく。

だが惜しいな、それはもうカラだ。

「エリス、お酒は大人になってからだぞ」

僕は大人だから誰憚ることなく飲むけどねグビグビー、と、大人げないエイジ。

おいしい教育者。

初講義が「大人って汚い」かよ、流石だなそこにシビれる憧れる。

「のああ、エイジさんのキャラがわからないっ」

悔しげに酒瓶を床に叩き付けようとしたのを自分に睨まれて中断。スゴスゴとそれを渡してくるエリスさん超可愛い。

ちなみに勢いで割っていたら超怒った。

「エイジ 二八 ナイショダヨ」

部屋の隅にエリスを手招きして、麻薬密売人じみた行動に出る自分でも最近飲みすぎな印象もあるので、ジュースにしておきなさい。そう、このサイダーにな……。

「わーい、ありがとう酒屋さんー。 うまー、シードル……げぶん、このサイダーちょーうまー」

リンゴの発泡酒シードル、英名サイダー。

うん、その、なんだ、こんなジュースですよね？（この表記は個人的価値観ですので、飲んで捕まっても責任は取りませぬ）

「おい、同士。 エリス酒漬けにしてどうする気だ」

自分とエリスの頭を両手でそれぞれ鷲掴みにして仁王立ちなエイジさん。

「え、そりや当然、あんなことやこんなことを？」

主に酒の味、二日酔いの辛さ、その先に節度ある飲みかた、とかを学んでくれたらいいかなあ、くらいかね？

ほら、量飲んで痛い目見て、その先に学べるものってあるじゃない？後、個人的には苦味を楽しめるようになってきたら一人前って感じはする。

「おおー、メリッさんが珍しく大人に見えるげふー」

炭酸ゲップを豪快に吐き出すエリスさん・・・もうちょっと、その、上品にですね？

もう痴口リンが子供だからか女捨ててるのかわからなくなってきている。

そしてさらに言うなら、自分は常にジエントリーな大人じゃないかなに言ってる？

「ふつうの紳士的な大人はストリーキングなどしない」

半裸の女連れで戻ってきた男、という称号を得た被害者エイジの言葉が重かった。

正直すまんかった。

でも、肩からタオル下げてたから先端突起隠れてたしセーフだよなセーフ。

あと関係ないけどストリーキングって何の王様なんだろうと思ってた時期があった。

さらに言うなら女の人をやったらストリークインじゃね、とか明後日方向なこと考えてた。

「で、そろそろ真面目にやらないと酒盛りで夜が終わるけど」

ふう、と、ため息をつきヤレヤレだぜって顔のエイジだが、貴様が一番飲んでるからね今日。

余りに酷いようならく浄化くでアルコール抜くぞ同士。

「せっかくのほろ酔いが素に戻るのも勿体ないなあ。　じゃ、そろそろ図面引こうか」

ペチペチと頬を叩いてエイジが気分転換。

んでは、これからは真面目に・・・物作る話しましょうか。

「あ、エリスは部屋帰って寝な」。　んじゃね」

物作りにさほど興味のない彼女にはこれからの時間退屈だろうしね、と追い払い。

ぶーぶー文句言ってきたので、しかたないなあエリ太君はあ、とサイダーを二升瓶で握らせて「ノナさん辺りと飲んでおいで」と袖の下攻撃。

こうかは　ばつぐんだ。

エリスは　いずこかへと　たちさった。

メリウは　エリスころがし　を　おぼえた。

そんなこんなで、野郎二人のむさ苦しい空間に立ち戻った一室にて。

「」では、始めようか。　クラフターのクラフターによるクラフター

のためのクラフター会議」

・・・それは、夜が白む頃まで続いた。

そして現れる、それ。

なんと言う事でしょう。

あの荒れ果てた旧貧民町が、見る影もないほどに整地されたシンブルな街並みへと生まれ変わったではありませんか。

以前は、あばら家の群れといった感の、まさに貧民窟、汚家空間だった場所が。

質実剛健。

どうやって持ってきたのコレ、という一個数トンクラスの角石の群れを地面に埋め込んで作られた石畳続く道をメインストリートとする理路整然とした計画都市の姿へと大幅なクラスチェンジを果たしたではありませんか。

メインストリートの両脇に新たに建築された長屋状の住居にも、キラリと光る匠の心配りが。

基本石造りで仕立てられた外側からは想像できない内装が、まさかの木製。

さらに外壁と内壁の間に断熱材代わりに綿花を充填する徹底ぶり。

防音機能すら計算に入れた、まさにシンプリズベストな機能美。

その他にも、上、下水道を新たに整備、長屋単位での共有スペースにすることで設置数を少なめに抑えコスト削減にも余念がありません。

更に言うなら、同じ長屋に住むご近所さん方に井戸端会議の場所を提供する形にもなる、そのなさ。

また、浄水場を町はずれに整備し町の汚れを外に漏らさぬ配慮まで成されています。

そして、いつ襲い来るか分からぬ先日のような災害時に活躍を期待される……。

「非常用地下道を作って各家屋へ入口を設置しました。出口は町の外の某所になります。場所は町の代表者のみへの告知になって

います悪しからず。外部からの侵入を防ぐため一方通行になっていますので、賊の侵入は不可能レベルに設定しています」
具体的には、重量ある下降式入口床と、地下道への滑り台を摩擦係数極小に仕上げてあります。
エイジと二人胸を張って、焼け出された人々やノナさんモノさん達を前に解説を繰り返す自分。
背後に立てたボードに、エイジが見取り図や全体地図を随時張り替えてプレゼンテーションが進み。

「と、言うわけですが・・・なにかご質問などありましたらどうぞ隠しギミックとかはあまり仕込んでいない分、強度的にはベヒモスが踏んでも数分は耐えられる設計にしております。
主にエイジが目を血走らせて強度計算した挙句に、自分が変身して実際に踏んでみて確かめたのでもう完璧。
うむ、実に良い仕事が出来た、と、昨日の夜はエイジと二人でく神話級>備蓄全部開けちゃったぜ。

「何か、反応薄いね同士メリウ」
エイジがボードを片付けつつ苦笑いする。
あー、地味過ぎたかねー。
しまったなー。

自分とエイジがそんなやり取りをしている先。
住人たちとの間にエリスがちよこんと踊りでて。
まるで指揮者でも気取るように、両手を振るって、さん、はい。
合図。

「「「「「やりすぎ!」「」「」」」」」

・・・皆様に大好評いただけたようで、安心です。

後は実際住んでみてどうか、だけどねえ。

あとは勝手に改造して下さい。

「焼け野原が数日で復興どころか・・・もはや新しい町が出来たと
言うべきですね」

エリスと連れ立ってノナさんが新造居住区を探検に行ってしまった
ので暇になったのか、モノさんが満面の笑みでやってきた。

お、建物系とか実は好きだったのかな？

「コンセプトは最小剛健、必要最低限をクリアしつつ防御力は折り
紙つき、を目指したよ」

モノさんに会釈しながら語るエイジ。

クラフター会議での丁々発止は、無駄ではなかったのだ・・・っ。

「とまあ、あとは町をぐるっと壁で囲おうかなあ、と思うけど良い
かなー？」

なんか魔物多そうな印象だしね、と自分。

あと二日もあれば、5mクラスの壁は立つかなー。

偉大なりレシピと簡易生産。

連射連射でバカスカ建つぜ！

材料さえあればな！

「あ、は、はい。大丈夫です、と言うか、誰も反対しないと思わ
れます」

反対する理由がありませんしね、と上機嫌なモノさんに、ひとまず
自分は言うべきを言うことに。

「で、それ終わったら。自分らは<世界樹>に戻りますんで」
見つかってない連中が待つててくれると嬉しいけどなあ、と、思いつつ。

サクッと別れを告げてみる。

モノさんの表情が少し陰り。

小さく息をひとつ吐く。

そして彼は懐から一枚羊皮紙を取り出すと、こちらへ手渡してきた。

<世界樹>所有権利書。

所有者名は・・・いつもの面子。

「いつぞや呑んだ時に皆さんの集団名はお聞きしましたからね」

メリウさん個人に、とするよりそちらのほうが宜しいかと思いつて・・・問題はありませぬよね、と。

モノさんは淋しげに笑った。

「ノナ様とも話し合っただのですが、正直なところ皆さんにこの国をお任せしてはどうか、と言う案もあつたんですよ」

もう受けた恩に報いるのに国自体くらいしか差上げられる物が無いんですよ、と続けるモノさん。

「ですので、メリウさんの<世界樹>所有の申し出も含めて国丸ごとどうだろう、と話もまとまりかけたのですが」

なんというか、エリスさんとジオさんがその場にやって来ましてね、と。

聞けばその話し合いは、クラフター会議をやった同じ時間らしく。

「エリスさんは酒瓶抱えてノナ様を誘いに。ジオさんはたまたま

通りがかつたらしく流れでいらっしやつて・・・二人して開口一番

「<世界樹>だけ下さい」「です」

その時のことを思い出したのかなんとも面白い顔をするモノさん。

「落とし所はソレで結構ですよ？ と、ジオさんが悪い笑顔で言ってきたので思わず吹いちゃいましたよ」

ああ、ジオの顔芸は至高だからねえ。

あんなん笑う以外の選択しないよ。

「で、エリスさんはエリスさんで「メリツさん、ダメで元々言うだけ言おう、程度で聞いてみたって言ってたし。 ならそれが貰えたらそれで十分以上なんだと思うな」とか格好いいこと言ったかと思ったらノナ様拉致して自室に籠られましたからね・・・そこでもう話し合いも何もなくありませんして」

翌日、二日酔いのノナさんの世話で一日潰れましてね、と、ちよいと恨み言も吐かれつつ。

挨拶と共に一礼し、モノさんは何処かへと去った。

そして数日後、町を囲む壁も出来上がり。

自分達は一路<世界樹>へ。

「じゃ、レースしようか。 よーい<飛行>」

「うわ、同土きたなつ<飛行>っ」

「流石の卑怯っぷりですな合体魔法<瞬移全究>連射」

「・・・いいもん、歩いて行くもん」

忘れられて置き去り喰らったエリスが一番早く<世界樹>に到着して男どもを m9 (^ ^) プギャー するのは、まあ、蛇足。

空とぶつさきは脳足らず、というオチでしたとさ・・・なんで空戦とかするかな貴様等。

急行そこは秋の空（前書き）

焼き芋なんて何年食べてないだろうー。
いも天はよく食べるのがな。

急行そこは秋の空

<世界樹前>村から、幾筋もの煙が上がっていた。

空を行く三人・・・自分、エイジ、ジオ・・・に緊張が走る。

ついノリで空中戦に興じてしまい、長時間エリスを愉快放置してしまった。

我に返って一緒に遊んでいた二人とともに首都付近に戻ってみもしたが、どうやら彼女は「地道に歩く」事を選択したらしく、姿が見えなかった。

てつきりヤサグれて道端の葉っぱ吸ってラリッてるかと思いきや。うん、感心感心。

・・・と、エリスの成長ぶりを喜ぶのも程ほどに、<世界樹>へ向け飛ぶ三人組。

空行く彼らが、ようやく見えてきた村の姿に捉えた異変。それが、村のそこから空へと昇る、煙の群れだった。多い。

片手では数え足りない本数である。(二進法で数える、とか言われたら数え切れるのだが)

「ここも襲撃受けてるのか!？」

エイジの緊迫した声の端が、遠ざかっていく。

即座に<飛行>をかけ直し(永久化する時の消耗を抑えるため、普段使いの魔法は威力抑えめが基本)、幾分速度を上げたのだろう。自分もそれに倣い、速度を二回り上げる。

<瞬間移動>しても良かったが、村人と合体した愉快キメラ誕生などもありうるので自重。

なあと、ものの数秒差さ。

「・・・黒・・・さそうですけどね・・・」
何かを呟いたジオの声が聞こえた気もしたが。
自分たち二人は、我先にと<世界樹前>へ急ぐ。
どうか人死に出てませんように！

焼かれていた。

村人たちや、<世界樹>にいるはずの<魔族>さんたち。
彼らが肩を並べて見守る、目の前で。

焚き火が、ぱちぱちと、燃えていた。

その周囲、村人たちの手には、小金色に輝く断面から湯気たなびかせる・・・サツマイモ。

大人も子供も和気藹々と芋を頬張るその光景が、やけにスローモーションに流れて行き。

自分は目前に迫った地面へまっしぐら。

着地体制を取るのも放棄して叫んでいた。

「焼き芋かあああああああ・・・」

ぷによん、ごろごろごろごろずしゃああざりざりざりざりー、とツッコミ姿勢で地面を転がる自分がある。

こ、今度は<黒粘体>使ってるから死にはしないんだぜ・・・自分に削られて地面が酷い有様に耕されたけれど。

周囲から、なんだ！？ 何か落ちた！ と、騒ぎが聞こえてくる。
自分は、何事もなかったように立ち上がると埃を叩く仕草で。

「んん、何かあったのかね諸君？」
空っとぼけてみる事にする。

ジェントリーは慌てない。
超目立ってるけど。

「いや・・・お前さんが落っこちたから・・・」
冷静に突っ込んでくるのは、こちらに視線が集まったのを利用して
皆の死角に着地して歩いてきたエイジだった。

畜生、空から登場のインパクトで目立つの怖がってヒヨリやがった
な。

若干顔色が白い気もするけど・・・あ、ゴメン、もう血の池にはな
らない予定なので許して下さい。

「ナニナニ、隕石？ って、なあんだ。 みんな遅かったね。 徒
歩の私に負けてやんの」 mg（^^）プギャー」

謎の落下物騒ぎで集まってきた村人たちを掻い潜ってやってきたの
は、棒に刺した焼き芋を左右の手に持って悪魔神官ごっこしている
様子のエリスであった。

おお、痴口リンこそ早かったね、頑張ったえらいぞーう。
ってか、自分らどんだけ長いこと空で遊んでたんだよって話でもあ
るが。

自分はイイ笑顔で、ワシワシとエリスの頭を撫で付ける。

「ちょ、両手がふさがっているときに頭をなでに来るとかなんとい
う卑怯者っ」

たまに素直に照れるエリスちゃん、超かわいい。（挨拶）
末っ子だったから妹とか弟に憧れたんだよなあ、自分。

「あんまりエリスで遊んでやるな・・・でも、よく頑張ったね」
偉いぞーと、自分に続きエイジにも頭を撫でに来られて、エリス狼
狽。

「ぬ、ぬう、解せぬ。あと一人いたらジェットストリーム撫で撫でされてしまうではないか何だこの素敵空間は・・・はっ！何者かのスタンド攻撃の可能性がある!？」

一息に混乱を口から出すエリス。

不憫な・・・褒められ慣れてないのが特に。
エイジと二人、流れてもいない涙をぬぐう。

「今日くらいは優しく接してあげよう」
保護者コンビ、生暖かい視線でエリスを見るの図。

「いつも優しくすれー！それでも品行方正可憐なレディなんですからねっ」

「嘘言うな」

「ごめんなさい」

エリスさんはいつも正座。

村の中で<魔族>なテトラさん発見。

おひさしゆう。

つて、あれれ、無表情？

顔忘れられちゃったかな・・・ごふう、いきなりハグられるとはっ！？

<しばらくお待ち下さい>

ようやくテトラさんのベアハッグから解放され一息つく自分。

エイジと、いつのまにやらやってきて「黒煙でないし平気では、と言ったでしょうに」なんて呆れ顔のジオを並べて紹介。

おお、お仲間が見つかったようで・・・おめでとっございます、と

我が事のように喜んでくれるテトラさんに癒されたりもする。

「だがそのスケブ描き込んでる肅女？ 貴様は正座」

「ふひっ!？」

もはや条件反射的に正座するエリス。

そしてその体勢になってもまだ絵を描いている根性は評価しよう・

・どうやらテトラさんにベアハッグされた自分が受けらしいハハハッ、死ねばいいのに。

「まあまあ、そこらへんでいつものじゃれ合いは片つけるとして。

さっさと宿でもとつてのんびりしませんか？」

ここのところ働きっぱなしでしたし、いい加減骨休みましょう、と。

首都の工事期間中、一手に怪我人病人御老人の相手をしていたジオの言葉に異論もなく。

・・・何故か、村人及び<世界樹>在住の皆さんを（結果的に）巻き込んだの宴会が、始まってしまった。

おいしい、のんびりするとか言ってた当人が騒ぎ広げてんじゃねえよ・

・・・まあいいんだけどさ酒とかは飲みきれんほど作ってあるしね。

なんでも、最初は村側に秘密だった<世界樹>在住者の存在もあっさりとバレてしまったそうぞ。

<魔族>の子供が、道に迷った末に出会った村の子供と意気投合して遊び回るようになったのが交流の始まりらしく。

「ちよいと話してみれば、噂なんてアテにならんというのを実感したわな」という、鍛冶屋の親方の笑顔が好印象だった。

「子供が行方知れずってことで血相変えてテトラの旦那が村に乗り

込んできてなあ。あの時はそりゃあ大騒ぎだったんだが」当の子供は、新しく出来た友達の家で芋の皮むき手伝ってんの見つかって、血相変えてた大人どもがお互い顔見合わせて大笑いでな、と、きつちりオチもつけてくれた。

「伝聞による差別」があつさりと「実際」に敗北したのは、幸運にもこの村の住人たちが素朴で善良だったおかげであろうか。ありがたいことである。

とても、有り難い事、である。

結果オーライだけど。

ひとまずは、胸をなでおろす。

飲み、食い、騒ぎ疲れて床に向かう友人知人に手を振って、自分は一人、月見酒。

ほろ酔い気分も良いもので、量だけはある失敗作の安酒片手に鼻歌交じりの夜を嗜む。

「ああ、酒が美味いなあ」

悪意のない場所の暖かさを肴に。

自分は<神話級>にも劣らぬ安酒を、きゅっと飲み干した。

さあて。

しばらくのんびりしたら、ガッツリやるとしましょうか。

いろいろと、ね。

再来そこはジャングルで

今朝は深夜の深酒やった割に、爽快な目覚めで。

村からく世界樹く周りの散歩途中、思う所あつて木刀取り出し色々訓練をしていたところに、自分同様に木刀かついたエイジが申し合わせたように合流。

「やあ、おはよう」「おはにゅー」と、朝の挨拶だけ交わして、瞬間的に罅迫り合いに移行。

結構ガチで模擬戦をする格好になった。

・・・同時に一歩前へ出たあたり、目と目が合う瞬間、好き・・・じゃなくてお互いの興が乗ったのを感じたと言う事だろうか。

自分とエイジの剣術は同レベル。

身体能力（外の人的な、だが）も大差なく、模擬戦というより型でも演じているような感じになってしまった。

お互い本気で打ち込めば木刀程度は当たった部分はおろか握った部分からへし折れる。

更に言うなら、打ち込まれば、人一人くらいは、死ぬかもしれぬ。故に模擬戦の様相は、当てずを旨とする寸止め合戦。

ゲームと違い、システムの同じ攻撃モーションというわけで無し（やるうと思えばやれる辺りが恐ろしい・・・外の人、怖い子ツ）変幻自在な攻防が繰り広げられ。

続けること三十分程か。

止め、止められを繰り返し・・・互いが同時に動きも止めた。

「やりすぎた・・・」

両名汗だく、昨夜のアルコールも一気に体外に流れでたのでは、という有様で。

さわやかな疲れが体に残るが、流石に凄まじい汗とアルコール臭に

辟易し<洗濯>魔法を使わざるを得なかった。

その後は競うように村へと駆け戻ると、大人げなく魔法火力で湯を沸かし今ダイブーン「体洗ってからな?」「はいスイマセン」。

一風呂浴びて宿に戻れば、もう朝食時間。

たまには人の作った飯を食べるのもいいもので。

・・・エリスとジオは部屋に引きこもって出てこないところを見ると、酔いつぶれて未だ夢の中、か。

ひとまず村を離れていた間にここを訪れた<仲間>は居ないようで、少し残念。

「じゃ、今日から何しようか?」

堅焼きのパンをスープに浸して食べつつ聞いてきたエイジの言葉に、自分は<世界樹>・・・<塔>の探検を提案し。

エイジと二人、<世界樹>と呼ばれるような有様になった<塔>を見て回る事となった。

流石に訪問二度目な自分は「ああ戻ってきたな」位にしか感慨はなかったが、エイジはやはり、こみ上げるものもあるらしく。

「うわあ、こんなになっちゃったのか」

入り口近くは<魔族>さん達が整理したのか、ある程度の居住域確保がなされていたが、少し奥まったエリアは草やら木やらの生い茂るジャングルもじゃもじゃ状態である・・・何この緑の壁。

ヤケクソ気味に、ヤシの木一本玉二つ〇h、等と歌いながら歩いてたら無言でエイジに叩かれた。

最近皆のツッコミが(ゲームしてた時のように)暴行になってる気もするけど、スライムガード(瞬間的に突っ込まれる部位のみをス

ライム化。冗談で「部分的<変身>とか出来ないかなあ」とかやってたら・・・デキちゃった？」を会得した自分に隙はなかった。生身との境目部分とかスライム部分に溶かされるかとも思ったけどそんなこともなかったぜ！

なので上半身スライム化して「トゥットウル」、ゲルメリウ」とかやったら、エイジが「シユタゲのトラウマ抉るな」と泣いたのもいい思い出・・・トラウマ多すぎないか同士？

あとどうでもいいけどゲルメリウってゲルマニウムみたいな語感でカッコいい。

ゲルメリウラジオ、セクハラトーク垂れ流す素敵放送。

「結構衝撃映像でしょ？ 侍のギルド家屋なんてもう侘び寂びの世界だったよ」

建て直すこととか考えるなら、焼くのはNGだし面倒だなー。

<塔>って、実は空気の流れとか設計段階以前で考えられているので、延焼とか換気不足で起こる諸症状の心配は低い設計だそうだが・・・

設計者集団素敵っ、何がそこまで彼らを駆り立てた？

そんな思考がスキップしていた自分に、そうかー、とだけ答えて空・・・

・・・というか<塔>の天井を仰ぎ見るエイジ。

ああ、ちなみにエリスは空中庭園で拾ったんよー、と、行き倒れ状態の痴口リン拾った時の詳細を話しつつ。

自分とエイジは、<塔>全ての道を踏破すべく歩き回った。

道すから壁や床の強度を確認しつつ進む。

自分が建てた石の家は破壊されたように土台程度しか残っていないなかったのに比べ、こちらは流石<塔>である。

採光、空調窓周辺のヒビなどはいくらも見つかったものの、根幹構造に歪みなく。

「流石自由な石工同業者組合製・・・推定千年程度じゃなんとかな

いぜー！」

石と石の隙間に植物の根が侵入できないほど緻密に組上げられた床や壁、天井を讚えつつ。

コツコツ半日かけて歩いたく塔>内部探検、いよいよ空中庭園に到着。

「見る影もない……」

空中庭園造園の際、かなり力入れて随所を作っていたエイジが膝を ついて絶望した。

<世界樹>内部とはまた格の違う緑の壁、壁、壁。

だがエイジ、逆に考えるんだ。

また庭園作成作業できると考えるんだ……。

……まさか下に人住んでるのに、焼き払う訳にもいくまいて。

だがあえて言わせていただこうか。

傷は深いぞ、ガツカリしろ。

自分はorzとなっているエイジを引つ摺んで立たせ。

「じゃ、ちよつと大きいけれど。盆栽遊び、しようか」

拾ったはいいが結局使ったことのない刀身二メートルほどの斬馬刀を懐の袋からズルリズルリと引き出しつつ、エイジの尻を蹴っ飛ばした。

いつまでガツカリしてやがる、さあ喜べ！ 難易度の高い創作活動だぞう！ あとアヒンと泣け！

「あ、貧」

「エリスに謝れ！」

ツッコミつつ、胸に当たるときに「ペタン」。

「板っ」

「失礼しましたー」

・・・ここまで、テンプレ。

大雑把に庭園に張り巡らされた道を、木々や草藪から掘り出す作業に興じて、はや数時間。

自分左回り、エイジ右回りで外周から始めたこの作業も、ようやく中心点の元・大樹広場へと至ろうとしていた。

こっちに来てから、なんか真っ当に体使って働いてる気がするなあ。実に清々しい。

あと外の人最高。

これが鍛え上げた人間（というには、あまりにも・・・だが）の体かつ。

体を動かした疲労はあれど、さほど後引くものはなからう、という程度の疲れ方である。

逆説的に、これだけの作業しても筋肉痛一つおきないということ。

「外の人鍛えるのって、どうしたらいいんだろなあ」

そもそも、育つのか、これ？

朝の訓練では育った手応えはなかった。

まだ仮説を立てるのは早いかもしれないが、あえて口にする。

「成長、しないのかな」

だとしたら、ちょっと残念である。

まあ、元々成長しにくいゲームだったし結論じゃなからう、と樂觀し。

自分は道理める森を、バツサバツサと薙ぎ払うのを再開した。

元、広場中央。

育ちに育った中央樹の根が蛸足じみて暴れまわったかの様相を呈し、なんとというか、まあ酷い。

これ、どうにかなるんだろうか、と、早くも諦めたくなってきたりもするので、自分は大木に背を向け現実逃避の構え。

ひとまずお先に目的地到着の自分は、休憩準備を整えてみたり。気取ってイスとテーブル用意しようとも一瞬思ったけど、寝転がったりしたかったためゴザを地面に敷く。

靴を脱いで座り込むこの快感。

座禅マンここに誕生、その姿勢のままゴロゴロとゴザ範囲を転がりまわって快楽を堪能する。

ひとしきり転がって力尽きグッタリしたところで、エイジも緑の壁を切り開いてこちらに合流。

うつぶせに寝転んで微動だにしない自分をサックリ無視して靴を脱ぎ、適当な位置に陣取ったエイジが荷袋から水筒を取り出して一口含む。

「働いた後飲む水の味って、甘いよね」

もう一口、と、杯を進めるエイジ。

あー、そこらは同意ー。

「自分も飲むかねー・・・うまー」

仰向けに寝がえりをうち、取り出した一升瓶に口を付けて、こう、きゅーっと。

水うめえー！

水うめえー！

「同士、それは酒だ」

そうか、酒かこれ。

道理で変わった味がする水だと思った。

酒うめえー。

アルコール水うめえー。

はあはあはあ、も、もっと飲まねばっ。

依存性はないのよ！ 依存性はないのよ！

「メリウは依存してました・・・って、鳩ヨメとか懐かしいものを」

くびくびくびー。

くはあー、労働の後のアルコール含有水分うめえー。

ふへへへ、なんか色々とどうでも良くなってきたぞうー。

ちよ、ちよっと自分、全裸徘徊してくるであります！

うひょー、盛り上がって来たあー！

酒、勢い、愉快じゃのう、三カチンいただきましたのでー 解き、

放つ！ トキハナーツ（裏声）

「えい、当身」

おうふ。

首筋にエイジの愛刀<閻魔>の峰打ちによる衝撃を受け。

自分はゴトツと、意識を失った。

案外サクツと意識落ちるんだねえ、なんて暢気に思う暇すらありませんい・・・。

抜かれても抜かれても生えてくる舌。

閻魔様に「アナタって最低のクズだわっ」と罵られながら舌を抜かれ続ける。

しかしながら部位変身スライム舌を駆使した自分に隙はない。

抜かれた端からいじらしく逃げてきて合流してくるスライム舌さん、超可愛い。

「ふへへへ、食べちゃいたいくらいカワイイツ、この、見ため緑のナメクジさんめっ?」

そんなところで、夢から覚めた。

消える閻魔様、現れる空中庭園風景。

あれれ、どうした事だーとばかりに現状把握だ、輝け気配視覚。

・・・上半身起き上がらせた状態の自分と、その背中に膝当てつつ両手で肩を抑えているエイジの図、が、脳裏に描き出された。

どうやらエイジに膝活かけられて意識を戻したらしい・・・自分。

「おおよう、とーし」

ひとまず御挨拶。

おはよう同士、と言ったつもりが、あれれ不思議ね、口が回らず。

そして、何か鉄の味ゴクゴク、喉ごし最悪。

「おはよう、同士」

ナメクジ可愛いとか言って舌噛み千切りだしたんで慌てて意識蘇生させたんだが平気かい、と、手ぬぐい差し出してくる。

舌、噛み千切り?

おかしいなあ、それって閻魔様の仕業であって自分の所業じゃないはず・・・ゴホッ、いかん、血が気管につ。

メディック、メディック・・・あ、自分衛生兵でした<回復>・・・やべ、裏表逆にくつつけてしまったズバア! <白銀癒手>ムクムクムク・・・。

「なんで同士はハツチャケるとグロい光景を作るのかな? かな?」

寝ぼけて舌噛み千切った奴が目覚めた直後に転がってる舌拾った拳
句上下間違えてくつつけた後再び噛み千切って新しい舌を生やす、
という光景を見せられたエイジが死んだ目をして首をかしげていた。
うん、その、ごめん。

状況説明聞いたとしても「何言ってるんだお前？」としか思わないわ
その状況。

自分、即座に五体投地。

ごめんなさいー。

ごめんなさいー。

ごめんなさいー。

三度繰り返すと効果覲面。

「・・・まあ、良いけど。次にグロ光景やったら、エリス用の倍
は濃密な説教コースなので心せよ」

「え、死ねって、こと？」

「次やったら死ね」

「こやつめ、ハハハ」

「ハハハ。・・・嘘と思うな？」

「本当にスイマセンでした」

なんだかんだでエイジに謝り倒す羽目となり。

本日の空中庭園清掃はここまでとなった。

<世界樹>を出る間際、入り口近くの<魔族>さん達に口元の血痕
のせいですごい心配かけてしまったのが心苦しく。

どなたでも出来るお手軽マジック<洗濯>で、宴会芸でしたー、と
不謹慎に収めるのもアレなので素直にお心遣いいただくことに。

ありがとうえ、ありがとうえ。

・・・おのれ、閻魔大王う！

この恨み晴らさで置くべきか、と自分は奴に復讐を誓つ「夢に八つ当たりするな?」「ゴメンナサイ」。

「でも、なんでく黒粘体くかかってたのに舌噛み千切れたんだろうね?」

「同士の歯に何か永久化された魔法がかつてるんじゃないかな?」

「そんなまさか、ハハハ・・・あ。昨日洒落でく研磨くかけてたかも」

無表情に殴り掛かってきたエイジの、瞬き一つせぬ死んだ目が超怖かった秋の夕暮。

自重つて、そこらへんに落っこちてないものかなあ、と思う自分であった。

<世界樹>それは盆栽で

草木も眠る丑三つ時・・・には少々早い刻限。

雲一つない星空に、月の輝く姿なく。

新月の晩。

殆どを闇に塗りつぶされた世界にて。

天を突くような巨大な剛直・・・<塔>に、粘り、纏わりつく存在があった。

見るもおぞましい、巨大な、粘体。

見るものが見れば<魔王スライム>などと呼んだかもしれない。

薄く薄く伸びれば<塔>をすっぽり覆ってしまうような面積を誇るそれが。

近目で見れば、ゆっくりと。

遠目で見れば、結構な速さで。

螺旋を描くように、上から下へと。

<塔>外壁を、舐っていた。

・・・と、他人事のように言っているが。

自分です、御機嫌よう。

只今、現在進行形で<塔>外壁を這いずり回っております。

ぬちゃぬちゃと。

ねちゃねちゃと。

ずぞぞろろろろおお・・・と。

<塔>外壁に伝う木の根やツタ、苔やらなにやらの有機物を飲み込んで綺麗サツパリ消化しているのです。

先端から根本へ向けて、なまめかしく。

・・・べ、別にいやらしい意味でやってるんじゃないんだからね！

勘違いしないでよねっ。

・・・ホントだよ？ ホントだよ？

ああ、嘘だとも。（開き直った）

日中は、尊い運動行為をするための方便として使わなかったのだが・
・ぶつちやけるといわゆる<禁じ手>のコレを使って樹木草原有
象無象、まとめて処理は出来たのだ。

お試し労働の結果を受け「あー、成長するには経験値が少なすぎる
ー」とばかりに尊い運動とやらを破棄した訳で。
ぺっ無駄な手間取らせやがって。

そんなこんなで、ウゾウゾと塔を丸齧るが如き粘体の大きさ、不気
味さを周囲に見られぬよう、深夜密かにこうして一人<塔>清掃を
決行しているわけであった。

見たら一般人がトラウマ持ちちゃうしね・・・。

安心の新月クオリティ、真っ暗でスライムの肌センサー大活躍。
むしろ闇が身になじむ、実によくなじむぞ！

しかしながら体スライムでも中身人間な自分であるので。

お、おばけがでたらどうしようー、きゃーこわーい。（超棒読みで）

むしろお化けが逃げて行く様がありありと浮かぶ。

ふっへっへっへ、幽霊のお嬢ちゃん、霊体だからって安心したがウ
又の不運よーぐへへー、いけローパー、君に決めた！ ローパー、
触手攻撃だ！ 効果は抜群だ らめえええええ・・・。
大人のポケットモンスターと来たもんだーふーはははー。

おおっといけねえ、ついトリップして粘体人形劇しちまったぜ！ 8
禁のな！

・・・あれ、おかしいな。

今日は酒飲んでないのにテンションが変、だぞ？
体が熱く、頭がおかしいつ。(「いつものことじゃない？」と、脳内の皆にツッコまれた気がしたが自分は元気です)
そのくせ、やけに意識が鮮明になってくる・・・こ、これはつまさかっ！？
ついに自分に隠された未知の力が開眼した拳句に世界を縮めてしま
うのかひゃっはー、この爺札束なんてもってやがるぜー。

・・・その時は気付かなかったのだが、後に樹や草と一緒にイケナイ葉っぱとかも取り込んで消化してた事が発覚。
危うくラリラリになったまま宿に戻って「未成年者の教育に悪いので薬中死すべし」と肅清の憂き目にあうところであつたわ・・・。

朝の目覚めは健やかに、おはようっ！
ぐるっと一回りく塔>の外壁掃除が終わつたのが深夜1時くらいだつたか。

飛んで宿へ戻って、ノソノソと水飲みに起きてきたエリスに遭遇。
お土産と称して木刀を手渡し(スライム流水分絞り及び粘体削出技法による逸品、くせかいじゅ>の酸焼印入り)、自室ベッドにダイ
ブーンズズ。

パチツと目を開けると、もう朝だつた。

どこからかパンを焼く香ばしい香りがしてくる。

しかしながら・・・あー、そろそろ米が、コメが食べたい。

悲しいかな、現在稲の存在は確認できておりません。

F C K O F F。

ブツク フと似ているね？

くそっ、くそっ、買い叩きやがってあの糞店めがっ。

「ホント外道め F U K O F F ー つときたもんだー」
ブックオ のテーマに乗せて世界への呪詛を垂れ流す。
あれ、さわやかな目覚めが自分の毒で穢れた・・・ぞ・・・？

まあいい、いつものことだ、と、いろいろ棚上げして。

自分は適当に顔を洗うと、食堂に向い。

ガツツリとパンを食う事にした。

焼きたてだと美味しいねっ。

もしかもしかと小麦の味を堪能。

おや、食べるのに夢中で気にもしてなかったけど、食堂の客が自分一人ってどういうことぞんしょ？

「お客さんのツレは三人揃って散歩に行っただけだよー」

宿の女将さんに聞いてみたら、そんなつれないお返事。

そうか、残ってたのが自分だけだったか。

散歩ってことは、そのうち帰ってくるか・・・等と考えつつ、のんびり窓越しに外を眺めていると。

視界を横切る、高速の人影。

何か切迫した案件でも抱えてるのだろうか、厳しい顔色のエイジであつた。

ああ、急いでいてもく飛行>での低空滑空は危ないからしちやダメだぞ？

「同士つ、大変だ！ <塔>がつ」

「外壁清掃なら自分の仕業です」

「なん・・・だと・・・」

緊急要件っぽい空気を即時破壊してみる。

いよし、良い反応だ。

実にいい反応だ。

夜中密かにボツチで作業した苦勞が報われた。

あと、おはようございます。

「ああ、おはよう。いつの間にあんな綺麗にしたんだい・・・」
コツコツ空飛んで剪定作業とかするんだらうなと楽しみにしてたのに、なんて言いだすエイジ。

ああ、それはすまなかつたね。

御馳走様でした。

その、なんだ。

実は黙っていたんだが。

その気になれば、さほど労せずして空中庭園とか範囲剪定できるんだ、てへぺる！

かくかくしかじかー、と、自分の<禁じ手>及び外の人成長の可能性追求を兼ねて昨日の労働したんだー、とネタばらし。

「いろいろ言いたいこともあるけど。ひとまず作業が絡む場合は、一言僕等に声かけるように」

それに一人であれこれ実験するんじゃ手が足りないだろう？ とばかりに笑むエイジさん超イケメン。

素敵っ、ジオを適当にレイプしていいぞ！

「えい当身。 当身。 当身。」

「げえジオさんいつの間そこにオウフオウフ、死んじゃう、死んじゃう！」

人目があるから瞬間的に部分スライム変身で誤魔化さざるを得ないっ。

そとしてのランダムに散らされると全部への対処が間に合わぬ・・・
そこまで計算してのジオの当身連射に自分悶絶。

「オウフ、とメリウは神官のねちっこい責め苦に悶絶するのであった・・・しかしその苦痛の中に輝く愉悦に気づき始める自分を発見

し・・・グフフ」

「おいその肅女、脳内妄想小説が口から垂れ流しになってるぞひとまず正座、エイジそこから岩拾ってきて岩」

「なん・・・だと・・・」（言いつつ律儀に正座するエリスさんマジ痴ロリン）

流れるような速度で「宿の前で正座して岩を抱き涙する少女」の完成である。

なにこの非日常系高速展開。

もうそろそろエリスったら正座で登場してもおかしくないね！

むしろそうしようか。

「それは勘弁して下さいお代官様・・・エイジさん散らせていいですから」

「うん、ひとまず穴掘るから同士手伝つてくれる？ 地獄まで空け

ばいいからさ・・・この腐念ブツ廃棄するのに」

ついにエイジにも見捨てられた・・・？

馬鹿な、仏のエイジすらついに。

繰り返しネタが過ぎて我慢しきれなくなったか！ やっぱりな！（

わかってたら止め・・・ても駄目だったんだし、もういいよね！（

流石のエリスも「掘るの手伝って・・・二人がかりで掘る、だなん

て、いやらしいっ」とは言い出せぬ空気である。

すげえ、痴ロリンに自重させるとは。

いつそエイジにこのままでいてもらって・・・自分含め周囲の胃がもたないな、そうなるよ。

「そろそろ、隠すという言葉の意味がフルオープンと同義になってきてますからなあ」

ジオの眩きを耳が拾うか否かのタイミングで、無言でスコップ差し出してきたエイジ。

目が怖すぎて真直ぐに見れない。

エイジの負の想念が自分に矛先を向けぬよう、こちらも無言でスコップを受け取ると。

「落ち着くんだ同士エイジ」

ひとまず目の据わった同士を諭しにかかる。

間違っても、目は合わせない。

見たら死ぬってレベル。

象の足か貴様。

すわ、擁護してくれるのメリッさんだけよ！ と、正座オブジェの

エリスが妄言を口走っている。

この流れでどうして擁護されると思っているのかが謎である。

そろそろ、懲りておくべきだと思うんだ・・・腐趣味は秘めてこそ、という程度には。

「場所を変えよう。村の中で大穴あけるわけにはいかない」

「ちょ、ま、メリッさん襟首つかまないでくださいあゝ」

こうして結構セメントな死体遺棄的雰囲気のもとに行われた第38回痴ロリンに反省を促そう大会は、その後ツメ甘くエイジが仏心出したところでエリスが調子に乗ってしまったため御破算に。

くそ、今度こそは最低限外に腐臭を漏らすことを辞めさせられると思っただのにつ。

「痴ロリン、復唱せよ。 <口走らない・表情に出さない・同好者を増やさない>」

「口走らない。 表情に出さない。 同好者を増やさない。 全部

ウソだ」

「嘘つかない」

「スイマセン」

いかん、普通に遊んでしまう。

基本面白い子だから始末に負えない。
ノリがいい人材って貴重ですよね？

「口走らない。表情に出さない。同好者を増やさない」
キリツとした表情で復唱する正座オブジェ痴口リン。
ふむ、今回はこんなもので良しとするか。

「あの、なんで僕まで正座なんでしょうか」
「ダダ甘の先生は反省してください」
「スイマセン」
ふむ、今回はこんなものだね？

「思わずウチも正座してしまいましたか」
「しらがな」
ふむ、今回もスルー。

「ちょ、ウチだけ対応厳しくないですか？」
「やだなあ、いつものことじゃない〜こやつめ、ははは」
「ハハハ。鬱だ死のう」
「イキ口？」
「何故疑問形かな？」
テンプレテンプレ。

そんなこんなで現在真昼間。
ジオとエリスは「園芸に興味ないんで」とばかりに肉体労働から逃げ出した。
きつとそこらへんで葉っぱでも噛んで卑猥な言葉でも羅列してるんだろっいいいなあ楽しそうだなあ。

今度幻影で連中に化けて下半身だけ露出徘徊とかしてやろうかしら？

「そんな妄想をしながらお送りいたします、空中庭園の現状シリーズ。 第二回です」

図面片手に並木の剪定に、忙しく斬馬刀を振るう自分。

すっかり剪定バサミになっちゃって、哀れな刀だ。（犯人、談）

長くて便利だった、別に動物を斬らなければいけないわけでもなかった、今は反省していぬ。

メリウは反省していませんでした。

「メリっさん、なにラリってんの？」

いけない麻とかは纏めておいてね、焼くのもダメだし地中に飛ばしちゃうから〜とか言いつつ、涼しい顔で間伐を行っているエイジ。

案外大味にザクザク行ってる所を見ると、彼の脳内設計図ではそこから辺更地にしてから再造園なのやもしれぬ。

あと、自分は正気です。

いけない葉っぱは深夜にゲフゲフ。

ひとまずは大急ぎで仕上げなければならぬわけでもない作業のためめんのんびり楽しもうと決定し、結局手作業にて空中庭園を再造園する事となり。

生産系の心得アリな二人が暇を持て余して作業する流れとなりました。

<塔>を巨大な幹に見立てたく世界樹>盆栽のいじり始め。

ふうむー、中心大樹が葉を横へ広げるタイプでよかったねえ。

杉系の樹だったらく世界樹>と言うより<檜>になつてたかねえ、などと談笑する。

ただ今、休憩の茶を飲みながらエイジとああでもないこうでもない

と盆栽剪定会議中。

大まかな雑木・雑草整理を半日で終え、造園計画は下準備完了という所。

あとは盆栽主役の大樹剪定、枝ぶり矯正、接木等の計画やら、大樹を中心とする空中庭園自体の再配置、設計関係をコツコツやっっていく方向で調整が進む。

うん、完成が楽しみだ。

「まあ、植物相手に何年かかるか分からない長期計画になっちゃうけどねえ」

普通の盆栽だつて100年スパンだったりするしねえ、とエイジと苦笑いを交換。

こついう時にも、不意に帰れないという現実が襲ってきて嫌だねえ。

「ふーむ。幾らかく塔>整備しなおしたら、他の国とか回ってみるのも考えないと」

そもそも、ここ周辺ってどんな政治宗教国家の柵内なんだろうー。

「うーん、そこらへんは難しい問題だよね」

そもそも大概交流とかあるのかな、この国って、と、エイジも首をかしげたり。

しまったなあ、仲間回収の事くらいしか考えてなくてそこらのことを詳しく聞いてないなあ。

一段落したら、一度首都行きますかいのう？

盆栽の日々は、それからしばし続いた。

日常それは米騒動

毎日がエブリデイ、こんにちは、自分です。

ひとまず日々盆栽時々研究はたまた実験もしくは酒盛り、といった充実した日々を送っております・・・「元の日常」に戻る手がかりは、まるつきり無いけどねっ。

そんな中、自棄になって酒浸り〜とかにならずに過ごせる友人たちが実に頼もしく。

予想以上に脳天気な、こちらの日常が流れていた。

エイジはよく自分と連んで盆栽いじったり<世界樹>内部の清掃整理復旧したり痴チロリンを埋めたりしている。
頼もしき相棒的存在である。

今日も今日とて、共同作業途中だったりする。

本日の作業は、ズバアリ！

「田植え」である。

先日の実験の際、ついに。

ついに！

ついに！！

「稲」の入手に成功しました万歳っ。

入手経路はといえば・・・うん、秘密にしておく。

伏線は多い方がよいからなメメタア。

結論として米生産が可能になったということなんだよワトソン君！

「おーいメリっさんー、脳内麻薬でラリってないで働けー」
すいませんエイジさん、と、自分も作業再開。

田圃作りの第二段（第一段の地均しとかは＜黒粘体＞前提による自分メテオによって終了）、水張って稲穂から育て上げた苗の入植である。

テストケースでもあるので一反のみの田に、エイジと二人スネまで泥水に浸かりつつ。

苗を刺す、刺す、刺す。

一定間隔に、まっすぐに。

柔らかな泥に、刺す刺す刺す。

何度も、何度も、何度も。

懐かしすぎて楽しい。

田植えなんて何十年ぶりだ……。

「自前の体だったら真つ先に腰が死んでたよね」

外の人すごいよ！ 流石鍛え上げられた超肉体。

水面を滑るがごとく苗を植えるエイジの台詞に、自分も同意だが少しおちつけ。

キャラが自分みたいなのテンションになってるぞ？

「おおつといけない。狂人と同等なのは人としてダメだよね。

僕猛省」

サラッと自分Disるのやめてくださいあ。

「つと、狂ったエイジが頑張ってくれたおかげで田植え終了だー、ひゅう！」

今度から「くるえいじ」とかって呼んでやろうふははー、などとオチャラケつつ。

自分たちは田圃から上がると、一息つく。

手足洗うのが面倒なので＜洗濯＞魔法でパッと済ませ。

今し方までの労働の成果を肴に、酒「まだ昼間な？」……酒「まだ昼」……さ「した」コポオ？

繰り返しネタに厳しいエイジ先生であった。
エイジの手刀マジ刃物。

「しかしまあ、同士の執念ついに、という感じだね」
僕も米ご飯食べたかったから嬉しいけどさ、と、規則正しく苗が並ぶ田圃を眺めご満悦。

だけど、實際口にできるのはまだ遠いね、と苦笑いを浮かべる同士。ククク、それは・・・間違いだつ。

「今日中に収穫して食うよ？」
だって、もう自分、我慢出来ないもの・・・。
そう、アレで稲穂が手に入るということは。
つまりはコレの原料も無尽蔵だということだ。

「いや、ちよつと何言ってるか分から・・・!?!」
また変な空気吸って妄言を、と自分を窘めようとしたエイジが、止まる。

自分が取り出した「それ」が、なんなのか理解したためである。

<成長促進剤>

ビバ、ゲーム的ファンタジイイイー。

薬学スキル素敵イイイ。

「竜の血から生成されるこれは純粹なる生命力によって生物の成長を大きく助け特に植物との相性がよく（中略）ケミカルXも目じやないぜ！」

言つが早いか田植えの終わった田圃にドブドブと。

ドス赤い液体を投入。

黒に近い赤色が、泥水にジワジワと混じりこんでいき。

即時。

田圃に変化が、訪れる。

泥水に走る波紋が苗を行き過ぎるタイミングで。

ざあつと、解せぬ速度で苗は稲穂の重さに頭を垂れるまでに成長していく。

定点カメラを使ったドキュメンタリーじみた光景に、男二人して無言。

いやあ、秋の青空に映える黄金の実りですねえ。

「さあ、収穫だ」

「なんだこのコレジャナイ感は・・・あとこの米、体に悪そう」

んだとー、んじゃ同土はずっとパン齧って生きればいいよ！

自分は食う。

こめをくわせる。

自分は両手で斬馬刀を握り締めると。

丹精込めて（薬漬けで）育て上げた愛しい稲穂共を、バツサバツサと刈り始めるのだった。

米俵8つ分。

実に500kg近い米の収穫が、成った。

・・・あつれ、普通に食う米に困らない量が手に入った・・・ぞ・・・？

「試験田圃に1反は、広すぎたかね？」

一升炊きの羽釜（鉄工のエイジ渾身の力作）を使って銀シャリを炊きつつ。

色々呆れた感じのエイジに聞いてみる。

「なんだかんだで皆に振る舞うとかするんでしょ？　ならこんなもんでいいんじゃないかな？」
流石相棒、わかってらっしゃる。
美味しいものは共有したいしね！。

「とか言いつつ、最初の御飯は独り占めするメリウであった、まる「現状で言うなら二人じめじゃね？　働いた奴の特権さね！」
それに流石の自分でも一升飯は食べ切れない・・・いや、外の人のスペックなら、あるいは・・・。

「イケる!?!」

「自重しろ」

はい、スイマセン。

始めチヨロチヨロ中パツパ、ジユウジユウ吹いたら火を引いて、赤子泣いても蓋取るな」と歌いつつ。
ついに。

御開帳。

くぱあ。

分厚い蓋が取り除かれて。

立ち上る、芳しい湯気の白さよ懐かしゅう。

若干の焦げの香りもまた甘く。

手早く飯切り、再度蓋。

「くっ」

背後で唾飲むエイジの気配、まだだまだまだ蒸らしを待つて。

「くっなへー!」

「いえー！」

放り投げるような勢いで蓋を取り。

手早く茶碗に山盛り白米。

塩漬け野菜をその上に乗せたら、後はもう。

「「いただきますっ」「」

・・・次は、ネギ味噌用意してやるからなっ！

と、いうことがあったのさ。

ジト目でこちらを見てくるジオとエリス。

ん、どうかしたのかな？

「あの、そんな話を・・・夕飯食べ終わった後にされましても」

「しかも、宿のメニューのまま・・・パンだったし」

そうだね、プロテインだね。

「「何故そのお米様が食卓に上らなかつたか問い質しているんだっ
！」」

二人してテーブルに身を乗り出してこちらを威嚇。

うん、その。

なんというか、ね。

「働かざるもの食うべからずってことで」

食後の茶を取りに行っていたエイジが、席に付きつつ威嚇者達に答えを告げる。

まあ、なんだ。

米の促成栽培実験は大成功だったわけなんだけど。

新規分の田植えと、収穫、乾燥に脱穀が、ね？

大変なのだよ手作業なので。

まだ軌道に乗ってないので村人とかく魔族>さん達に動員要請はしづらいし……。

そんな訳で。

「明日から数日、お手伝いしてくれる人が居ないかなあ……チラッ」

「……うっわ、ムカツクッ」

悔しい、でも手伝わざるをえないっ、と頂垂れるジオとエリスを愉快に眺め。

「農奴二人、ゲットだぜー」

言おうとした台詞をエイジに取られ、記念すべき初米収穫日は終了したのだった。

田植え初挑戦のエリスが大はしゃぎ。

何がそんなに楽しいのかいのう、ワシあ腰が痛くてたまらんわあ……ごめん嘘です、外の人はそんなにヤワじゃありませんでした。

懐かしいねえ、等と言いながらのんびり苗を植えていく自分たち大人三人を後目に、自称成人正体未成年が凄まじい勢いで田圃の泥水かき分けて至極楽しげに田植えに邁進していた。

試験第二弾に作成したもう一反分の田圃に、みるみる苗が突き刺さっていく。

おお、機械要らず。

「たーのしかつたー」

エリスさん泥遊びレベルですっかりご機嫌。

顔中に泥はねてるぞい？

丸ごとく洗濯>しちやるから、田圃から上がっておいでー。

「はい」

うん、素直でよろしい。

珍しく腐臭のしない妹分を好ましく思いつつ。

田から上がった皆に、一息入れようと声をかけた。

皆がそれを感じたのは、茶を飲みつつ休憩していた、そんな最中。皆の鼻をくすぐる、鉄色の風。

「何だろね、この死臭？」

風は、南から。

一際強い、血の腐った臭い。

即時臨戦態勢を取る周囲と、全視覚を開放する自分。

・・・目に見えぬ系の敵襲来も予想したけど、そんなモノは無かったぜ。

「あー、あれですな、見えました」

ジオが指差す遥か彼方。

その集団は、なんとなく既視感を感じさせる装いで。

長い放浪に削られ続けたその姿。

服というよりは、すでにボロ布未滴が体に引っかかっている、といった風情。

死神の列って、あんな感じなのかねえ。

・・・とか言ってる場合じゃなさそうだ。

だってどう見ても、あの人たち。

「<魔族>さん達の集団に、見えるね」

納刀しつつかいうエイジ。

まだかなりの距離を残してはいるが、すでに彼らの惨状を見て取ったか。

敵でない、と、判断を下したようだ。

「メリウ、行きますよ？」

その集団の状態を見て取ったか、たまらずジオが飛び出した。自分も無言で、それに続く。

「行ってらっしゃい救急箱さ〜」

何エリス、そのセンス無いネーミングッ。

今から大仕事になる予感しかしないんだから氣勢そがないでっ。

南から来る、死臭纏う、その集団。

千人近い彼らは。

その半数ほどが。

死んでいた。

走り寄ってくる自分たちを見たく魔族さん達の目は、すでに濁りきっていた。

物理的に、ではなく、精神的に。

常に奪われ続けた者の目、とでもいえばいいのか。

生きてる限り歩き続ける、とでも呪いを喰らったかのように、のろのろと歩を重ねる。

蠅集る死体を、背負ったまま。

引きずる足の、爪さえ無く。

それでも、前に向かって進む。

そんな、集団だった。

やるせなさ過ぎて、思わず泣きそうになる。
腐りかけた幼子を抱いて歩き続けている人なんかもいて、正直く中の
人への精神力だけだったらしばし動けないレベルである。

「メリウ。ひとまず生きてる方の手当てを。落ち着いたら順次・

・蘇生、行きますよ」

すでに覚悟完了したジオの声。

流石二度目。

いや、これが初見でも同じか。

すぐさま行動開始したジオの背に向け、自分は一言。

「応」

腹くくって、答えた。

・・・そこから数時間分の記憶が、曖昧。

気が付くと、自分は地べたに大の字。

肉体的にはさほどの疲労感もないが、精神的には途轍もない負荷が
かかっている。

あー、えー、自分、何やってたっけ・・・。

「メリウ？」

秋晴れの、空を遮る、ジオの顔。

彫の深さに、影さらに深く・・・超怖い。

・・・良い気付けだ、さんきゅう。

「ほう？ この超絶イケメン様の何が着付けになったんですかのうち？」

「顔の造形」

「チネエ！」

「だがスライムガード。ちなみに強酸性」

「手がっ、手がああああ」

「「ここまでテンプレー」」

ありがとう、ちよいと元気出た。

ジオ、お疲れさん。

起き上がって周囲を見れば、すでに日も陰りだし。

戦場のような有様の祭りあと。

芋煮用の巨大鍋がその威容に影落とし、静かにたたずむシユールな光景。

「メリウも。大活躍でしたね食糧配給とかまで」

そんな事をいうジオの手には、二つの茶碗。

ああ、なんだかんだで行き渡ったんだっけ、これ。

差し出された茶碗を手取る。

ほんのり温かな、粥が入っている。

そうだそうだ、さっき自分が作ったっけ。

「お疲れさまー、二人ともー」

そう声をかけてきたのは、新たなく魔族>集団をく塔>へ誘導する役を引き受けた片割れのエリスだった。

手には、ジオと同じく茶碗が二つ。

「エイジさんと私の分ー」

べ、別に二人に、と思って持ってきたはいいけどすでに二人とも持

つてた、とかじゃないんだからねっ。

とか言いつつ、箸も使わずズロロロ、と粥を飲み干すエリスさん超男前。

・・・エイジはそもそもここにいないぞう。

今はまだく塔>でテント設営とかやってるはずだし。

「ヌルイー、けど美味しいのがなんか悔しいー」

鶏粥にしたからねえ、最悪冷たくなってても食べられなくはない味になってる、はず。

最初味見たあとは、ガンガン作ることに専念したんで味変わっちゃってるかもしれないが・・・ん、そこそこ美味し。

痴口リンも料理覚えるかね？

いろいろ便利よ？

「私食べる人、あなた作る人イタア、グーで殴ったね!？」

「貴様は拳骨でも喰らうが良い」

もう強制的に叩き込んでやるから覚悟せよ。

実験的な意味も含めてな・・・。

「まあまあ、今日収穫した二反分のコメを全部粥にしたんですし、量的には余るでしょう」

量的な意味も考えて粥にしたんでしょう？、と仲介を買って出るジオに、自分は苦笑いしつつ頷く。

「あとは、体が弱ってるなら半固形にした方が消化にいいかな、とか鶏入れて栄養アップだ、とかは考えたけど」

ああ、死んだ目をして鶏モモとか手羽とか捌きまくった記憶がよみがえって鬱になる。

エリスはさっさと逃げ出しやがったしなあ・・・チラア。

「都会っ子の私には鶏の処理はシヨツキングすぎたんだぜ・・・手
伝えなくてゴメンナサイ」

ああ、そいつは仕方ない。

初めて見たら、そりゃ心に傷を負うわな！

・・・そのうち呼吸するのと同レベルでバラせるように教育してや
ろう・・・。

「さて、そろそろ日も落ちますし、村に戻りましょうか」

気を利かせてか、周囲のあと片付を率先して行なってくれるジオ。

自分より二歩先くらいで癒しの力を振るったタフネスを思い出し、
ちと凹む。

あー、心のタフさが、まだ足りんね自分。

「ジオさんもメリっさんも、お疲れ様」

あらかたの食器や大鍋を豪快に無限袋に放り込むというゴミ処理的
清掃を終えたジオと自分に、エリスが満面の笑みでサムズアップ。

イキロ！ だっ たっ け？ と、首を傾げる仕草が疲れた大人組の笑
みを誘う。

そうそう、にゅっと親指を天に向けて。

「イキロ！」

あー、なんか久々に腹から声出してこのフレーズ言った気がするわ。

そのお陰かどうかは分からないけど。

不思議と、死んでいた心が。

生き返った、気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4718w/>

異世界っばいもの（仮）

2011年12月12日23時50分発行